
THREE WORLD

オリマリオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THREE WORLD

【Nコード】

N2471R

【作者名】

オリマリオ

【あらすじ】

弱くて、痩せてて、貧乏という、いじめ対象になりやすい条件が三拍子そろった少年、矢倉潤。
ある日彼は、一つの流れ星に、たった一つのお願いをした。

「強くなりたい」

その一つの願いで、彼の人生と、世界が変わっていく……。

0、プロローグ（前書き）

この小説に出てくる地名、人名等は実在しても全くの無関係なのでご了承ください。

文章の構成を一部見直ししています。

死亡シーン等、残酷なシーンがあるのでご了承ください。

0、プロローグ

僕の名前は矢倉潤^{やぐらじゅん}。自分で言うのもなんだけど、弱くて痩せてて、おまけに貧乏な家に住んでる中学一年生。もうすぐ二年生になろうというところなんだけど。

毎日のように倉庫に呼び出されては殴られ……。そうになる。で、また呼び出されて、殴られ……。そうになる。

なぜ殴られないかと言えば、何故だか、恐怖心が頂点に達して、避けてしまいうらしい。そのせいでさらに相手の怒りがかってしまい、大変な目にあう。でも、呼び出されたら必ず行く。家に乗り込まれたりしたらたまないから。

これからはじまるのは、僕の何気ない日常から始まった壮絶な物語。

1、平和？な日常

「おい」

後ろから声をかけられた。自分よりも十センチくらいは大きい男が、睨むようにこちらを見てきた。

「おまえ、今日の午後九時、学校裏の倉庫に来い」

つまり、喧嘩を売られたということ。だけど、僕はそれを拒否した。
「無理です」

「ああん！？お前ここで痛い目あいたいのかあ！？」

「いや、そういうわけではなくて・・・」

「じゃあ、どういうわけだ。言ってみろや」

向こうは尚もドスを聞かせた声で僕に向かって凄みをかけてくる。

僕は、内心、自分にも呆れながら口を開いた。

「実はもう、喧嘩売られて・・・被ってます。時間」

「なんだとおっ！ そいつの名前は？」

「えと・・・確か、二年二組の高橋っていう人・・・」

「高橋だな！今日のところは免除してやる！ 覚えとけ！」

免除という使い方が微妙に違う気がするが、捨て台詞のような最後の罵声に対して僕は、一つの姿勢しか見せようがなかった。

「あ、はひいいいっ」

悲鳴のように返事をした。実際、喧嘩はすでに売られていた。さっきの人で四人目だ。なんでこんなことを、学校の廊下で平然とできるのか不思議でたまらなかった。学校なんて、結局は平和という仮面をかぶって世の中に顔を出しているのだろうか。

僕には、そういうのは分らない。そういうのは、教師でも政治化でもなんでも、専門の人に任せればいい。さらに学校をよくするために生徒会の目安箱とかいっても、実際入れる人はほとんどいない。僕も自分のことではいいっぱいだった。そりゃあそうだ。ほぼ毎日こんなことが繰り返されているのだから。

で、その日の夜九時、一番に喧嘩を売ってきた高橋のために、倉庫へと足を運んだ。

「よう。来たな」

そこには、高橋……。だけでなく、その後に喧嘩を売ってきた三人もいた。僕は呆れと恐怖と共に思う。今日は免除するって皆言っていたじゃないか。高橋は一步前に出て、指示を出した。

「野郎ども！あのチビネズミを叩きのめすぞ！」

「おおっ！」

そういつて高橋達は僕に向かって真正面から襲い掛かってきた。高橋が右手を握り締め、それをこちらへと突き出してきた。そのとき、僕の恐怖心は頂点に達した。

「ひいいいっ！」

顔に当たりそうになっていた拳を右に体ごと避けた。うつ伏せの状態になったところに、足を掴まれそうになる。

「うわあっ！」

体を起こすと同時に足を引つ込めた。だが、その直後に、足を引つ掛けられ、仰向けに倒れる。一人の男が拳をつきたてて、それを振り下ろしてくる。殴られたくない。でも、殴り返す勇氣も、相手を倒せるほどの力もない。僕は横にクルクルと回りながら避けた。だが、そこにはすでに、別の男が待ち伏せていた。仰向けになったところで、腹を踏みつけられる。そのまま、胸倉を掴まれ、持ち上げられる。足が地面から離れ、完全に浮いた状態になった。

終わったな。今日の僕。

そう感じていたころ、視界の左半分がまぶしい光に照らされる。

「こら！　そこで何をしているんだ！」

「やべ！警備員の爺が来た」

「撤収すつぞ！」

胸倉を突き放された。そのまま四人は逃げていった。顔を見られるとまずいのだろう。ああいうのは、将来が いいものになるとは到底思えない。もちろん、自分のようなやつもそうなんだろうけど。警

備員が呆れた顔で座り込んだ僕を見た。

「また君か。喧嘩を売られたら、無視しなさいって言ってるだろ」

「はい……すいません」

なんで自分が謝らなければならなのだろう。僕はただ、呼び出されて、殴られないように逃げただけだ。喧嘩を売ったわけでも、相手を殴ったわけでもない。被害者を守るのも大事かもしれないが、加害者を取り締まるのもまた、同じように大切なはずだ。

警備員のおじさんもいなくなったところで、残されたのは僕一人だ。特にここですることはない。殴る人も、注意する人もいないのに、ここにいない必要はない。僕は、だれかに見つからないうちに、家へと帰っていった。

家に帰ると、母さんが出迎えてくれた。今は午後九時半。大人が起きていてもおかしくない時間帯だ。

うちは母さんと僕しかいなかった。父さんは、僕が小さいころに離婚してどこかへいったらしい。だから、今まで母さんは女手一つで働いて僕を育てた。けど、母さん一人というのと、働いている会社が小さいせいで、給料が少なく、食事も貧相なものしか食べられなかった。そのせいで、僕は痩せ細った体つきになり、それに比例するように、気も弱くなった。で、こんな状態の僕を標的にして、毎日のようにいじめや喧嘩を受けていた。でも、そのことを母さんに話す気は起きなかった。小さいころからずっとだ。もし、知っていたとしても、そのことに触れたくはなかった。僕の小さなプライドだった。

「潤、何か食べる？」

「いい。風呂入って寝る」

「そう……」

うちは貧乏なので、晩御飯も肉や魚なんてご馳走なほどだった。近所からもらった野菜が主食だった。朝もご飯一杯が多いくらいだった。だから、給食だけが、大量に食べる機会だった。よく、こつそ

りとデザートを持ち帰るのもしばしば。

風呂から上がって、部屋の電気をつける。殺風景な部屋だ。ベッドと机があるだけだった。クローゼットがあっただが、特にしまうものもなく、使っていなかった。ただ、僕はこの方が落ち着いた。無駄なものない、本当に自分だけの空間のような感覚。

僕はその感覚に浸りながら、ベッドにその体をつずめた。

2、広まる噂

次の日、教室に入った僕は、いつもとちがう教室の雰囲気を感じた。なにかに興味を持ち、それにたかっているような気がする。

「潤！ 聞いた？」

「なにを？」

「えー。それも知らないのー」

そんな口調で話しかけてきたのは親友の船木勇^{ふなき いさむ}。こんな僕の唯一の友達といつてもいいほどだった。こんな自分を受け入れ、他の人となんの変わりもなく話かけてくれる。つまりは、差別しないのだ。それが親友というものだろう。

「今、噂になってる話なんだけどな。これがなんていうか……・すつこい探究心をくすぐるような話なんだよ」

「へえー」

僕は勇の話を聞くことにした。探究心とかはおいというて、噂とかは聞いておきたいのが僕の性分だった。それが本当でも、嘘でも。

「実は最近、ある中学生が目撃した話で——」

ある夜の日のこと、星空を見上げる者がいて、それから少ししたら、すごい白くて光る階段が現れた。

そいつはその階段を躊躇なく上って行って、途中で階段が途切れていると思ったら、そこからその人は消えていってしまった——

っていうお話なんだけど。実はこの話、いろいろと説があって「その話を聞いている僕は、すでに足が震えていた。季節としては冬だが、今日は快晴で、雪どころか雨も振らぬ、寒くない日だった。つまりは恐怖心で足が震えていたのだ。」

「その階段は天国に上る階段だとか、異世界に繋がってるとかいろいろ説があるらしい」

「そ．．．そそそそそーなんだあ．．．．．あは．．．．．はは．．．．．」

天国に上る階段ならその人死んでるじゃん。と言おうとしたが、震えてるのでうまく言えなかった。

「はい、席につけー」

担任が入ってくる。僕と勇は席が隣だった。横に勇が座る。全員が座ったところ、担任がああ噂の話を持ち出してきた。

「どうやら、空の階段の噂が広まっているらしいが、そんなのは、存在しない。この根拠のない噂は、はやいうちにやめておけよ」

どうやら、教師の間では、この噂は、「空の階段の噂」として広まっ
っているらしい。そして、担任は、現実主義者だと知った。

「こういうのを広める力があつたら、来週のテストに向けて勉強で
もしておけ」

僕は担任の話を半分聞き流していた。よく考えれば、噂を広める力
があるんだから、その人はとても口達者な人だな、とか言えば、空
気もよくなるんじゃないかと。

「さ、次の時間は美術だろ、はやく美術室に行けよー」

誰が時間とったと思ってるんだよ。と、言いたい気持ちを抑えて、
机から美術の教科書とノートを取り出し、勇とともに美術室へと向
かった。

授業全てが終わったところで、カバンを背負い、勇を連れて学校
を出た。帰りは同じだ。どちらも帰宅部だったからだ。僕はこんな
体だからやつても永久補欠と分かっていた。でも、勇は何にも入っ
てないのは、正直だれでも驚くはずだ。勇は、勉強はそこそこだが、
運動はトコトンできるやつだ。野球をやらせればホームランを打つ
し、サッカーをやらせれば、ボールは絶対奪わせない。バスケをや
らせればダンクを決めるし（そんなに身長ないのに、ジャンプ力で
ダンクする）、とかなりの運動神経の持ち主なのに、部活には入ら
なかった。

「なあ」

勇が話しかけてきた。僕は返答し、質問を待った。

「あの噂、潤は信じる？」

「うーん……」

噂なんて信じるも信じないも自由だ。科学的な根拠を挙げて否定する必要はないし、理想とかロマンを主張して、肯定する必要もない。だから僕は、その中間の答えを出した。

「信じられるような話じゃないけど、もしあったら、見てみたいとは思う」

「ふーん」

そこで一つの会話が終わった。僕は話題を切り出した。

「ところで昨日のお笑い見た？」

「あー、見た見た。アホナンデスが面白かったよな」

「うん。あれは面白かった」

アホナンデスという芸人の話題になって、そこから別の芸人の話になって、芸人のしりとりになって、三語で終わった。僕はその三語目で答えられなく、終わった。で、ちょっとしらけた空気になった。でも、そんな空気を打ち破るように、あたりが暗くなり、雷鳴が轟き始めた。

「降るかな」

「たぶん、降るんじゃない」

「じゃ、急ごうぜ」

勇に急かされて、少し足早に帰り道を歩いた。僕の家は勇よりも近いところにあるが、方向が一緒なので、ほぼ毎日一緒に帰っていた。しばらく歩いた。僕の家は学校から一キロだが、勇は二キロもある。二人とも自転車で通学すれば、はやく帰れるからいいのだが、あいにく、三キロ以上学校から離れていないと自転車は使えなかった。

だが、今日は歩いていなければ見つけれなかったものを見つけた。歩いている途中、背後からかなりの光が溢れ出た。僕はすぐに後ろを振り返る。あれは……。

白き光に包まれた階段が空へと続いている。途中で途切れている。その階段は、まさしく噂の階段だ。

「い．．．．．いさ．．．．．勇．．．．．」

「どーしたー」

勇が後ろを振り返る。だが、今までと何も変わらない表情で話しかけてきた。もしかして、あれが見えないのか！ いや、まさかそんなはずはない。あれだけの光を放つほどなんだから気づかないはずはない。

「あ．．．．．あれ．．．．．あれ．．．．．」

ビクビクしながら僕は階段の方を指差す。だが、勇はやはり階段が見えていないようで、首を傾げることしかなかった。

「なんだよ。ただの空じゃん。曇ってるけど」

「なんで！？ なんて見えないんだ！？ 僕しかあれは見えないのか！

「まさか、空まで怖いわけじゃないだろ。そりゃ、俺も空から落ちればコエーけど」

うう．．．．．。もしかして今日は疲れているのだろうか。ちょっと疲れてるのかも。ゆっくりと目をこすってみる。だが、階段は消えない。いまだに光を放っている。

「ほら、早くしないと雨降ってくるぞ」

そうだ。きつと今日噂を聞いたから意識のどこかに眠っていた幻覚が見えたんだ、きつと。うん。きつとそうだ。だから気にしないで帰ろう。

「うん。分かった」

そのまま僕と勇はそれぞれの家に帰っていった。

簡単に食事をとり、風呂に入って部屋のベッドへと飛び込む。ベッドの頭のところには窓がある。ゆっくりとカーテンを開けた。いつものまにか、雷鳴はやみ、雲はなかった。空には無数の星と月が見えた。窓を開け、新鮮な空気を取り入れる。空を見上げた。すると、流れ星が見えた。

生まれて初めて見る流れ星だった。願い事がかなうとか言ってい

た。誰かが。とりあえず僕は祈ることにした。こんなに疲れる日はほかにないかもしれない。でも、こんなに疲れたくない。そして、思った。こんな日常を変えてみたいと。そのためには、どんな願いにするか。そう思った矢先、一つの言葉が、口からもれるように出てきた。

「強くなりたい」

そう言った直後、目の前がまぶしくなる。ゆっくりと目を開けるとそこには、あの噂の階段が現れた。自分の部屋の窓の先に、あの噂の階段・・・・・・・・。

通常の私服だった僕は、それにつられるように足を踏み入れていった。ちゃんと歩ける。明らかにこれに対する恐怖心が強かったのに、今の僕は、躊躇なくその階段を上っていた。

僕は、これからいたいどうなるんだろう・・・・・・・・・・？

3、階段の先

僕は噂されている階段を上った。少しずつ、町の風景が見えてくる。僕の町って、こんなものだったんだな。と、ちよつと感動。でも、高くなるまで下を見ているとたぶん途中で足が止まると考え、途中から前を向いて歩いた。

かなりの段を上がったところ、部屋のようなものが見えてきた。噂や、帰りに見たときは、こんなのはなかった。もしかして、途切れてる階段って、実はここに繋がっていたのだろうか。

その部屋に入る。中には誰もいない。ベッド、小テーブル、椅子が三つ。テーブルの上には、一冊の本が置かれている。手にとって表紙を見た。

「ソルジャーマニユアル——ここに集う戦士のために——」

という題名だった。椅子に腰掛け、本を開く。その本を、誰もいない部屋で、しかも無言で僕はそれを読んでいた。その本の中には、意味不明の単語が数多く出てきた。

クリエイター、ブレイカー、モンスター、その他諸々——。そして、最後の文には、こう書かれていた。

ロント直属のソルジャーとして、がんばってください。

その一文を読み終えたとき、ハツとして後ろを振り返った。先ほど歩いてきた階段はすでになかった。しまった。

(もしかして僕、ここに閉じ込められた！？)

部屋には、ドアもあった。この先に何が待っているのだろう。ドアノブに手をかけたとき、ドアの張り紙に気づいた。かがんでそれを見ている。なにに、「隣の835号室に来るように」と書いてあった。その整った字はどう見ても女性の字だった。ここにいても何も始まらない。とりあえず、ドアを開け、部屋の外に出た。出た先は部屋がずらりと並ぶ廊下だった。とりあえず、この部屋の左隣にあった835号室のドアを開けた。

「ちょっと！入るならノックぐらいしなさいよ！」

「ひいいいっ！すいませんー！」

勢いよくドアを開める。で、ノックする。

「どうぞ」

一言の声がかかった。僕は小声で「失礼しまあーす」と言いながら入った。中には、しっかりと着こなした女性がいた。僕と年齢はあまり変わってないようだ。その女性は、ベッドに腰掛けながら話し始めた。

「見ない顔ね——あなた、新人？」

「え？いや、さあ、どうでしょう………？」

「もしかして、部屋、隣？」

「あ、はい。ドアに、ここにくるように張り紙がしてありました」

「光る階段を上った？」

「あ、はい！そしたら、部屋にたどり着いて——」

「ふーん………そういえば、まだ名前を言ってなかったね」
急に女の子のような口調で話してきた。どうやら、普通はこんな喋りをするようだ。

「私は桜井 奈々（さくらい なな）。この班の班長。階級はP」

「あ、僕は矢倉潤（やくら じゅん）といいます！」

僕はマニュアルに載っていた文章を思い起こす。ここには階級制度があつて、一番下がR。そこからQ、P、O、N………となつていき、Aの次に高いのがV、X、Z。そして、最高級がSだった。

「階級は………ま、新人だからRか」

勝手に決められるのはいやだったが、一応先輩だろうし、しょうがない。

「あ、それから、司令部から直々に言われてるんだけど」

奈々はこちらを向き直って言い始めた。

「私が潤のパートナーをやることになってるから」

「パートナーってことは、一緒に行動するってことですか？」

「うん。パートナーだから、階級によって言葉を改める必要はない

からね」

ということとは、例え階級が僕のようなRでも、パートナーなら、Sのやつともタメ口がきけるということになる。逆に言えば、パートナーでなければ上の命令は絶対というところだろう。上下の関係が消えたり発生したりと、いろいろ大変な場所だろう。

「あ。もう一つ。ここでは決まった制服があるの。潤の部屋のクローゼットに入ってるから」

「うん……」

僕はいったん部屋に戻り、クローゼットを開いた。水色がベースの服に、防御用のかかる鉄がいくつもついていて。さつそくその制服を私服の上から着た。熱くはない。ここまで着ても熱くないということは、結構通気性がいいのだろうか。制服がかけてあったハンガーの横に、いくつもの武器が置かれている。剣、棒、銃、鞭、弓、杖、槍……。これだけの種類があると、どれを選ぶか迷うほどだが、こんな危険なものを持つのは怖いというのが、今現在の僕の心境だった。

クローゼットを閉めようと取ってに手をかけた瞬間、部屋の電気が消え、赤い警報ランプが鳴り出した。一瞬、心臓が止まったかと錯覚した。今まで警報ランプなんて、見たことも聞いたこともなかった。

「潤！いる？」

「いるに決まってますよ！」

「急いで！ブレイカーの襲撃よ！」

> 敵襲！敵襲！ブレイカー十数人が襲撃してきた！Nランク以下は直ちにこれを撃退せよ<

僕は一番近くにあった銃を持った。腰にピストルベルトを装着し、そこに銃を突っ込み、奈々の下へと向かった。奈々は尚もせかしなから、僕について来いとも言うように背中を向けた。僕も後に続く。奈々の横につく。

「ブレイカーって、一体なんなの！」

「ブレイカーっていうのは、簡単に言えば」

「簡単言えば？」

「敵よ」

「それくらい分かるよ！」

「ごめん。ブレイカーは、「ブレイク」という巨大組織の中で働く者たちのこと。たまに私たちクリエイターの巨大基地、「リエイト」を狙ってたまに襲撃してくるの」

ここまでのいきさつを考えれば、その「リエイト」はここであるだろうと予測がついた。そんな会話を交わしているうちに広いところにでた。そこでは、数人の仲間達クリエイターがブレイカーと思われるやつらと戦っていた。

なんで、こんなことをするんだ。僕たちになんの罪があるというんだ。ここを手に入れて、その後に世界はどう改善されていくんだ。でも、僕は、ここを守る自信はない。逆に自信があるやつや、強いやつがいるから、勝てるかもしれない。でも、僕がそれに貢献するとは限らない。僕は、あるだけの勇気を振り絞って、ブレイカーに銃口を向けた。

4、火を噴く銃口

相手に銃口を向けてみて初めて気がついた。

銃ってどうやって撃つんだ………？

テレビやドラマでは、引き金を引くところしか見たことがない。

確かに、今ここで引き金を引けば、弾は飛んでいくかもしれないが、弾には限りがある。それがなくなったとき、銃に弾を詰め込まなければならぬはずだ。もし弾を詰め込むことができないなら、その時点で銃を使うものは非力となる。こんな危ない場所では、力ないものはやられるのみだ。でも、とりあえず撃つことにした。

しかし、最後まで引ききれずに、銃は力チ力チと引つかかる音を掻き立てるだけだった。

弾が撃ちだされない？ おかしい。再び引き金をひく。やはり弾は発射されない。なぜだ。なぜなんだっ！

「潤！その銃、安全装置セーフティがかかってるよ！」

安全装置。どこかにそれを解除するのがあるのか——あ、もしかしてこれか！ 安全装置セーフティらしいものをいじくってみる。そして、再度構え、ブレイカーに標準を定めて、引き金を引いた。

大きな音をたてて弾が撃ちだされる。そしてそれは見事ブレイカーに命中した。でも、弾には限りがあるはずだ。慎重に使わなければならぬ。その間にも、他のクリエイターがどんどんブレイカーを倒していく。そして、最後の一人に、僕は弾を撃ち込んだ。見事に命中………せずに、ブレイカーの真横を飛び、その間に他のクリエイターが止めを刺していた。

一人のクリエイターが、なにやら報告をしている。どうやら、殲滅の報告らしい。どうやら、終わったようだ。

「ふう。これで全部片付いたわね」

奈々が一つ、息をついた。だが、僕には、終わらせた達成感より、人をこの手で殺してしまったことに、罪悪感を感じていた。僕が、

こんなことで罪悪感を感じているのは、おかしいのだろうか。人が殺すことに何も感じなくなってしまうたら、人の心は脆く崩れていく。そして、ただ殺しあう動物になってしまう。もちろん、世の中にはそんな人間だけではない。人の命を尊重し、大切にしようとする人間だっている。

>ブレイカーの殲滅を確認。各員は、各部屋で待機するようにく放送が流れる。僕を含め、クリエイター達はそれぞれの部屋に戻っていった。

部屋に戻る途中、僕は奈々に聞いた。

「ねえ」

「なに？」

「奈々つてさあ、歳いくつ？」

「レディに歳聞くななんて失礼ね」

「若いんだからいいじゃん」

「十三よ」

「へえ。僕と同じだね」

そんな会話を交わしながら僕達は部屋へと戻っていった。

部屋に戻ると、さっそくベッドへと飛び込んだ。今日一日でいろんなことがありすぎた。学校で聞いた噂、その噂の階段の先、そして、ブレイカー、クリエイター。そして、この組織の名前である「ロント」。知らないことが多すぎるかも知れない。

そういえば、奈々は十三歳だつて言っていた。学校はいいのだろうか。気になつて仕方ない。家の方で、朝になつていなくなっていることを母さんが知ったら、大変なことになるんじゃないかと。気にかかることが一つでもあると眠れない。しょうがないから、奈々に聞きに行った。

奈々の部屋、835号室のドアをノックする。

「どうぞ」

部屋の中から返事が聞こえる。僕はドアを開け、奈々の部屋に入った。

「奈々」

「どうしたの、潤」

「奈々って、十三なんでしょ」

「それがどうしたの？」

「奈々は学校に行かなくてもいいの？」

「もちろん、学校には行ってるよ」

「家の人とかにはどう説明するんだ？」

「家の人にはショージキに言うしかないよ」

「やっぱり、ばれないようにするのは無理なのか。だけど、信じてくれるのだろうか。あの噂を、階段を、ロントの存在を、クリエイターやブレイカーの存在を。僕がこんな男であるがゆえに、母さんがすぐに信じてくれるとは思わなかった。」

「もし、信じてくれなかったら？」

「そのときは、もうこれを見せるしかないんじゃない？」

「うん……」

どうしても、隠し通せないことはある。信じられないような話でも、強引な手段を使っても、信じてもらうしかない。だが、普通に学校に行くにも、どうやって元の場所へと戻ればいいのかだろう。

「ところで、どうやって元の場所に戻るの？」

「ああ。そのやり方なら……。いいよ。潤の部屋で説明する」
「ありがとう！」

そのまま部屋を出て、隣にある僕の部屋、836号室のドアを開ける。奈々が、ベッドの後ろの部分を指摘する。

「あそこに、転送装置があるの。あそこに、移動したい地点を入力して、それを登録すれば、いつでも向こうに帰れる。こっちに帰ってくるときは、階段上れば、そのうちここにたどり着くよ」

僕は転送装置の前に立った。手をかざすと、なにやら入力画面に切り替わった。

「まずそこに、登録するためのだいたいの住所を入力して。もちろん、正確な住所なら一発ヒットする」

僕は家の住所を入力した。その住所を見た奈々が「えっ」と声を上げた。

「北山市山高町ってことは、もしかして山高北中!？」

「え? あ、うん」

奈々は驚いているような嬉しがつてるような表情をした。

「私も北中なの!」

こんどは僕が驚いた。偶然に起こることってあるんだなあ。

「てことは、別のクラスか」

「たぶんそうなるね」

奈々も北中に通っているのか。今まで気づかなかった。北中は生徒数が他の学校より多い学校だ。一年生だけでも三百人ほどいる。一クラス三十人前後で、十クラスある。まあ確かに、それだけ人数いれば気づかないだろうな……。

「とりあえず、僕は母さんに、このことを話してくる」

「うん。階段は、クリエーターがいればちゃんと出現するからね」

「うん。じゃ、また明日」

「じゃね」

僕は転送装置を作動させた。

5、伝えるべき真実

先ほどまで明るい部屋の風景があつた視界に、別の景色が写る。毎日使っているベッドや机。紛れもなく僕の部屋だつた。僕は帰ってきた。壁にかけてある時計を見た。まだ九時前。母さんは起きているはずだ。ドアをあけ階段を下りていく。リビングのドアを開けると、母さんが一人、本を読んでいた。

普通の家庭ならテレビを見ているのが普通だろうが、うちにはそんな余裕がない。僕を見た母さんが、話しかけてきた。

「あら潤。どうしたの？」

「ちよつと、重大発表があつて……………」

「へえ。どんな発表？」

口調は軽いが、顔はひどく悲しそうな顔をしていた。たぶん、僕がいじめや喧嘩を毎日のように受けているというのを発表するのだと思っているのだろう。確かに、実際はそうだが、発表する内容は全く別のものだ。何から話すか迷つたが、まずはこれからどうなるかを話すことにした。

「もうこれからは、今とは違う生活になるんだ……………」

予想はしていたが、それは当たつた。母さんは状況が、僕の言つたことが理解できていないんだろう。とりあえず、あの噂から話すことにした。

「学校で、ある噂を聞いて……………」

その後のことも、できるだけ詳しく話すことにした。階段は、ごく一部の人のしか見えない。そして、僕にはそれが見える。そして、その階段の先には、クリエイター、ブレイカーが戦う世界がある。そして、ロント、ブレイクの存在……………。ここまでで、僕が知っている全てを話した。そして、この後は、母さんにとって、今より楽になると言つた。

「楽になるって……………」

「向こうには、ただで食べられる食堂があるんだ。そうなれば、母さんは僕の分を作らず、一人で食べられる。もう、僕のために苦労することはないんだよ」

話を聞き終えた母さんは、怒りもせず、泣きもせず、喜びも苦しみもせず、僕に一言、静かにこう言った。

「ありがとう。頑張つてね」

そういうと、母さんは、その後は何も言わずに、二階に上がっていき、寝たようだ。僕は、簡単に明日の学校への持ち物を確認したあと、簡単に勉強をすませ、そのまま眠りについた。

次の日、僕は普通通り登校した。昨日のことは、誰にも話さないことにした。奈々も同じ山高北中に通ってるらしいが、何組かは聞いてなかった。僕は、とりあえず、普段通りに生活することにした。

「おはよー潤」

「おはよー」

勇がいつもと変わらぬ口調であいさつをしてきた。いつもと変わらない僕の日常。でも、それもそろそろ終わるのだろうか。僕の日常は、こんなもので終わらないのだろう。僕は、まだ自分でもよく分かっていない。なぜ自分がクリエイターなのか。もっと、強い人とか、頭のいい人とかが、クリエイターにならなかったのか。僕は、弱い。クリエイターとして生活できるほどの資格を、強さを、僕は持つことができない。なのに、なぜ・・・。

「潤」。朝の集会があるらしいぜ。はやく行こうぜ」

「あ、うん」

僕は勇の後を追って、集会の場所となる体育館に向かった。

体育館には、すでに沢山の生徒が集まっている。今回は、一年生だけの集会なので、普通より体育館は広く使えそうだった。

「それではこれより、学年集会を始めます。礼」

生徒は一斉に頭を下げる。再び顔を上げたころ、司会が集会を進行させた。

「今回は、春休みの過ごし方についてと、この間実施したナンバー

「アンケートの結果をお知らせします」

確か、ナンバー1アンケートには、さまざまな項目があった。頭がいい人ナンバー1。運動できる人ナンバー1。かつこいい人ナンバー1。美しい人ナンバー1。その四つの項目があった。

「頭いい人部門、第三位、金田 秀君！第二位、国本 博君——」
そのまま一位も発表される。次は運動の部門か。僕的に考えれば、少なくとも三位までには勇が入っているだろう。

「——第二位、足立 隼人君。第一位、船木 勇君。おめでとうございます」

名前を呼ばれた生徒はステージへと上っていく。その後に、かつこいい部門。そして美しい部門だ。

「——第一位、桜井 奈々さん。おめでとうございます」

一位はさく……。え！？ 奈々！？ ステージの階段部分を見る。そこには、昨日、共に戦った少女の姿があった。どうやら奈々は、この学年でいちばん美しい人、ということになったらしい。その発表の後、春休みの過ごし方だの生活とか勉強だのいろいろ言われて、集会は終わった。

「桜井奈々って、めっちゃ可愛くなかった!？」

集会が終わったところで勇が聞いてきた。

「でも別に向こうが僕達をかつこいいと思ってるわけじゃないし」

「じゃあ潤も可愛いと思ってるのか？」

「いや、そういうわけじゃないけど……………」

そこで先生がはやく教室に戻るように急かした。言われなくても教室には向かっていったんだけど。教室に戻って、担任は一言こういつた。

「今回のナンバー1アンケで、見事うちのクラスから、運動できる人部門で、勇君が一位になりました。みなさん、拍手！」

クラスが盛り上がり、勇を祝福する。中には口笛を吹いているものまでいた。

その日の午後、帰りの会の時間に僕は聞いた。

「勇、今日一緒に帰る？」

「ごめん。今日は野球の守備練習に付き合ってくれて二年生に頼まれてて……」

「分かった。勇の都合で帰って。僕は先に帰るよ」

「ほんとにごめん」

本当にすまなそうな顔をして言った。別に一人で帰るのが怖いほど僕は弱くはなかった。それに、こういう日もたまにある。勇が練習に付き合ったり、試合の助っ人として呼び出されたときは、僕は一人で、帰るべき道を帰っている。

僕は、一人、家路についた。たった一人で家までの道を歩く。だが、今日は違った。家路についた途端、後ろから背中を押される。僕は後ろを振り向いた。こういうとき、だいたい背中を押してくるのは、不良だ。少なからずビクつきながら後ろを振り返る。そこにいたのは不良ではなかった。

「潤。一緒に帰る」

そこにいたのは奈々だった。今日、学年で一番美しいと言われた奈々は、なんの躊躇もなく僕の隣に並んだ。

「今日、すごかったな」

「アンケのこと？」

「うん。僕には、ああいう舞台に立つことなんてないから」

「でも、別に私は、綺麗になろうと努力したわけじゃないし——」
「きつと——」

僕は前を向いたまま、奈々に向かって言った。

「そういう風に美人に見せようとしなくていいところ、奈々のいいところなんだよ」

そう言われたとき、奈々はちょっと戸惑った。こんな風にさらりと、自分のいいところを指摘されたのは初めてだった。いつも、皆に囲まれていいところを指摘されていた。でも、たった一人に、横からなんの前触れもなくさらりと指摘してくれる人が、こんなに近くにいたなんて気づかなかった。

「あ、そうだ潤」

「なに？」

「今日から、ミッションを受けるから」

「ミッション？」

奈々の説明によれば、ミッションというのは、各地で暴れているモンスターを討伐したり、指定された物を指定された場所に届けたりするおふれのことらしい。そして、それを今日受け、出発するらしい。

「じゃあ、銃よりもいい武器にしたほうがいいかなあ」

「潤には、剣が似合ってるよ」

奈々の脳裏には、さりと指摘してくれたように、しなやかに剣を振る潤の姿が浮かんだ。

「じゃあ、今日はそれでいくよ」

「じゃあ、七時にそっちの部屋にいくから」

「うん。じゃ、また後で」

僕達は、それぞれの家へと帰っていった。

第一章 エピローグ

僕、矢倉 潤は、ある日学校で一つの噂を耳にした。その噂は、ある夜の日光る階段を上っていく者がいたというもの。僕はその当時は半信半疑だったんだけど、その噂を聞いた帰り、なんとその階段を目撃したんだ。でも、どうやら見えていたのは僕だけで、一緒にいた勇はそれが見えず、全く気づかなかったらしい。

それと同じ日、帰ってカーテンを開けると、流れ星を見つけた。「強くなりたい」と願った僕の前に、突如あの噂の階段が現れた。僕は、大きくなるばかりの恐怖心と、少しばかりの興味を胸に、その階段を少しずつ上っていった。他の人には見えならしいその階段を上った先には、一つの部屋があった。そして、そこはクリエーター達の組織、ロントの巨大基地、リエイトだった。

そしてそこで出会った桜井奈々という少女。僕のパートナーとなるらしい。僕と同じ十三歳の彼女は、偶然にも、僕と同じ、山高北中学校に通っていた。急襲してきたブレイカーを撃退した後、僕は元居た家に戻り、母さんにこのことを話した。母さんは、否定も肯定もしなかったけど、僕は大丈夫だと思った。

学校では、ロントやクリエイターのことを口に出さず、今までと同じように生活することに決めた。そして、その帰り、僕は奈々からミッションを受けることにしたと言われた……………。

6、広がる草原

僕は六時半ころに、リエイトに来た。ほとんど何もおかれていない僕の部屋だが、それでも愛着がわかないわけではなかった。自分の部屋が二つもあるって、ありそうでなかなかないんじゃないか。その三十分後、奈々が僕の部屋のドアをノックし、入ってきた。

「潤。準備できた？」

「とりあえず、必要そうなものは持った」

僕は、すでに着ていた制服に、鞄の紐をかけた。そして、その鞄に剣を入れる。そして、剣が刃こぼれしてしまったときのための砥石、そして、遠くからの先制攻撃のためのソードブーメランを持った。持ち手以外には鋭い刃が備え付けられている。所有者に反応して、戻ってくるときは刃に触れないようになっている。僕。

「今回は、ミッションのレベルは低いのを選んだから」

僕はうなずき、先を歩く奈々の後に続いた。やがて、広いところになる。ここは、昨日ブレイカーと戦った場所だ。すでに昨日戦闘がなかったかのように綺麗に掃除されている。そこを通り過ぎてしばらく行くと、カウンターが並べられた広場にたどり着いた。

「ここでミッションを受けることができるの」

奈々が僕に向かって説明する。受付であろう者が、カウンター越しでせつせと働いている。カウンターの横には、何かの表がある。僕がそれを見ていると、奈々はそれについても説明を始める。

「それはミッション表。受けられるミッションは全部それに載っているの」

僕はただうなずきながら奈々の話に聞き入った。そのうちに、奈々は説明を止め、受付にミッションを受注した。奈々はそれが済むと僕に声もかけずに先にいこうとした。僕は慌てて後を追った。

「ここからモンスターが多く生息する星がある「魔界」にいけるの。私が先にいくから、後について」

奈々はなにやら操作を行っている。僕は、自分がやるときに間違ふことのないよう、その操作を最初から最後まで全部見た。最後の操作を終えた瞬間、奈々は姿を消した。僕はかなりの驚きようだったが、僕も奈々がやっていたのと同じように操作する。操作がすべて終わったその瞬間、僕は宇宙空間を飛んでいた。でも、何もしなくても進んでいて、息もできる。それからしばらくすると、宇宙に浮かぶ物体が見えてくる。僕はその物体に一直線に進んでいく。かなりそれが大きくなったところ、スピードが緩んでくる。そして、完全に止まったかと思ったら、僕はある施設の中にいた。ここはどこだろう。先ほどの物体の中に入ったのだろうか。ゆっくりと歩き出す。そのとき、僕の隣に奈々が飛び出してきた。

「うひゃああつ……あ、奈々か……」

「そんな声あげることないでしょ！」

僕らは、そんな会話を交わしながらゆっくりと歩を進めていく。

「それより、ここってどこなんだ？」

「ここはロント「魔界」支部。魔界の各星への移動はここから行ふの」

奈々によれば、魔界には数多くのモンスターが巣くっているらしい。モンスターは、特に魔界に住み着いている生物のことらしい。人と触れ合って生活するモンスターは少ない。つまり、大半はナワバリを持ち、他のモンスターと争いながら生きるという食物連鎖の中にいる生物がモンスターらしい。もちろん、その中にはかなり凶暴なモンスターも数多くいる。その一言で震え上がった僕だったが、ミッシオンを成功させるとお金がもらえるらしい。ロント内の通貨だが、日本円への両替も可能らしい。貧乏なうちは、母さんのためにも、ミッシオンに参加することにした。

「今回は、群れで行動するモンスターが多く生息する星、モントール星に向かうからね」

モントール星。どんな星なのかは分からない。草原が広がっているのか、火山があちこちにあるのか、はたまた砂漠が一面に広まって

いるのか。

「星に移動するには、専用の宇宙船、シャトルRに乗らなきゃいけないの」

僕は奈々と共にシャトルRへと向かった。そこには、何十、いや、何百ものシャトルRがあつた。そのうちの一つに奈々は飛び乗った。僕もそれにゆつくりと乗り込む。

「発進します！」

奈々はそう叫ぶと、シャトルのハッチを閉めた。そのまま、ゆつくりと上昇し、発射口で、いつきに前進する。シャトルRは、僕と奈々を乗せ、宇宙空間に飛び立った。奈々はなにやら操作を始める。捜査が終わると、いままで周りにあつた宇宙空間を切り裂くようにかなりの速さで進みだした。不思議に、何の衝撃もこない。僕は奈々に尋ねた。

「ねえ。これってさあ、宇宙服とか着なくていいの？ほうりだされたら死んじゃうんじゃない？」

「そう思うかもしれないけど、この制服に特殊な加工がされてるから、このまま生身で宇宙空間にでも、息もできるし移動もできる」

「あ………」

僕は先ほどのことを思い出す。リエイトから支部へと移動するときの宇宙、そしてそこでの自分の様子。それに照らし合わせれば、確かに奈々の言っていることはうなずける。

やがて、点のように小さかった一つの星が、だんだんと大きくなってきた。僕は予想していたが、奈々いわく、あれがモンツール星らしい。その星は地球よりも陸が多い。少なくとも、この位置から見れば。でも、海の部分が少ないわけではない。地球は七三くらいで海の方が多いけど、モンツール星はその逆といってもいいくらいだった。シャトルRはモンツール星へと、進んでいった。

そのうち、モンツール星の大気圏に突入する。赤く燃え上がる膜がシャトルRを包む。もちろん、僕達は全くもって心配は要らないが、当然ながら初めて大気圏に突入した。僕はその光景にただただ

怯えるだけだった。

大気圏を抜けると、そのままゆっくりと下降しながらシャトルRは進んでいった。やがて、森の風景が広がる。その中に、ヘソのようにポツカリと穴が開いている。少しずつ速度が落ちてくると、そのままそこにゆっくりと下りていった。降り立って、エンジンが止まったところで、僕と奈々はシャトルRの外へと出た。

「ここは………?」

「こここそ「魔界」のモントール星。そしてここはその中の一つ、モルモ平原の手前、モルモフォレスト。ここからこの道なりに進んだところに、モルモ平原が見えてくる。そして、そこが今回の私たちの仕事場よ」

奈々はその指先を森の中へと続いていく道を指した。奈々によれば、このテントは長時間戦闘する場合のためにロントが立てたキャンプらしい。ここには特殊な結界みたいなのが張られていて、モンスターは入り込めないようになっていらしい。そのため、ここでは戦いに向けて準備したり、休憩したりして、次の戦いに備えるための場所なのだ。

「ここで準備することもないから、出発するよ」

奈々はそういつて歩き出した。僕もそれを追う。歩き続ける二つの足は、森の中を、一度もその速さを緩めず進み続けた。

さらにしばらく行ったところ、向こうから光が差している。僕らはその光に向かつて尚も歩き続けた。森を抜けた。まぶしいほどの光が差し込む。思わず腕で太陽をさえぎった。だが、そのまぶしさにもなれたところ、僕は腕をどかし、目の前の風景を眺めた。限りなく続いていると錯覚させるほどの広さの草原が一面に広がっている。

僕はその風景にしばしの間見とれていた。そのうち我にかえり、共に行動してきた奈々の姿を探す。かなり小さく、その姿を確認した。向こうでは手を振っているようだ。僕は、本当に見失わないうちに、奈々の方へと走った。

「もう、遅いよ」

「すいません——ご勘弁を」

「別に何も罰はあたえないって」

そんな会話を交わした直後、草むらから音がした。風の音ではない。明らかに気配を感じる。岩の裏から、一匹のモンスターが飛び出してきた。

「あれが今回の獲物——ターゲット——、ハリアス。今日は群れが別の場所で待機しているみたいね」

僕は、その姿を見た途端、体全てが恐怖心にのっとられたような感覚を覚えた。青をベースとした体に、少々長く感じられる腕、そしてその先に鋭く光る爪。さらに口の中には、無数の牙が身を潜めていた。足はさほど長くない。棒たちと同じくらいの身長のレストランは、例えるなら、中型の恐竜だ。僕とは裏腹に槍を構える奈々は、殺気ともいえるほどの集中力を放っていた。僕もとりあえず剣を鞘から抜き取るが、奈々よりもかなり後ろに位置づいていた。

そして、遂にハリウスが動き出した。

7、頭の中に響く声

ハリウスは奈々に飛び掛った。奈々はそれを左にかわす。だが、その瞬間、ハリウスは長い腕を振るって奈々を攻撃した。奈々はあらかじめ右腕に装着されているシールドでそれを防いだ。だが、それに気づいたハリウスは、もう一本の腕でシールドのついていない左側から攻撃した。奈々はそれをまともにくらった。態勢が崩れ、今度はシールドがある右側からも攻撃される。大きく吹っ飛ばされた奈々は、僕の後ろまで飛んできた。

「奈々！」

次に狙いを定められるのは、絶対に僕だ。ハリウスは僕に向かって腕を伸ばしてきた。あの腕は単に長いだけでなく、その腕をさらに伸ばすことも可能だったのだ。僕は右に避けた。横転するような形で右に避けた僕に向かって、ハリウスは自らの爪を投げてきた。いや、あれは爪ではない。爪のように鋭い毛だ。ハリウスの手首の辺りに生えている毛は、異常なまでの鋭さだ。僕は向かってきた毛を、どうにかしゃがんでかわした。

立ち上がった僕に、再び鋭き毛が襲い掛かる。僕の緊張がさらに大きくなる。心拍数が急激に跳ね上がる。その瞬間、不思議な状態になった。

（これは………？）

周りの風景がゆっくりと動いているのだ。飛んでくる毛は亀より遅い。だが、それは僕も同じで、思うように体が動かない。動いているのは、さっきからめぐるしくまわっている頭だった。思考が脳内で交差し、あの毛を避けるための手段が構成されていく。

僕は頭の中で構築した回避術を実行に移し、行動を開始する。それとほぼ同時に、周りの風景の時間の早さが少しずつ戻ってくる。僕は、出発するとき持っていたソードブーメランを取り出し、それを毛に向かって投げた。それは面白いように毛を分断し、落と

していく。そのとき、羽の中に一つの隙間ができる。あそこなら、攻撃を受けることはないはずだ。僕はその隙間に移動した。そのころには、すでに速さは元どおりになり、僕も相手も、同じ速さで行動していた。

僕は、その後も攻撃をかわし続けた。だが、途中で足がもつれ、転ぶ。そこに待っていたかのようにハリウスは飛び掛ってくる。恐怖心で体が張り裂けるんじゃないかと心配していたころ、ハリウスの側面から槍が飛んできて、ハリウスの胸部に刺さった。僕は槍が飛んできた方を見る。そこには、奈々がいた。さっきまで戦闘が続行できないほど、疲れきっていた奈々は、この短時間で復活したのだ。

「ごめん、潤！ こつから逆転するよ！」

「あ……うん！」

それによつて恐怖心が少しだけ引いた気がした。自分を守ろうとしてくれる仲間が、こんなにも近くにいる。隠していることや、自分の胸の中の悩みとかを全て打ち明けられるほどではないけど、それでも僕を守り、共に戦ってくれようとしてくれるのが、僕にとって何より嬉しいことだった。

だが、事態は困ったことになる。奈々の槍はハリウスに刺さったまま。つまり、攻撃ができるのは僕だけという状況になっていた。

ハリウスが真正面から腕を伸ばして攻撃してくる。僕は、ほとんどこの攻撃のパターンに慣れた。苦もなく攻撃をかわす。休むまもなく腕が伸びてくる。僕はそれをしゃがんでかわした。そこにハリウスは飛び掛ってくる。しゃがんでる状態から一気に逃げるのは難しい。ここでやられるのか。そのとき、さきほどと同じように、周りの時間の流れが遅くなる。この態勢からハリウスの攻撃をかわすには道は一つしかない。今度はかわすんじゃなく、受け止めるしかない。でも、僕にそんな勇氣はなかった。そんな迷いをめぐらせてるうちに、時間は再び元の早さに戻っていく。どうしようもない僕はそのままその攻撃で吹っ飛んだ。ハリウスが追撃しようと再度飛

び掛ってくる。僕は横に回りながらそれをかわす。攻撃がくるまえに態勢を立て直す。不意に、奈々が僕に向かって叫ぶ。

「潤！そいつには一発でも攻撃すれば倒せるよ！」

一撃で倒せる。でも、攻撃に移れるほど、僕は強くない。僕はその言葉で逆に怯んでしまった。そんな僕に止めをさすかのように、ハリウスは腕をこれでもかというほど伸ばし、僕を包んだ。僕から見れば、周りはやつの腕しか見えない状態だった。僕の正面に二本の腕が現れる。今にも襲い掛かるうとしている。僕は……ここで死ぬのか……。このとき僕の中にあっただのは、死に対する恐怖だけだった。

そのとき、僕の頭の中に、声が響いた。

——戦わなければ、何も守れない——

——お前に戦う勇気がないなら——

——俺がお前の代わりに戦ってやる！——

その瞬間、体の感覚がなくなってくる。視界は開けているし、思考もしっかりしている。なのに、体だけが、まるで別人が操作しているような感覚になった。僕の体は勝手に前に走り出し、ハリウスの腕を斬りおとした。ハリウスの腕から血が吹き出る。ハリウスが叫び声をあげるのが聞こえる。それを境に、周りのドームが崩れていく。目の前にハリウスの姿がある。僕は、いや、僕の体は大きな声をあげながらハリウスに突っ込んだ。

「はあああつー！」

僕の体はハリウスの首に直撃した。首が取れ、しみるように血が出てきた。目をそらしたいのはやまやまだが、目すらも動かないため、僕はその光景をまじまじと見つめるしかなかった。

「ど、どうしたの？潤！？」

奈々が僕に向かって問いかけてくる。その質問に僕（の体）は答えた。

「潤？俺の名はキーラーだ。あんな雑魚、屁でもねえ」

僕も奈々もかなり驚いていた。僕はこんな口調ではない。それなの

に、僕の体を完全にのっとして、僕の言葉も聞こえず、ただ淡々と自分のことを喋っている。僕の体を借りて名乗ったキーラーは、僕のことを気にせず、シャトルRに戻り始めた。

進み始めてまもなく、僕の体は倒れこんだ。苦しそうにうめき声をあげている。

「ぐあはっ……そろそろ……限界か……」
キーラーが僕の口を使って喋る。限界とはどういうことなのか……。そのとき、少しずつ体の感覚が戻ってくる。足、腰、胸、肩、腕、首、頭、手……。各部分の感覚がみるみるうちに戻っていく。僕はゆっくりと立ち上がる。奈々が心配そうに覗き込んだ。

「だ、大丈夫ですか？」

奈々は、僕がまだキーラーだと思っているのだろう。僕は奈々に、自分が矢倉潤であることを告げた。

「じゃあ、戻ったの？」

「うん……そうみたいだ」

僕はいまだに少しばかり状況がつかめていない。なぜ、彼が出てきたのか、なぜ僕の体を借りたのか。奈々は、いつものような態度で僕に、今までいったい何があったのか聞いてきた。僕は、あのハリウスの腕に包まれたところから少しずつ、奈々にも分かるように話し始めた。さすがに信じてもらえないような話ではないと思ったが、さきほどの状況を見れば、信じざるをえない。僕は、そんな話をしながらも歩き続けた。しばらくいくと、シャトルRが見えてきた。僕はそれに乗り込んだ。

奈々は考えていた。潤の中に眠るもう一人の潤、とでもいうべきなのだろうか。だが、彼は自らをキーラーと名乗った。もし彼が、潤と血も繋がっていない者だとしたら、潤は……。

「奈々……。はやくう……。僕、運転できないんだからあ」

深く考えるのはやめよう。例えそうだとしても、潤は潤だ。他の誰

でもない。彼がもし私たちを引つ張る役目をするなら、私は潤を支えるつかい棒になる。それが私にできる唯一のこと。そうすると決めた。

奈々は潤に急かされ、急いでシャトルRに飛び乗る。ハッチを閉め、機体を立ち上げ、ゆっくりと上昇させた。そして、今度はかなりのスピードを出しながら上昇し、大気圏の突破を試みる。無事に大気圏を抜けたシャトルRは、ロントの支部へと戻っていった。

8、昇格

僕はロントの魔界支部に戻った。そこでミッションの達成報告を告げる。受付をしていた女性が、僕に向かって話し始める。

「潤様はこのたび、グレードポイントをOレベルまで溜めたため、これより潤様はOランクとなります」

そして、そのあとすぐに奈々にも、台本の情報を埋め込まれた機械のように同じような話を始めた。

「奈々様は今回グウレードポイントをMレベルまで溜めたため、これより奈々様はMランクになります」

それは、僕らの昇格の報告だった。つまり、これによって僕は最低ランク、Rレベルから脱退したということだ。Oランクというのは、全体的に見れば、まだかなり低いランクだが、最低ランクで過ごすよりはましだろう。僕と奈々は、来たときのようにして、ロントの巨大基地、リエイトへと戻った。

リエイトに戻った僕は、さっそく時計を確認した。さまざまな世界の様々な星の様々な地域の時間が表示されている。そのなかから、日本の時間を探し出し、それを見つけた。現在時刻午後八時半。そろそろ帰ったほうがいいだろう。僕は奈々に帰るからと伝え、リエイト内の自室に入った。

部屋に入ってみて驚いた。階級が変わったからだろうか。殺風景な部屋に、収納用の棚が設置されていた。つまり、階級が上がるに連れて、設備も増え、快適に暮らせるようにしたのだろう。

実際僕の場合はそんなに収納するものもなかった。でも、貧乏な生活をしてきたものだから、とりあえずもらえるものはもらっておくことにした。そんなことを考えていると、ドアのノック音が鳴る。僕は応答した。誰が入ってくるかは予想済みだ。奈々だ。奈々は部屋にわざわざ入り込むほどのようではなく、ドアから顔を出したまま話してきた。

「潤！ 報酬金もらうの忘れてるよ……はいっ」

そういつて奈々は一つの封筒を僕に投げ渡した。僕はそれを慌ててキャッチする。なんとかキャッチした僕は、その中身を見る。数枚の札と小銭。僕はそれをテーブルに広げた。これ全部でどのくらいの価値があるのだろうか。僕は机に置きっぱなしだったマニュアルを読み返した。この通貨に関することが載っているかもしれないと思ったからだ。マニュアルの五十八ページ、報酬金と、ロントの通貨について。ここに所属するクリエーターはほとんどが日本人のため、換算も日本円が一番上に載っていた。

ロント内の通貨、ルギ。一ルギで約十円。一万ルギで十万円となる。まあ一応命を懸けている仕事だから、それなりのお金は入るだろう。僕は再度報酬金を見る。数えた結果、百二十ルギあった。日本円に換算して千二百円。僕はそのルギを貯金箱に入れた。収納棚におまけのように置いていたもので、いつでも取り出せるようになっていた。デザインはよく見るようなそうじやないような豚の貯金箱だった。僕はルギをすっかり入れて、部屋の鍵を閉めたのを確認し、転送装置を使って家へと帰っていった。

家に帰った僕はさっそく眠りについた。母さんには、朝だけごはんをもらうようにして、なるべく負担を減らした。母さんには、今まで苦勞をさせた分、樂をさせたかった。自分一人の為にここまでがんばってくれる人は母さん以外にはいないだろうと思うほどだ。

徐々にまぶたが重くなっていく。今日は疲れた。ハリウスとの戦闘もそうだが、キーラーが僕の体を通して表に出てきたからでもある。自分の中に眠った、今まで表に出てくることのなかった人格と全く性格が違うキーラーが、なぜ僕の体を通して出てきたのか……しかし、考えている間に、僕の意識は途切れてしまった。

次の日、目が覚めて時計を見た。六時半。外からは鳥の声が聞こえる。窓を開けると、遠くから国道を走る車のエンジン音が聞こえ

る。僕は窓を閉め、下に降りていった。すでに母さんが食事の支度をしていた。僕は目の前に並べられる貧相な食事にありつく。ゆっくりとよく噛み、そして飲み込む。なんでもない動作を、一つ一つ丁寧に行う。食べられる幸せとはよく言ったものだ。誰が言ったかは分からないし、知ろうともしなかった。もちろん、知るための手段も僕にはなかったのだけれど。

僕は学校へと足を進めた。しばらくいくと、後ろから声をかけられる。僕は今来た道を振り返る。親友である勇が駆け寄ってくる。

僕はそれを待った。勇が追いついたところで、僕は歩き出した。勇も横に並ぶ。不意に、勇が話しかけてきた。

「潤ってさあ。奈々ちゃんと付き合ってたのか？」

自分でも分かるほどにビクついた。僕は驚いて勇の顔を見やる。勇の目はいつもの笑いかけるような目とは違い、挑戦的な目をしていた。おそらく、勇は奈々のことが好きなのだろう。もちろん、自分が好きな子が付き合っていると知ったら、個人差はあるがショックを受けるはずだ。僕は勇を傷つけたくないのと、実際付き合っていないという二つの意味を込めて、僕と奈々の交際論を否定した。

「そんなわけないよ。僕みたいなやつが好かれるところがないじゃん」

それを聞いて安心したのか、勇はゆっくりと胸を撫で下ろす……

・・・と思いきや、いまだに挑戦的な目で、僕にさらに問うた。

「でも、昨日の放課後、潤と奈々ちゃんが一緒に歩いているというのを見たやつがいるらしい」

僕は再び勇に見えない程度でビクついた。昨日の放課後、勇と一緒に帰れないと断り、奈々がミッションに誘ってきた日のことだ。

誰がそのことを聞いた、もしくは見たのかはわからないが、一応事実だ。でも、勿論、勇を傷つけたくない（中略）付き合っていないということ、僕は否定した。

「見間違えたんじゃない？ 必ずしも僕と奈々ちゃんとは限らない」「ちゃん付けするってことは、付き合ってるのか！？」

「勇の呼び方に合わせているだけだよ」

「あ……はは……そうだな……ごめん」
どうやら、勇からの視点での僕の疑惑は晴れたようだ。僕はほっとして、さっき勇がするかと思っただけだったように、勇には見えぬように胸を撫で下ろした。

校内でも、僕と奈々の噂は流行っていた。僕は聞かれる度に否定を繰り返した。そのうち、クラスで一番頭のいいやつが、僕に噂のことを問いかけてきた。彼はその頭の回転の速さも相まって、一番口の達者なやつでもあった。僕はやはり否定する。でも、そいつはさらに問い詰めてきた。聞けば、目撃者はそいつの友達らしい。で、その友達も頭がいいらしい。

「彼が見た情報によれば、服装が一致していた」

僕は、こんな問い詰められた状況と僕自身の臆病な性格がなければ、大げさに突っ込んでいただろう。元々この学校は全員が同じ制服を着ているんだから、一致もなにもないはずだ。だが、そんな僕の気持ちを感じ取ったかのように、さらに証拠を突き出す。

「さらに身長も一致していた。二人とも」

「で、でも！どうやって身長を測るの？」

そんな僕の質問は想定済みであつたらしく。あらかじめ用意されていたのであろう答えを話し始めた。

「すぐそばに車があつたらしい。彼の知識では、その車の車高が百六十ほどだと知っていた。そして、歩いていた二人もそれとほとんど同じだった」

そいつは、身を乗り出すように頭を突き出すと、事件の核心を言い放つように言った。

「潤君、君の身長は百六十三。奈々君の身長は百五十八！もうこれは核心的なものはずだ！」

周りにいた皆が「おおー」と、感嘆の声を上げている。だけど、僕はやはり否定する。いくら身長がほとんど一致しているからと言っても、まだ反論の材料はある。

「でも、僕くらいの身長なんていくらでも……」

僕の身長は中学一年にしては小さいほうだが、それでもこのくらいの身長ならそこらじゅうにいるはずだ。親友である勇さえ、僕と二センチしか変わらない。さすがにこの反論には答えたようで、向こうはしばらく言いよどむ。これは勝負ありか。僕はさらに追い討ちをかける。

「それに、普通一緒に帰るなら、同じクラスの方がいいんじゃない？」

その瞬間、教室のドアが開く。一人の男が僕を見つけると、叫びながら僕に近寄ってきた。そのとき、僕の中で一気に恐怖心が膨れ上がった。

「おめえ、奈々ちゃんと付き合ってるらしいなあ!？」

誤解の噂がもう流れているらしい。もし、僕の性格とこの状況が違えば、僕は「ああ」と頭を抱えていただろう。僕はあっけなく胸倉を掴まれる。僕はその男の名札に目をやる。こいつは、この間僕に喧嘩を売った高橋! 二年生が今回の一件のためにわざわざこの教室まで来たようだ。

「調子乗ってんじゃないぞ!」

僕は突き放される。後ろにあった机に腰をぶつける。高橋は、僕に向かって殴りかかってきた。僕は体をそらせ、それをかわす。追撃をくらわぬうちに、なるべく距離を置く。高橋が回りこんでくる。僕の後ろには教卓、前には高橋がいた。それ以外は壁と机だ。高橋は腕を後ろにひき、そしてそれを僕に向かって突き出してくる。僕はジャンプして教卓に右手をつく。そのまま教卓を飛び越える。着地に失敗した僕は、思いつきり尻もちをつく。教卓越しに驚いた顔の高橋がいる。

「いつ………ててて………」

僕はゆっくりと立ち上がる。だが、我に返った高橋が僕に向かって飛び込んできた。

「うわぁっ!」

僕はとつさに、右側にあつた机に飛び込む。机の上で一回転し、机を乗り越える。僕は机の間を進んだ。高橋は机を蹴飛ばすようにして進んでくる。僕は廊下に逃げ込んだ。廊下に逃げ込んだことで、ほとんどの生徒がこの騒ぎを目撃することになった。僕は後ろに下がりがりながら、尚もかわし続ける。もうほとんど後ろがない。

「この野郎!!」

高橋が殴りかかってくる。僕は高橋の懷に飛び込む。そして、高橋の後ろに回った。高橋はすぐに振り向いた。殺気ともいえるほどの集中力が伝わってくる。

（俺が助けてやる）

頭の中に声が響く。ハリウスと戦闘したときと同じだ。その声が聞き終わつたところには、すでに僕は体の自由が利かなくなっていた。おそらくキーラーだろう。キーラーは僕の右手を使い、高橋の顔面を殴りつけた。高橋はふらつき、やがて倒れた。キーラーは「へっ」と呟くと、僕の体は再び自由を取り戻した。だが、疲労がたまつたのか、僕もその場に倒れこんだ。そんな二人の状況を、何も知らずに階段を上ってきた僕のクラスの担任が、見つけた。担任は「ぎゃあっ」と声を上げて、その場に凍りついたように固まつた。こういうときの対応ができていない証拠だ。こういう状況なら、生徒の状態を確認するか、他の先生を呼びにいくとかの対応をするはずだ。

これだから、教師つてのは——!!!

普段から大人であるという権力を振りかざし、一方的な命令のような口調を言い放つ。上司や大人は、部下や子供に命令するのは普通になれでもできる。でも、それと同時に、命を守り、部下や子供がしでかしたことの責任をとることは、ほとんどの者ができていない。普段はなんでもできるような顔や態度を示しておいて、いざというときは何もできない。これでは蚊と同じだ。そこらじゅうの血を吸っているのに、いざ潰されたり食べられたりすると、何もできない。耐えることもかわすこともできない。

「あ………えつと………ええ………つと………」

・・」

おどおどしている担任はあやふやな言葉を発しながら僕と高橋を交互に見やる。だが、その数秒後、何事もなかったように担任は通り過ぎていった。

僕の中に怒りがこみ上げる。誰に対してもぶつけることのない怒り。見捨てられる恐怖よりも、見捨てていく怒りの方が勝っていた。「潤！ 大丈夫か！」

勇が自分の肩に僕の腕を乗せる。そのまま、僕を保健室まで連れて行ってくれた。たぶん、勇は担任がこれを見過ごしていったところを見たのだろう。何もなかったように教室に入っていく担任の後ろ姿を睨んでいた。

僕の意識は、勇に支えられているという安心感も手伝って、少しずつ遠のいていった。

9、チーム結成

目が覚めたとき、僕は保健室に居た。ゆっくりと体を起こす。壁にかけられている時計に目をやる。九時二十三分。あれから一時間半近く経ったらしい。僕はベッドから降り、靴を履く。

「今日はもう帰る？」

保健室の先生が聞いてくる。どうしようか迷っていた。帰っても特にすることはない。でも、勉強するにはまだだるさが残っている。考えた末に僕は帰宅を選んだ。

僕はゆっくりと立ち上がる。足が僅かに痛んだが、移動に支障はなさそうだ。僕は、カバンをとり教室に戻った。

教室では、現在国語の授業をしている。担当しているのは、今朝、僕や高橋を見捨てて教室に入っていた担任だ。僕は教室のロッカーからカバンを取り出し、席に座る。机の中に入っている教科書やノートのカバンに詰め込む。

「今日は帰るのか？」

見れば分かることを勇は小声で聞いてきた。今朝、担任が過ぎていった後、僕を担いで保健室まで連れて行ってくれた。それと同時に、その担任を睨みつけた。その瞬間、僕は勇と同じことを考えていたのだと思った。確認こそないが、おそらくそうだろう。

「さようなら」

僕はそう言っただけでひとり、教室を跡にした。

家に帰ると、誰もいなかった。母さんは仕事に行っているんだろう。僕は何も言わずに二階に上がる。カバンを開き、中から塗り薬を取り出す。保健室の先生が渡してくれた物だった。僕はそのふたを取り、足にゆっくりと塗る。そして、塗り薬のふたを閉め、机に置くと、僕はすぐにベッドに横になった。布団をかぶり、カーテンを閉め、まぶたを閉じる。だるくなった体を意識のうちに閉じ込めるには、十分な暗さだった。十分もしないうちに、僕の意識はゆっ

くりと睡眠という行為によって閉ざされていた。

それから数時間後、目が覚めた僕は時計を確認した。二時半。かなり長い間眠っていたようだ。僕はゆっくりと背伸びをする。一階に下りていき、冷蔵庫を開ける。中にはプリンが三個入っていた。空腹をしのぐならこれでいいだろうと、僕はプリンを一個取り出した。冷蔵庫を閉めると同時に、玄関の戸が開いた。母さんが入ってくる。

「あら、潤。帰ってたの」

母さんが問いたです。僕は「うん」と言ってうなずき、プリンのふたを開ける。スプーンを使い、ゆっくりと口に運ぶ。全て食べ終わったころ、僕は一言こう言った。

「プリン、食べちゃってごめん」

その一言を聞いた母さんはふいた。

「なに言ってるの。いつでも食べていいわよ」

その一言を聞いて、僕も微笑した。でも、それ以上は二人とも何も言わず、それぞれの場所へと向かった。母さんは自分の昼飯を作るために台所へ、僕は自分の部屋へと。

二階にある電話の子機が鳴った。すぐそばにそれがあった僕は受話器を手に取り、呼び出しに応じた。

「もしもし、矢倉です」

「あつ、潤？ 私、奈々」

電話の相手は奈々だった。電話をかけているということは、もう家に帰ったのだろう。僕は奈々に用件を聞いた。

「で、用件は？」

「あ。そうそう。ロントの方から呼び出しがかかったの。三時までに来るようになって」

聞けば、呼び出されたのは僕達だけらしい。奈々はそれ以上は詳しく言わず、十分後に私の部屋に来てという連絡を最後に、電話を切った。僕も受話器を置いた。窓を開けると、ゆるやかな春の風と共に、階段も現れた。僕は、それを一歩一歩踏みしめるように歩いた。

しばらく行つたところで、僕の836号室に到着した。僕はクロ―ゼットから制服を取り出した。学校の制服を代わりにかけて、ロントの制服を着た。時計を確認した。あと五分くらいか。僕はベッドに腰掛けた。ほとんど何も無いこの部屋で特にすることも無い。僕はただひたすら、時間がすぎるのを待った。十秒が過ぎ、二十秒が過ぎ……。ゆっくりと流れているのか、そうではないのかは僕には分からない。でも、それが示すのには従わなければならない時間にも、人にも。

そんなことを考えている間に五分が過ぎた。僕はベッドから立ち上がり、隣の部屋のドアをノックした。

「どうぞ」

毎日のように聞いている声が返事をする。僕はドアを開ける。奈々は、座つてと言い、椅子を指差した。僕はそれにゆっくりと座る。奈々はかなり嬉しそうな表情で僕に話し始めた。

「ロントから、私たちにチーム権が降りるらしいよ!!」

僕は、一瞬意味が理解できなかった。僕は、分からないことを、片っ端から聞いていくことにした。

「奈々。僕、分からないことが多いんだけど」

「じゃあ、一つずつね」

「まず一つ目、チーム権とは？」

「チーム権って言うのは……………」

奈々によれば、チーム権というのは、一部のクリエイターのペアにのみ与えられる権利らしい。つまり、通常なら二人でしかでられないミッションを、最大五人でできるらしい。チームの人数は十五人まで。でも、チーム権を持っているペアが、そのチームのリーダーを務めることになる。らしい。

「じゃあ、二つ目。なんでそれが僕達に与えられた？」

「それは……………運が良かったんじゃない？」

「どうやら、はつきりした答えは奈々も知らないようだ。まあ無理もないだろう。」

「五分後に、中央ロビーで新メンバーが二人入るから、行こ」

僕は奈々につられて、部屋を出て、中央ロビーに向かった。中央ロビーとは、この前ブレイカーと戦ったあの広場のことだろう。おおよその見当はつく。

僕の予想通り、あのときの広場だった。そこには二人の若手らしいクリエイターと、リエイトの職員が居た。僕と奈々はそれに混ざるように入っていった。

「潤さんと奈々さんですか？」

リエイトの職員が確かめてくる。僕と奈々は同時に「はい」と答えた。目の前にいる二人は、それぞれの印象がまるで違う。一人は、いかにも新米のような顔をしている少年だ。だが、もう一人は、いかにも、堅物のイメージが漂う少年だった。

「こちらが、新しいリーダーの矢倉潤君と、桜井奈々君だ」

職員が僕らの名を呼ぶ。そして、今度は新メンバーの二人が自己紹介をし始めた。

「滝山 修二、小六の十二歳です。よろしくお願いします！」

新米の少年は深々と頭を下げる。少なくとも、声は僕らよりレベルは高そうだ。自分たちが中学一年だから、こんなことは言えないが、まさか小学生もクリエイターとは思わなかった。

「原岡 海、十三歳。よろしくお願いします」

堅物少年は、印象だけでなく、ほんとに堅物だった。その口調にはどこか重みがあった。

「では、今から一週間以内に、チーム名を考え、チーム管理部の職員に提出してください。それでは、チームルームへどうぞ」

一枚の紙が渡される。そこには、チーム名を書く欄以外にも、メンバーなどを書く欄もあった。僕らは、職員に指差される部屋へと赴いた。

部屋には、ソファやテーブルといった、ミーティングに使いそうな家具に加え、娯楽用に、テレビやゲーム、DVDなどがあった。僕と奈々は隣同士に座り、向かいに新人二人を座らせた。

「じゃあ、とりあえず、私たちの自己紹介をするね」

そういつて奈々は立ち上がった。奈々が、自分の名前、年齢、趣味や特技、普段使う武器を話した。奈々が座ると、僕は慌てて立ち上がる。僕は、特に趣味や特技はなかったため、言わなかった。使う武器を話した後、僕は立ち上がったときと同じように、慌てて座った。

「じゃあ、二人も、こんな風にして、話して」

奈々は、改めて二人に自己紹介をさせるらしい。新米少年の修二は、先ほどの紹介に加え、趣味、そして、使う武器を銃だと答えた。

一方の堅物少年、海は、趣味も特技も特にないらしい。そして、武器は鞭を主体としているらしい。二人の紹介が終わり、それぞれの部屋の番号を確認した後に、奈々が思い出すように言った。

「あ、言い忘れていたけど、私の階級はM。潤がOよ」

「俺はPランクです」

海は言い捨てるように自分の階級を口にする。

「僕はQランクです」

修二は確認でもするように話した。それが済んだ後、全員がそれぞれの部屋に帰っていった。

10、名前と権力

僕と奈々はチーム結成の次の日は学校が休みだった。そのため、僕と奈々は修二と海に都合を確認して集まってもらうことにした。今回集まったのは、チームの名前を決めるためだった。

「みんな集まったね。じゃあ、これからチームの名前を討論するから、皆かつこいい名前をよろしくね!」

奈々に考える気はほとんどないようだ。確かに、かつこいい名前なら男の方が付けやすいのだろう。僕は腕を組んで考え始めた。

修二も僕と同様に頭を抱えるようにして考え込んでいる。それはとてもありがたいことなのだが、問題は海の方だ。いかにも、どうぞご勝手に決めてくださいと言わんばかりの表情と仕草だ。集まったのはいいが、その目的がチームの名前決めだったことに、がっかりしたのだろうか。

「俺は帰ります」

海が立ち上がる。たぶん、僕の予想通りだろう。ミッションに行くわけでもないのに集まる必要はないと言っただろうか。

「チーム名なら、ご自由に考えてください。俺はそれに従います」
そういうと海は何も言わずにチームルームを出て行ってしまった。僕や奈々は引きとめようと声をかけようとしたのだが、奈々は途中で声をかける気が失せたようだ。僕は声をかけることのないまま見送ってしまった。あの氷のような心を持つ少年に声をかけるのが、なんだかかむなしいような気がしたのだ。

「はあ……じゃあしょうがないわ。三人で決めよう」
奈々は仕切りなおしたようだ。あの少年には、仲間意識が極端に薄いような気がした。

海はゆっくりと自室への道を歩いていった。廊下のはじっこを流れるように進んでいく。途中ですれ違うクリエイターにも、目線一つ

も向けやしない。そのとき、肩に何かがぶつかる。気にせず進もうとした彼を呼び止める声がする。

「おい、お前謝れよ」

相手は自分の立場をわかってないだろうし、無論、自分もそのクリエイターの立場を分かっていない。

「すいませんでした」

軽く頭を下げ、再び自室への道を進もうとする。だが、そのクリエイターはその道をさえぎった。そのクリエイターが、胸に光る階級を示すバッジを見せ付けてくる。

「俺はBランクだ！ その程度で済むと思っているのか！？」

クリエイターは胸倉を掴む。海の体は、ほとんど浮いている。かろうじて足のつま先が地面についてはいるが、ほとんど役にはたさない。さらに体を持ち上がる。海は胸倉を掴まれて宙吊りの状態だ。

「いいんですか？」

海は小ばかにするような口調で話し始める。

「ここで暴力を起こして、騒ぎになればあなたの責任ですよ？」

「……！！！」

論理的な言い方をすればそうなる。ずっと端っこを歩いていた海は、そういう言い方ができる。周りには自分達以外は誰一人いなかった。つまり、避けることは十分にできたはずだ。堂々と真ん中でも通っていればよかったものを。

「その少年の言うとおりだぞ、章」

章と呼ばれたクリエイターは、すぐに海の胸倉を掴んでいた手を放し、呼びかけてきた人物に向かって敬礼した。

「たっ、隊長！」

呼びかけて来たのはメガネをかけ、いかにも秀才のようなイメージの人物だった。彼は海の方を向くと、自己紹介をはじめた。

「これはぼくの隊員が失礼をした。ぼくは和田^{わだ} 光男^{みつお}。君に暴力を振るいかけた彼はうちの隊員、山川^{やまがわ} 章^{あきら}だ」

淡々と説明をしていくさまは、海とほとんど変わらない。海はただ

黙ってその話を聞いていた。

「そして、僕達は、チーム・パワーに所属している。だから、それなりの対応はしてもらわないと、君の方の立場も危ない」

チーム・パワー。どこかでその名を聞いた気がしていた。

「今回は多めに見るが、次は必ず上に報告する。覚悟をしておけ」

そういうと、光男と章は、海の横をすれ違うように離れていった。

そして、離れていき、姿が見えなくなったところ、海はチーム・パワーの存在を思い出した。ロントの中でもかなりの実力を持つチーム・パワー。戦場でのとっさの判断力と、それを確実に実行に移す行動力を兼ね備えたロント四天王の一つ。Xランクの隊長、光男を筆頭にした実力者達は、今まで幾度となくブレイカーとの戦闘における戦局をひっくり返してきた伝説のチームとも言われている。海は自室に戻ると、すぐに転送装置でその姿を消した。

僕と奈々、そして修二はチーム名に頭を悩ませていた………のだが、話がどんどん離れていっていた。

「修二ってさあ、海のことを知っていたの？」

「いえ、彼とはここに来て初めて知り合ったんです」

それ続けている話の中の一つである海の話はここで途切れた。僕は話を戻そうとチーム名の考案を求めた。

「チーム名はどうするの？」

そこで、沈黙が起こる。先ほど、海が部屋を出ていこうとしたところでも、同じような沈黙が起きていた。僕はひらめいた。チーム名が。僕は沈黙が広がっている二人に向かって進言した。

「チーム・スレイヤーっていうのはどうかなあ」

僕は軽々しくその名を呼んだ。二人の表情が一気に明るくなった。

僕は、さらに、この名前の由来を話し始めた。

「僕は、気が弱い。だからこそ、どんなものでも立ち向かっていける力を持って行動したい」

僕は、いつになく堂々と発表した。こんなに心がはずむのは久しぶ

りだったかもしれない。今まで、うちが貧乏なせいで、六年生のときの修学旅行代すらはらえない状態になり、その二日間を家で静かに暮らした。誰かと遊ぼうといっても、皆修学旅行に行っているの
で、誰も相手にはしてくれなかった。

でも今は違う。お金なんて一円もかからない。それなのにここま
で、興奮することができる。楽しめる。そのことが、僕にとって一
番嬉しいことだった。

「僕は強くなりたいんだ」

あのととき、自分の部屋で、生まれて初めて見た流れ星に祈った願い。
強くなりたいのは誰だって同じ。権力を振りかざすためと言うのも
あるかもしれないが、誰にも攻撃されないというのもあるのだ。僕
は、そういう力が欲しい。そして、その力で強くなりたい。

「これからは、「僕達は強くなる」っていうのにしてよねっ」

奈々が笑いながら僕を軽く押す。僕もかなりの笑顔を見せたのだろ
う。僕は勢いよくうなずいて見せた。

「うん！」

こうして、僕らのチーム名は、チーム・スレイヤーに決定した。奈
々が唐突に言い出す。

「じゃ、明日も来れたら来て。ミッションのブリーフィングをする
から」

「チーム・スレイヤーの初ミッションですね！」

修二が高揚して、声をあげる。僕は、修二に向かって言い放った。

「海にも連絡を入れておいて、修二」

「了解」

「じゃあ、今日は解散。お疲れ様でした」

そついうと、修二は一礼して部屋を出て行く。僕はゆっくりと立ち
上がると、部屋のドアに向かって歩き出す。そのとき、後ろから声
をかけられる。

「潤……」

奈々が立ち上がる。なんだか、顔が火照ったように赤い。なんの話

なのか、よく分からなかった。

「その……学校で、なんか噂なってるよね……」

その一言で、僕の脳内で一つの噂が鮮明に浮かび上がる。朝から執拗に真実を突きつけられたあの噂。そう、僕と奈々が付き合っているという噂だ。

「ああ……付き合ってるっていうの？」

それを聞いた奈々は、顔を真赤にした。僕との交際が噂になっているのだ。これは僕と奈々の問題である。他の誰も、何の関係もない。

「僕とは、ここ以外では会わない方がいいか？」

その瞬間、奈々の体が一瞬凍りついた。ここ以外では会えない。それだけで、どこか心が傷つくような気がする。

「あ、奈々がいいなら、いつも通りで構わないよ、僕は。奈々に合わせる」

僕は、答えを待たないうちに、部屋から出て行った。

11、いざ、炎王の下へ

チーム・スレイヤーという名前を決定した僕達四人は、次の日再び集まった。今回はミッションだったため、海はちゃんと最後までいた。今回、僕らが標的——ターゲット——としたのは……。

「今回の獲物は、岩山にナワバリを張る竜、炎王と呼ばれるドラゴレイド・キル」

その名前に、修二は驚いた。かなりの驚きの様子で、目がまん丸になっている。

「あのドラキルですか!？」

ドラゴレイド・キルは、略されてドラキルと呼ばれたり、炎王と呼ばれるようだ。そのドラキルがどの程度の強さなのかは分からないが、奈々が自信を込めているところを見る限り、四人で戦えば勝てる相手だと思っているのだろう。もちろん、炎王というだけのこともある報酬も高い。だが、もしかしたら、奈々は新しく入ってきたこの二人の力を、試そうとしているのかもしれない。でも、それは僕には関係のないことだ。僕は僕なりにがんばれば、それでいい。弱くて、戦場で足を引っ張ることしかできそうもない僕は、それが一番チームのためになるのだ。

「異議はないね、海も」

奈々が海に向かって同意を求める。さすがに否定はしなかった。こんな大物は、初めてだからかもしれない。

「はい。我々の強さを合わせれば、互角には戦えるはずです」

「じ、じゃあ、十分後に、またここに来て」

僕は僅かな恐怖感をすでに抱きながらも、集合の命令をかけた。

「了解」

「了解です」

二人が答える。僕は、その返ってきた答えに思わずほっとした。僕

の中には、まだ、否定されるのではという不安が渦巻いていた。こんな性格だから、何かを、誰かを率いたことは一度もない。ましてやリーダーや隊長なんていうものが僕にはたしてできるかどうか。

でも、その不安も、目の前にいる二人の声でかき消される。僕は、チームルームのドアを開けると、武器などの準備をしに自室へと戻っていった。

ミーティング終了から十分後、全員が、再びチームルームで顔をあわせた。僕は、背中に剣を持っている。鞘に納まっている武器は、戦いを今か今かと待ちわびているような気もする。奈々は、通常攻撃用の槍のほかに、投擲用の槍も装備していた。この間のハリウス戦から学習したのだろう。海は、腰に鞭をたらしている。茶色がかったその武器は、どこか、彼にしっくりくるような気がする。修二は腰のベルトにいくつかの銃を携えていた。ハンドガン、アサルトライフル、スナイパーライフル、サブマシンガン……。さまざまな銃器物は、その笑顔からは感じられないほどの威圧感を感じるほどだ。銃だってどこまでも軽い構造になっているわけではない。多少の軽量化は施されているにしても、これだけの量を一度に持ち歩けば、動きに支障が出る可能性も否定はできない。だが、この様子を見れば、そんなことはないのだろう。

「それじゃあ、チーム・スレイヤー、出発！」
僕は威勢良く声を出した。

僕らは受付でミツシヨンの手続きを終えると、さっそく「魔界」へと移動を開始した。奈々、修二、海、そして、僕という順番でワープしていく。

ロント魔界支部に着くと、すでに僕以外の三人はシャトルRへと向かっていく。

「あつ！ ちょっとー！ 置いてくなあ〜」
わざとずがるような声で三人を追いかける。ようやく追いついたころには、三人はシャトルRに乗り込もうとするとこらだった。

「私と潤で前座るから。海と修二は後ろね」

「りょーかい」

修二が眠そうに声を上げる。さきのミーティングでも二、三回あくびしていた。かなり遅い時間帯に起きたのだと思えた。奈々はシャトルRに取り付けられている無線機を全員に配る。そして、無線機の電源を入れると、奈々は高らかに言い放った。

「チーム・スレイヤー、シャトルR、発進します！」

シャトルRのエンジン音が響く。ゆっくりと機体が上昇していく。そして、射出口まで上がりきると、今度は横にエンジンを起動させ、前進する。シャトルRは、勢いよくロント支部を後にした。

そのうちに、ワープに入る。ワープになると無線は使えないらしく、奈々は無線機を耳から外した。僕もそれにつられるように外す。流れ行く星々が僕をドンドン暇にしていく。ミッション前が一番暇だ。何もすることがない。もつと正確に言えば、何もすることができない。

ワープが終了する。目の前には、この前いったモントール星とは違う星があった。山の多そうな星だ。奈々に小声で聞いてみる。

「あの星ってなんていうんだ？」

小声で聞いた僕をまるで無視するかのように奈々が話し始める。しかも、皆に聞こえるような声で。

「あれはガンダン星。ナワバリ主張するモンスターがそこらじゅうにうろつろしている危険レベルの高い星」

奈々によれば、この星の危険度はBランクらしい。最低がE、最高でSランクらしい。さすがにSランクには、ほとんどのチームは足を運ぶことはない。中堅から経験不足なチームやペアにとっては、ここが大きな通過点となるらしい。

そんな話をしている間に、シャトルRは大気圏に突入する。あのときのように、赤い膜が機体を包む。もちろんシャトルRは大気圏をなんなく突破できる耐熱性を持っている上に、ロントの制服はそんなものの熱さや、Gがかかることがない。つまり、快適なのだ。

さらに、ミッションからシャトルRが帰ってくるたびに、メンテナンスをしてから送り出すと言う非常に安全性も高いらしい。

大気圏を突破した。目の前には、まず海が広がる。その上をシャトルRは進んでいく。そのうち、陸が見えてくる。一番最初は浜だったが、すぐに岩山へと変貌している。シャトルRは、その浜に着陸した。そこにもテントが張られている。モントールほどスペースは広くはないが、これだけあれば十分のようだ。

僕は、シャトルRから降り、ガンダンの地に降り立ち、入り組んだ岩山を見上げた。

12、炎王竜の叫び

着陸地点から僕らは徒歩でドラキルを探す。一人で戦って勝てる相手ではないので、四人で団体行動を取った。ごつごつとした岩肌、ずっと遠くまで続いている。山の頂上まで、ずっと岩肌が続いている。僕は、予想した。たぶんそのうちにこの景色が飽きるだろうと。

しかし、そんな予測も一瞬にして破られる。岩陰から耳を塞がせられるような雄叫びが響く。そして、その雄叫びからまもなく、一頭の竜が姿を現した。こいつが……ドラゴレイド・キル……僕はその名をつぶやくように言った。赤に緑がかったその肌は、岩肌の中でも目立つ。だが、それゆえの威圧感がある。二本足でその体を支えている。腕はなく、翼と一体化している。一言でその姿を現すなら、まさにワイバーンというのがぴったりだった。その鋭い眼光がこちらを睨みつける。挑戦的な目つき。僕はそれに恐怖する。力の差を見せ付けられたような感じだった。

再びドラキルが雄叫びを上げる。今度は本当に耳を塞ぐほどだった。精一杯耳を塞ぎ、鼓膜へのダメージを少なくしようとする。そして、その足で岩の地面を蹴り、こちらへと突進してきた。脳内で危険信号が響くような感覚だ。ドラキルは僕に向かってまっすぐに向かってくる。なんとか右に体ごと飛び込んで攻撃をかわすと、すぐにやつへと向き直る。ちょうど向こうも向き直った。ドラキルは小さな火の玉を飛ばしてくる。あの炎に焼かれてしまえば——焼け焦げた自分の姿が脳裏によぎる——僕はやられてしまう！

僕は横転し、火の玉をかわす。後ろで何かがこげる音がする。岩が無残にも焦げている。黒くなったそれは、見るだけでも脆くなっていると分かるほどだった。地を揺らすような足音に気づき、前に向き直る。かなり目の前まで迫っているドラキルがいた。だめだ。かわしきれない！

だが、そう思っている間にドラキルは転んだ。何かに引っかかったようだ。僕は、その正体を確かめる。海だ。鞭によって、足にダメージを与え、転ばせたらしい。

「的になりたいんですか！ あなたは！」

もつともらしい答えを放ってくる。僕は転んだドラキルから距離を取ろうと、後ろに下がる。僕の代わりのように奈々が飛び出し、ドラキルの頭を何度も突いた。血が僅かに吹き出る。転んでいたドラキルは起き上がり、翼を広げて上空に飛び立つ。そして、天空を見上げたかと思うと、炎を口から噴出した。そこで僕の周りの時間が遅くなる。あの炎から逃げられる場所は……。あつた。そこで少しずつ時間が早まっていく。僕はその口を開く。

「やつ你真下だ！」

叫ぶと同時に僕はドラキルの真下に潜り込む。意味を瞬時に理解した海はすぐに真下に飛び込んだ。それにつられるように修二や奈々も飛び込んでくる。どうやっても真下にだけは炎が届かないようだ。そして、それを諦めたドラキルがどんどん下に下りてくる。全員が各方向に散り、ドラキルから離れた。奈々は投擲用の槍を投げつける。修二はサブマシンガンで乱射する。海は鞭で叩きつける。唯一武器による遠距離攻撃がない僕は、懷にしまつてあつたソードブーメランを投げつけた。

各武器がドラキルに命中する。ドラキルは怯む。そのとき、キラーの声が頭の中に響く。

（面白そうだな。俺に代われ）

「えっ、ちょ……。…」

僕の返答を待たないうちに、キラーは僕の体をのつとつた。僕はしぶしぶ従う。自らの意図とは全く違う動きをする僕の体は、今現在僕の一部ではなかった。怯んでいたドラキルへまっすぐに走り出す。キラーは鞘に納まっている剣を取り出し、引いて構える。横殴りにするように、真正面から斬りかかる。なんとか態勢を立て直したドラキルは、体を右にそらした。そのおかげで、体の中心部分

を斬られることなく攻撃が終了した。それでも、かなりのダメージが入ったはずだ。それと時を同じくして、ドラキルは右に少しずつ傾いていく。転んだのだ。海が鞭による足への攻撃を行い、足に蓄積したダメージが、悲鳴を上げたのだ。

「おっしやあっ！ このまま押し込むぞ！」

キーラーは僕の口を借りて言い出した。

同じガンダン星の上空。一つの戦艦がエンジンをふかして飛んでいた。戦艦は、白と青を基調とした色をしている。その中で、一人の青年が、メカニックと話をしていた。

「え？じゃあ、もうすぐ出撃？」

その青年はおとなしい雰囲気を漂わせている。話しているメカニックは答えを返した。

「ジャストは待機のようにだけど、お前はいかなきゃいけないようだ」
親しげに青年と話すメカニックは、彼の親友だった。

「また……戦わなきゃいけないのか……」

青年は、戦うのを躊躇う。戦いに身を投じれば、自分が死ぬかもしれない。だが、それ以上に、他の人や、動物の命まで奪ってしまうことになる。それが、青年にとって戦う理由を躊躇うものだった。

「しょうがないさ。上からの命令だしな」

表情を曇らせる青年をなぐさめるように、メカニックは笑顔を浮かばせる。青年は最後に一言こう言った。

「じゃあ、パーツの最終チェックを頼むよ。テンペラー」

「テペーラだつて！」

テンペラーと呼ばれたメカニックはつつこむ。彼の本当の名前はテペーラ・エンペラー。同じような字が続いているため、皆テンペラーと呼んでいる。

青年はアナウンスから流れる出撃の命令を聞いた。青年は格納庫に向かって走り出す。一つの戦闘機が見えてくる。彼はそれに飛び乗ると、ハッチを閉じた。

「発進、許可します」

若い女性の発進許可のアナウンスが流れる。青年は、開かれていく射出口の前に、言い放った。

「ジャステイス・ファイア、コアフライヤー。行きます!!」

13、蒼き翼

ドラキルと戦闘を続ける。かなりのダメージを蓄積させたドラキルは、ほとんど動けない。討伐も時間の問題だろう。キーラーは尚も僕の体を借り続け、攻撃を続ける。もうほとんど動けそうになさそう。キーラーが僕の体で走り出す。剣を引く。そして、それを頭に向かって斬りつけようとした途端、爆風で吹き飛ばされた。

「ぐわはあっ！」

キーラーがうめき声を上げる。そして、徐々に僕の体の感覚は戻っていく。一つの戦闘機が風を切るように突き進んでいる。なんなんだ？ あれは？ そんなことを考えているうちに、戦闘機が降下してくる。逆さまになった戦闘機のハッチから、人が飛び出してくる。しっかりと着地した彼は、周囲を見渡していた。

青年、ジャステイスの無線に、テペーラの声が入ってくる。

>いつでもパーツは射出準備OKだ<

「ありがとう」

ジャステイスは無線の入っている耳を押さえて話した。言い終わるとジャステイスは周りを見渡す。その中に、一人の少年の姿を捉える。

「なんで、こんなことを！」

ジャステイスは潤に向かって走り出す。彼は風のような動きで接近する。その拳を突き立てる。だが、それをバックステップでかわされる。体を沈み込ませ、タックルでもするように蹴りを入れる。だが、それさえも軽々とかわされる。なんて身体能力なんだ。だが、ジャステイスは一つだけ気になっていた。

——なぜ攻撃してこない？

僕は突如現れた青年の攻撃をひたすらかわし続けていた。全ての

攻撃を流れるようにかわしていく。だが、それと同様に、向こうの攻撃も風を切るように早い。動きについていくだけで精一杯だ。だが、かわし続けていたところで、青年はいきなり距離を取った。そして、無線に手をあて、何かを放し始めた。

「ウイングパーツ、ウイングウエポンパーツ、グローブパーツ射出」意味不明の言葉を彼は発した。一体何が起こるのかは想像もつかないが、かなり危険な感じがするのは事実だ。僕は、何が起きてもいいように、態勢をとった。

「よーし、射出命令だ。一気に送り出せ！」

テペーラはきびきびと自分も働きながら命令を下す。十秒もしないうちに、さまざまなパーツが戦艦から飛び出していく。先ほど発進したジャステイスの着陸地点からは、そう遠くはない場所だった。三つのパーツはそれぞれがまっすぐにジャステイスへと向かっていく。テペーラはにこやかな、実に満足そうな表情を浮かべた。

「これでよしと」

いまだに青年と戦い続けている僕は、他の三人の行方を目で探した。さきほどの爆発で、僕を含めた四人が、この青年に気を取られているうちに、ドラキルの体力が回復していたのだ。回復した量はさほど大きくはないが、それでも、三人をてこずらせているのは確かだ。

しかし、そこで妙な物体が、上空から舞い降りてきた。それに気を取られていた僕は、青年に胸を突き放された。よろめき、尻もちをついた僕は、青年の姿を見つめた。彼はジャンプした。常人並のジャンプではない。軽く五メートルはジャンプしている。そして、その背中に蒼い翼のようなものが取り付けられる。今気づいたのだが、彼の体のいたるところには、針金のようなものが張り巡らされている。背中、胸、手、腰、足。

翼が取り付けられた青年は、空を浮いている。その蒼い翼を広げ

て。続いて、腕に、コテのようなものが取り付けられる。そして、さらに上空から、円盤型の物体が落ちてくる。円盤に沿って八本の刃——のように思われるもの——が取り付けられている。そのうちの一本が伸び、彼の手のうちに収まる。彼の翼くらいの大きさのそれは、どうやら彼の武器らしい。

「ウイング装着完了」

翼を取り付けた彼は、小さくつぶやいた。右手にそれを持って、こちらに突っ込んでくる。向かってくるのなら、迎え撃つしかない。でも、僕には攻撃する勇氣など、ない。だから僕は避ける。死にたくないから。傷つきたくないから。自分を、仲間を、守りたいから。大きく振られたそれをジャンプでかわす。振り終わったと思えば、再び逆方向に振り回し、再度攻撃してくる。僕はジャンプする。そして、円盤の面に手を乗せ、そのまま一回転し、かわす。青年は、先ほどまで振り回していた武器を投げ上げる。空中に飛び上がると、その武器は、背中の翼に取り付けられた。そして、なにやら無線で何かを言っている。この位置からでは分からないが、またなにか飛んでくるかもしれないとは思っていた。しばらくしたところで、再び何かが飛んでくる。個数は二つ。今度は小さいのと中くらいのものだ。小さい方は、腰に装着され、もう一つは胸に取り付けられた。肉眼で見る限りでは、腰に取り付けられたのは銃だ。だが、片手で持てる銃にしては、少し大きい。なぜ？

その後に遅れてさらにもう一つ飛んでくる。それは足の部分に装着される。全ての部分に、さまざまなものが取り付けられた。

フルアーマー
「全武装装着なのか………?」

先ほどまでの彼の瞳にはなかった感情が僕からは見て取れた。

「サイコイーグル!」

彼は叫ぶ。その声とほぼ同時に、先ほどまで武器として使われていた円盤の刃が宙に浮いた。八本の刃が円盤を離れ、こちらにまっすぐに向かってくる。僕にはその全ての動きが見えた。どうにか僕はその攻撃を受け流した。今度は足に取り付けられている銃口と、胸

にある銃口が共に火を噴く。あれは、ただの弾丸ではない。レーザー兵器だ。三つの銃口から放たれたレーザーは、やはり僕を狙ってくる。さまざまな方向にかわす。は持っていた銃で、僕を撃ってきた。これもレーザー兵器だ。僕はそれさえも軽々とかわした。

先ほどから何重もの攻撃を重ねているのに、相手に全く当たらない。向こうが完全に見切っているのか、パーツの調子が悪いのか。無線機に、テペーラの声が入ってくる。

>ジャステイス！ウイングパーツのエネルギーが切れてきた。そろそろ潮時だ<

ジャステイスはそれを聞くと、円盤から刃を切り離し、それを少年に向かって向ける。同時に足と胸のレーザー兵器を起動させる。その足と胸のそれは、チャージを開始し、間もなく臨界する。そして手に持っている銃を少年に向けた。円盤の刃も、その刃先からレーザーを撃ちだす。ジャステイスの装備している全ての銃口が火を噴いた。

僕は、青年が全ての砲口をこちらに向けているのを悟った。胸の砲口のエネルギーがチャージされている。そこが火を噴くと同時に、他の銃口も一斉に火を噴いた。僕は青年の手前へと逃げ込んだ。レーザーをなんとかかわす。そして、走り続けて、真下まで滑り込むように逃げてきた。レーザーが止まると、青年は逃げようと僕に背を向けた。

「待つて！ 君の名前は！？」

僕は力の限りにその背中に叫んだ。彼は僅かに躊躇った後、答えを返す。

「ジャステイス・ファイア」

それだけを言うと、彼は空高くへと行ってしまった。どうやら、奈々達もどうかドラキルを静めたようだ。ドラキルはピクリとも動かなかった。彼は、一体なんだったのだろう。なぜ、ここに来た？

なぜ、僕達・・・・いや、僕を狙う？

「でも、何だったんだろ。あれは・・・・」

奈々が不思議そうに声を漏らした。もちろん、それはここにいる誰もが思ったことだ。唯一表情を変えない海も、青年のことが気になっ
っていたようだ。

「とりあえず、ミッションはクリアしたから、帰ろう」

僕はそう言った。どうせなら、もうここには長居したくない。僕らは、今来た道を逆戻りして、シャトルRへと戻っていった。

第二章 エピローグ

クリエイターである僕、矢倉潤は、パートナーである桜井奈々と共に、モンスターが数多く生息する世界、「魔界」のモントール星へとおもむいた。そこで現れたのが、群れを統率するリーダーのモンスター、ハリウス。その伸びる腕と素早いフットワークを武器とするハリウスに対し、僕は恐怖感しかなかった。だが、そんな状況下で、突如、僕の周り（僕の体も含め）の時間がゆっくりになった。その時間を利用し、なんとか避ける方法を思いついた僕は、ハリウスの攻撃の回避に成功した。

だが、その後僕の体に異変が起こる。突然、僕の体は他の誰かにのつとられたように自由が利かなくなつた。僕の体をのつとつたやつは、自らをキラーと名乗つた。幸い、一定時間が経つと元に戻るようなのでとりあえずは安心だ。

ミッションを終了させた僕と奈々は、ロントの魔界支部へと再び足を向けた……。

クリエイターである僕、矢倉潤は、ある日パートナーである桜井奈々との交際噂が流れてしまう。目撃されたのは僕と奈々がハリウス討伐を話し合つて帰つていた日だった。その噂が引き金となり、高橋に、道場やぶりならぬ教室やぶりをされる。僕はなんとか高橋の攻撃をかわし続け、最後の最後でキラーが僕に代わつて高橋を殴りつけたが、こちらも体力切れでダウン。両者共に倒れた。

しかし、その姿を目撃した僕の担任の教師は、見て見ぬ振りをした。僕はそのときに、普段感じるこのない怒りを覚えた。勇がなんとか僕を保健室まで連れて行つてくれたことには感謝している。

その後、僕と奈々はロントから呼び出された。奈々によれば、チームを作ることができるらしい。僕と奈々は二人のメンバーを加え、チームを結成した。元気のある少年、滝山修二と、堅物な少年、原岡海。チームの枠に入ろうとしない海に、僕らは不安を感じるが、

チーム名を「チーム・スレイヤー」に決め、さっそく、次の日のミッションに備えようと各員は、僅かな休息を取っていた……。

海を中心としてだが、わずかにぎこちない雰囲気こそ否めなかったが、僕達の初ミッションは、炎王と呼ばれるドラゴレイド・キル。通称ドラキル。そのドラキルの討伐の最中に一つの戦闘機が現れた。中から現れた青年は、驚くべきほどの身体能力を見せ付けた。

さらに、彼は、どこからともなく飛んでくる物体を体のさまざまな部分に取り付ける。特徴的な蒼い翼をはじめ、円盤型の武器、銃、胸に取り付けられた砲台のようなもの。足の砲台。その全てがレーザー兵器という恐ろしい武器だった。

青年は自らを「ジャステイス・ファイア」と名乗った。そして、彼の戦場への乱入により、戦場は混乱し、ドラキル討伐にも、時間がかかった。

戦闘の終了したチーム・スレイヤーは、彼の正体を掴めぬまま、ミッションを終了させることとなった。

14、見えぬ傷

僕達は、とりあえず、ドラキルの討伐報告をして、各自報酬を受け取った。かなりの額だ。この前のハリウス戦の時の数倍はある。

そして、あの青年——ジャステイス・ファイア——の情報。こちらは、調査課の職員に報告することにした。

「やつと戦闘したのか……」

「知ってるんですか？」

奈々が聞き返す。ということは、ロントでは彼のことは内密にしておいたということになる。

「ここ最近、数度、やつを目撃、または、戦闘をしたという報告があった」

「それって、どのくらい前からなんですか？」

今度は修二が聞いている。確かに年月の長さによつては、かなりの問題になりそうだった。

「それが、二週間も前じゃないんだよ」

その言葉に、三人は驚愕した。海でさえ、僅かに反応していた。

「それに、彼が戦闘するのは、決まって何者かが戦っているところに突然乱入してくる、というところなんだ」

確かに、僕らのときも、ドラキルとの戦闘中に現れた。戦闘機に乗って現れた彼は、僕ら、というより、僕一人を狙って攻撃してきた。攻撃の速度がかなり速いのが特徴的だった。だが、それ以上に特徴的だったのは、天空を飛んでくる武装だ。あの蒼い翼が頭の中に蘇る。あのときは完全に押されていた。こちらが空中に攻撃ができないといはいえ。

でも、その戦闘時に、僕は、一度も攻撃しなかった。攻撃の構えさえしなかった。押されるのも当然だ。そう、結局、なにも変わっていない。強くなりたいと思った。力を手に入れ、強くなつたと思っていた。それはただの思い込みだった。どんな強大な力を手に入

れても、それを使いこなせなければなんにもならない。僕には、この力を使いこなすことはできない。おそらく。

「勝手に戦闘に介入することで、もうその戦場は大混乱というわけだ」

淡々と職員が説明する。彼がやってくるのは、戦場という種をまいた自分達のせいなのか。それとも、その種に水をかける彼自身のせいなのだろうか。でも、例えその花が咲いても、自分達と彼の咲く答えの花は違う。彼は、なぜ戦場に介入してくるのか。なぜ、違う答えの花を咲かせようとするのか。

「彼は、一体何なんですか」

奈々が問う。職員は、僅かに返答するのを躊躇ったが、すぐに言い始めた。

「さまざまな仮説が立てられているが、何かの軍に所属しているとか、あるいは複合されてできた戦士なのではないかというのもある」
複合された戦士・・・？

僕の頭の中に、一つの単語がよぎる。それは、いつまでも頭から離れていこうとしない。

複合された戦士・・・複合された・・・。

複合・・・フクゴウ・・・。

複合。その単語が、いつまでも僕の頭の中を渦巻く。いや、それだけではない。そのせいで、頭痛までしてくる。視界がぐるぐると回るような感覚を覚える。めまいだ。頭痛とめまいに同時に襲われた僕は、態勢を崩し、背中から倒れそうになった。後ろに居た修二が、僕を抱きとめる。

「隊長！？ どうしたんですか!？」

修二がいつになく大きな声で、おどおどしながら僕に話しかけた。話しかけられても、さすがにこちらは話せる状況じゃあない。しだいに吐き気もこみ上げてくる。僕は手で口を覆い、そこにつつぶした。目が涙でほとんど見えない。意識も少しずつ遠のいていく。手足の力も抜けていく。まともに奈々や海、修二の顔を見ることがで

きない。僅かに耳の中に、僕を呼ぶ声がした。

奈々や修二は、ただ驚きながら、潤の名を呼び続けた。だが、向こうから返事はこない。修二は背中に耳を当て、心臓の部分に手を当てた。ほっとするように修二は答える。

「息はしているみたいです」

その言葉に、奈々もほっとする。なんで……なんで潤がこんな目に……。

「私は医務の方に連絡してくる。君たちは彼の様子を見ていてくれ」「あ、はい！」

奈々はそう言い返した。職員は、言い終わると、すぐにドアを閉め、医務室の方へと走り出していった。しまった。

「隊長の状況を確認してください」

そう言い放ったのは海だった。二人は驚きと共に、僅かな恐怖も覚えた。海が、他人を心配するような言動を言うなんて！

そんなことを考えているのは後のことで、奈々はすぐに、額に手を当てる。熱はなさそうだ。だが、顔は青ざめている。すぐに休ませておきたい。そこに、職員が医務室から医者連れてきた。奈々は状況を説明し、医務室へと、潤を運んでもらった。

「ああ、もう一体なんなんだあつ！あの蒼い翼のやつといい、隊長の気絶といい！」

それはこっちのセリフよと、ため息をつきなくなる。自覚はしていなかったが、どうやらため息をしていたらしい。修二がそれを指摘した。

「ため息がでるのも分かりますよ。隊長」

それを聞いて、今度は小さくため息を漏らす。修二の言うことも分かっている。ドラキルとの戦闘中に、突如戦闘に介入してきた蒼い翼。確か、潤はジャスティスだと言っていた。その上、今度は潤がいきなり体調不良を起こした。一体、これからどうなってしまふの

だろう……。

奈々は、今日三度目のため息を漏らした。

15、十年前 Act 1 複合

それは、潤がまだ三歳、年数でいえば十年前の話だ。その当時は、潤の父も母もいた。潤が誕生すると知ったとき、二人とも、子供が生まれるということに喜んでいた。その待ちわびた生誕の時は、父も母も潤の姿を見た。

その姿を見て、母、洋子は感激の声を上げた。自分の子孫となる者が自分の目の前にいる。それだけでも、かなり嬉しかったはずだ。洋子は退院した後も、朝起きてから夜眠りにつくまで、片時も目を離さずに育てるほどの親バカぶりだった。

ところが、その一方で、潤の父、正男は潤を見るやいなや、喜ぶどころか、全くの笑みを浮かべなかった。潤の姿を見た正男は、声も出さず、「よかつたな」と、冷たく言い放って病室から出て行った。嬉しさや驚きのあまり、声が出ないのならまだ納得できる。だが、そんな感情を全く見せずに、声を潜めた。

そんな出来事があった三年後、三歳となった潤が眠りについたころ、洋子と正男は口論となった。洋子には、全く理解のできないことを数々ぶつけられた。

「だから、どういうこと！？ もっと詳しく説明してよ！」

その言葉を聞いた正男は、ため息を漏らし、再び同じことを説明し始めた。

「だから、さつきから言ってるように、潤はこのまま野放しにしておけば、いずれは日本を、いや、世界をも脅かす恐怖の存在となる」
洋子からしてみれば、そんなのはほとんど理解ができない。第一、自分の体から生まれた普通の男の子が、世界を脅かす恐怖になるはずがない。それに、潤は体重も少ないほうだ。どちらかといえば、脅かされる立場の方がまだ納得できる。

「潤は、近いうちに俺の研究施設に連れて行く」

「やめて！」

洋子は否定した。なぜ、我が子をそこまで見放すことができるのか。研究施設？ 冗談じゃない。自分の子供をそこまで見下すものに、我が子を渡すわけにはいかない。

「それだけは！ 絶対に！」

洋子の瞳の奥が燃え上がる。絶対に渡したくないと言う保護欲。それだけが彼女の中に渦巻いた。自分の子供を研究施設に送り出すなんていやだ。ましてや、まだ四歳にもならない我が子を渡せない。

「やはりお前も同じのようだ」

「え？」

虚を突かれて、一瞬戸惑った。先ほどまで熱く語っていた彼は、一気に熱が冷めたように言い出した。

「お前も潤と同じように、世界を脅かすはずの存在だった」

またもわけの分からないことを持ち出してきた。潤も自分もそんなはずはない。自分がそうだとしても、潤だけは、潤だけは違う。

「お前たちには、そういう血筋が通っているのだな」

駄目………お前たちは駄目………『お前』………だけに………

洋子の中でカツと何かが弾けた。もう、このまま口論している暇はない。こんな人間に潤を渡すぐらいなら、いつそ殺してしまおう………。世間の評価や犯罪に手を染めるという罪悪感をも凌駕する、怒りと、ある種の諦観。

洋子は台所から包丁を取り出す。それをなんの躊躇もなく正男へと突き刺そうとする。正男はそれを軽やかにかわし、握られていた包丁を、いとも簡単に抜きさり、投げ捨てた。そして、素早く洋子の正面に回りこむと、腹部にパンチをいれた。洋子はその場に、腹を押さえて倒れこむ。

「安心しろ、明日の朝までに元通りの状態にしておいてやる」

そういうと、もう一度腹部にパンチをいれた。洋子は、その一撃で、意識を失ってしまった。

正男はすばやく、尚且つ足音を立てずに階段を駆け上がると、潤を抱き上げた。そして、起こさないようにゆっくりと階段を下り、玄関へと向かう。靴を履き、再び抱き上げ、ドアを開け、外へと出た。車のドアを開け、そこに潤をゆっくりと置く。ドアを閉め、自分は運転席に向かう。いつもよりも大きく聞こえるエンジン音に苛立ちながらも、車を進め始めた。

長い眠りから覚めた。前には車を運転する父の姿がある。僕はゆっくりと体を起こした。それに気づいた父が優しくに言った。

「ああ、起こしてしまったか、潤」

その言葉には優しい気持ちは伝わってくる。僕は何で父が車に僕を乗せて走っているんだろう？ 寝起きで意識がはつきりしないのだ。僕は、そのことを父に尋ねた。

「パパ。これからどこに行くの？」

僕の中には不安しか渦巻いていない。とにかく何かにすがりつくように、父に行先を聞いたのだ。その不安をかき消すように、父は言い出した。

「これから遊園地に行くんだよ」

そのとき、僕の中でさらなる不安が渦巻いた。そして、それと同時に疑問も浮かび上がる。考える前に口からその言葉は出た。

「夜に遊園地って、やってるの？」

その言葉の答えに数瞬かった。

「ああ。やってるさ」

「でも、こないだ六時に閉まるから帰るんだよって、パパ言ったよさきほどよりも、かなり遅れて答えが返ってくる。

「パパが遊園地の人に使うからってお願いしてある。だから、潤は安心してお休み」

「うん……」

疑問が解消されたことにより、脳が安全を確認し、無意識のうちに張っていた気が緩み、眠気が襲ってきた。ごちゃごちゃ考える間も

なく、再び僕は眠りについた。

15、十年前 A c t 1 複合（後書き）

十年前のこの話は、数回に分けて進めていきます。
現在の話の中に、ちよくちよくはいつてくる感じなので、
よろしく願います。

16、深き眠りからの目覚め

僕の目の前に天井が映った。ここはどこだ？ というのが、率直な疑問だった。ゆっくりと体を起こす。白衣を着た職員が、こちらに気づいて話しかけてくる。

「大丈夫か？」

大人……というより、老人と言った方が近いであろう年代の男性が、僕の体の様子を案じた。どうやら、ここはリエイトの医務室か何かだろう。僕は、言葉を返した。

「はい。もう大丈夫です」

そういつて、僕はベッドから下り、靴を履く。まだ僅かな頭痛はあるが、行動できないわけではない。時計を確認した。五時……・くらいか……。ミッシェンから帰ったのは昼過ぎだったから、四時間くらいだろうか……。

「昨日の昼から今日の夕方まで、ずっと寝込んでいたから、少しは心配になったが、もう大丈夫そうなの」

え……。？ 昨日の昼？ まさか、そんなことはないだろう。きつと聞き間違えたのだ。僕は聞き返した。

「あの、今なんて？」

「え？ 少しは心配になったが……」

「いえ、その少し前で」

「ああ、昨日の昼から今日の夕方まで、というところかね？」

し……。信じられない。僕は啞然とすると同時に、別の意味で軽い頭痛を催した。睡眠時間は、四時間じゃなくて二十八時間だったということになるのだ。

「僕……。そんなに寝てたんですか……？」

「そりゃあもうぐっすりと」

僕はまたも啞然とする。まさか、この歳で一日以上寝るなんて考えもしなかった。これが明け方の五時なら、結構寝たんだな、僕。く

らいに感じられる。でも、一日以上なんて……！

幸い、昨日は土曜、今日は日曜なので、学校はない。だが、それよりも、なぜ、僕はあんなことになってしまったのだろう。確か、あの会話の中に出てきた、「複合」という言葉がいつまでも頭から離れなくなってしまうていた。……あれ？ あの時、頭痛とか起こったけど、今は全くない。なぜ？ 言葉の力というやつだろうか？

言葉というのは、いくら作っても、それを口に出したり、何かに書き記さなければ、誰にも知れることがない。逆に言えば、人が気分を悪くするようなことを口に出さなければ、半永久的に、その人が気分を悪くすることはない。つまり、あの言葉は、直接聞いてしまったから異常が発生したのかもしれない。

僕は医務室を出た。ドアを開いた先にいたのは、壁にもたれかかっていた奈々だった。奈々はびっくりしたようで、口を開けている。

「あ……大丈夫？」

「そ、それはこっちのセリフ！」

「あ、ごめん」

思わず「大丈夫？」なんて聞いてしまった。いつからここにいたのかは分からない。ちよつと前にいたのかもしれないし、実は昨日の昼からずっといたりしたのかもしれない。

「昨日から……いた……いた……」

奈々はそう小さく呟いた。僕は俯いた。申し訳ない。自分のためにずっとここにいてくれたことに。僕は、何も返すこともできない。

いや、一つだけある。たった一言。

「ありがとう」

奈々はその言葉を聞いた瞬間、笑顔を見せた。心配をかけてしまっただろう。僕は奈々の隣に並んだ。奈々はその笑顔のままで聞いてきた。

「でも、びっくりしたよ。一体どうしたの？」

どう説明しようか迷う。たぶん、単に頭痛と吐き気がただけでは

ないだろう。だが、あの言葉を口にしたら、たぶんまた同じことになるだろう。僕はただ黙って歩き続けた。奈々も、それ以上は聞いてはこなかった。自室の前までくると、僕はようやく口を開いた。

「じゃあ、また明日」

「うん。学校でね」

17、新たな真実

次の日、僕は普段通りに登校した。昨日もゆっくり眠ったため、頭痛はないに等しいと言っているほどに治まっていた。学校に着くやいなや、勇が飛び込んできた。

「潤、潤！ 聞いたか！ 蒼い翼の噂！」

蒼い翼という言葉に、僕は一瞬ビクついた。それってもしかして、ジャステイスのことだろうか。いや、まさか。そんなことがあるはずがない。確かに、ドラキルとの戦闘には蒼い翼を背中につけて襲ってきた。だが、それは魔界だけのことではないのか？ 彼はもしかしたら僕達と同じように、世界間を移動することができるのだろうか。

「聞いてないけど………何？ その噂？」

「いいか。よお——く聞けよ」

「う………うん」

僕はつばを飲み下した。勇は机に座っている僕に向かって喋り始めた。

一方、奈々もその噂をクラスの者から聞きつけた。蒼い翼。普通に考えれば、ドラキルとの戦闘時に現れたあの青年のことだ。だが、あれは魔界で起きたこと。こちらで起こるはずがない。

「どんな話なの？ それ」

奈々はクラスの女子に聞いた。彼女達はわかるがわるその内容を話した。

付近の高校で、なにやら騒動が起こった。原因は、そこに居座る二つの不良グループが暴れたことによるらしい。高校のグラウンドで対峙した彼らは、バットやらなにやらを武器にして、にらみ合い、そして、双方が一斉に飛び出した。殴り合い、時には血を見せるほ

ど大きな喧嘩だった。だが、そこに一人の青年が現れた。突然現れた彼を、ほとんどのものは目もくれずに戦い続けた。だが、そんな彼は銃を喧嘩している生徒達の武器となっているバットに命中させた。そのことに気づいた彼らは、青年に初めて気がついた。お互い攻撃をやめ、彼に視線を集中させた。

「誰だよ、おめえ」

「やめてよ………」

「ああん!？」

彼はゆっくりと迫ってくる彼らに全く屈せず、言い続けた。

「もう、戦うことは、血を流し合うのはやめてよね………」

「うるせえっ!」

不良の一人が彼に殴りかかるが、彼は軽々しくかわす。そして、彼は耳に手を当て、呟いた。

「ウイングパーツ、グローブパーツ、ウイングウエポンパーツ、射出」

「分けわかんねえことってんじゃねえぞこらあっ!」

今度は先ほどよりはるかに大人数がこちらに向かってくる。

しかし、それすらも彼は軽々しくかわして、不良達に向かって走り出した。だが、不良グループは、突如現れた乱入者を叩くという同一の目的のため、手を組んで彼に襲い掛かってきた。

彼は常人よりも高いジャンプで彼らの頭上に来て、そのうちの一人の頭を踏み、さらに高く舞い上がった。そこへ、なにやら不思議な飛行物体が飛んできた。空高くに舞い上がった彼は、そのうちの一つを背中に取り付けた。そして、腕になにやら手袋のようなものをはめ込み、さらに、その腕に円盤型のものを持っていた。彼らはその様に驚いていた。だが、彼らがさらに驚いたのは、その背中に取り付けたものによって、空を飛んでいることだった。

「キャストレーザーパーツ、レッグレーザーパーツ、射出」

それを言い終わると、彼は不良たちへと突っ込んだ。不良たちも屈することなく、上空から襲い掛かる青年を待ち構えた。

青年は手に持っていた円盤を振り回す。自らも共に回転しながら、不良たちの間を抜けていく。その攻撃を受けたものは、ほとんどが気絶していた。どうやら、あの円盤についている刃は、ワザと刃毀れさせてあった。

彼は、再び上空へと舞い上がる。そして、胸と足に、なにやら砲身を取り付けた。取り付けた数十秒後、胸の砲口から光の弾丸が飛んでくる。いや、あれは弾丸ではない。まっすぐにこちらに向かってくるレーザーだ。彼らはなんとかそれを避けた。

それに引き続いて、今度は足に取り付けてある砲身を掴んだ。そして、不良が多く居るところに向かって、各一発ずつ打ち込んだ。ほとんどの不良はそれに巻き込まれた。かなり威力を弱めてあったらしく、直撃を受けたものも、気絶で済んでいた。

それでも残った不良達は、青年に石や持っていた武器を投げた。が、かわされたり、上昇されたりして、全く当たらない。そして、彼は呟いた。

「言っても分からないから……」

彼はそういうと、持っていた円盤を背中の翼に取り付ける。そして、その円盤から八つの刃が飛び出す。そして、各武器のエネルギーをチャージする。そして、各武器から、レーザーが放たれた。

「はあああつー!」

その攻撃の範囲は広く、全てのものが巻き込まれた。彼はその光景を僅かな間だけ見て、どこかへ飛び去っていつてしまった。

「………っていう話なんだよ」

勇がようやくその口を閉じた。長い。というか、かなり細かいところまで伝わっている。いや、そんなことはどうでもいい。問題は、話の中に出てきた青年だ。翼といい、攻撃といい、全てがあのと一致する。僕は、とりあえず、ジャスティスのことを避けて、別の質問をした。

「それって、一体誰からの話？」

「喧嘩を見ていた教師や生徒かららしい。まあ、生徒はほとんど女子だったらしいけどな」

勇の話……というより、その噂が本当なら、ジャスティスは、いどこに現れるか分からない……神出鬼没ということになる。

その噂を聞いた僕は一日中悩みまくった。あのとき、なぜ僕を狙ったのか。攻撃はしていない。向こうの一方的な攻撃だ。彼が僕を狙った理由、そして、各地での戦闘介入。まだ、彼については分からないことだらけだ。

長いように感じた一日が終わった。勇と共に家路に着く。家に帰ったらロントに行くか。他のメンバーのことも気になる。

「潤さあ、蒼い翼と会ってみたい？」

「え……」

会ってみたいものにも、実際に戦ったんだから答えようがない。第一、会えるとしたら大きな騒ぎを起こしたりしたときだろう。勇はそのことを分かっているのだろうか。

「勇は？ 会ってみたいと思うの？」

逆に質問をして、なるべく自分が答えるまで時間を稼ぐ。勇からは、割とあっさりと答えが返ってきた。

「とんでもない！ あつぶないじゃん。あんなの」

やっぱり、勇もそう思っているのか。あの青年は危険だと。会ったこともないのにここまで警戒するところを見ると、よほど強いのだと感じているのだろう。まあ、実際強いが。自分が技術的にも、精神的にも敵わないと感じている相手だ。

そうこうしているうちに、家まで着いた。少しほっとする。僕は歩きながら振り返り、勇に向かって手を振った。

「じゃあね、勇」

「ああ、また明日な」

僕はその一言を聞くと、扉を開け、そして閉めた。そのまま、何も言わずに階段を上り、部屋のドアに手をかける。その瞬間、僕はハ

ツとした。母さんは、今日は遅くなると言っていた。つまり、鍵は開いていないはずだ。それなのに、鍵がかかってなかった。まさか・
・・・・泥棒とか入ったのでは・
・・・・。

そんな根拠のない被害妄想を膨らませながらドアの前でたたずむ。なにやら足音が聞こえる。しかも、僕の部屋の中から。僕は恐怖心のあまり、その場に凍りついた。ドアが開く。鼻をまともにうち、二歩ほど後ろに下がる。

「あ、潤」

「なっ。奈々!？」

なんと、僕の部屋には奈々がいた。どうやって入ってきたんだ!？家の鍵が開いてたならそこから・
・・・・、あ、もしかして、リエイトの僕の部屋からここに・
・・・・!

「奈々、どうやってここに・
・・・・」

「ロントから大掛かりなミッションが入ったの」

僕の話完璧にさえぎり、奈々が話す。聞く耳すら持とうとはしなかった。とりあえず、どうやって入ってきたかは置いておこう。

「それで、そのミッションっていうのは・
・・・・?」

僕は、僅かな冷や汗をかきながら聞いた。

18、基地進攻作戦

「ええええーっ！」

「そんなに驚くことないじゃん」

無理だ無理だ。そんなこと僕にできるはずがない。防衛ならまだしも、進攻だなんて！

「ブレイカーと、僕が互角に戦えるわけがないだろおっ！」

そう、奈々から聞かされたその作戦とは、ブレイカーの基地を攻め落とすという作戦なのだ。あの日、初めての戦闘もブレイカーとだった。僕は最前線で戦うことができない。戦うことのできる勇気がなかった。だからこそ、あときは銃を選んだ。今はキラーが攻撃するから、剣を選んでいる。つまり、僕が前線に出て戦うなんていうのは、戦力としても、役に立たない。むしろ邪魔になるだろう。「大丈夫だよ、潤なら」

「そ、それって……どういう……」

「その回避能力は尋常じゃないし」

奈々にそこを指摘されるとは思っていなかった。確かに、僕は自分でも納得できる程のかなりの回避能力が備わっている。けど、それだけだ。攻撃を行うのはキラーだ。僕ではない。

「とにかくさ！ ロントに行こ！ もうすぐ皆来るし」

「え、あ……うん」

僕は、奈々に言われるままに返事をした。なんて流されやすい性格なんだろう、僕。聞かれたら「いいえ」と答えられないのが僕だ。誰と話していても、なぜか断ることができない。

結局、僕は奈々と共に、階段を上っていった。僕らを光が包み込む。そして、その光が薄れたころ、836号室、僕の部屋が目の前に映った。

「じゃ、十分後にチームルームでね」

奈々はそういうと、部屋を出て行った。それにしても、どうやって

奈々は僕の部屋に入ってきたのだろう。普通に考えれば、ここの部屋の鍵が開いていたから、もしくは、玄関の鍵が開いていたか。どっちにしろ、奈々は不法侵入ということにしておこう。もちろん、警察に言うつもりはさらさらないけど。

僕は、剣が納まっている鞘を肩に掛ける。そして、必要そうなものをポーチに詰め込み、部屋を出る。そのまま、まっすぐにチームルームに向かう。チームルームまでは一本道だが、曲線状の道になっている。それは、このロント巨大基地「リエイト」が、丸い構造になっているからだ。だから、通路のほとんどは曲線状で、まっすぐ歩くことはほとんどない。

しばらく行つた所で、肩がぶつかる。何も考えていないくらい考え込んでいたからだ。僕は、振り返り頭を下げる。

「あああつ……すいません！」

僕はおろおろしながら下げた頭を上げる。そこには、メガネを掛けた秀才のイメージを持たせる顔立ちの青年がいた。間違いなく、僕より年上だろう。

「これは失礼した。ぼくは、少しばかり考え事をしていてね」

「あ、実は僕もそんなですよ。ほんと、すみませんでした」

「君が謝る必要はない。君は壁際を歩いていて。真ん中でも歩いていればよかったほうが悪い」

「そんな！ 僕こそ、避ければよかったのかと思います。ほんとすみません！」

「君は、彼とは違って、礼儀がいいのだな」

彼？ だれのことかはわからない。だが、三回も謝ったのが、どうやら好印象を与えたようだ。

「君は、どこかのチームに所属しているのかい？」

「あ、僕はチーム・スレイヤーの隊長をやっています」

「ほお、あのチーム・スレイヤーか」

あの？ 僕らのチームは、そんなに有名なのか？ 全く理解ができない僕は、胸についているその名前を見る。和田………光男。

みつおとでも読むのだろうか？　だが、そんなことよりも、驚いたのが、彼の階級だった。なんと、彼はVランクなのだ。かなり高い位に属しているようだ。

「あ、では、これから作戦があるので」

「ああ、ブレイカーの基地進攻作戦か。がんばりたまえ」

「はい！　失礼します」

僕はそう言っで、相手に悟られない程度の速さで歩いていった。もう逃げているような気さえする。

長いような気がしたチームルームまでの道も、とうとうなくなつた。チームルームの部屋に入ると、そこには海と修二がいた。二人は立ち上がり、僕に向かって敬礼する。僕も慌てて敬礼し返す。そして、ゆっくりとソファに座る。

「聞きましたよね？」

「え？」

海が僕がソファに座った途端に聞いてきた。

「今回のミッションについては。桜井隊長から」

「ああ、聞いている。ブレイカーの基地進攻作戦のことだよね」

「はい」

なんか上から目線で見られたような気がしたが気にしないことにした。その後、修二と雑談をしているところに、奈々がやってきた。僕と雑談していた修二と、静かに本を読んでいた海は立ち上がり、奈々に敬礼する。七も敬礼する。奈々が僕の隣に座る。そして、今回のミッションの内容を説明した。

今回は、いままで行っていた魔界ではなくブレイカーがほとんどの星を占領しているという破界に向かうらしい。作戦の舞台となるのは、ヤルゾーラ星。今現在はほとんど占領率が少ない星らしい。今回は、その星に新たに作られているヤルドラ基地の破壊、及び、そこで作業中のブレイカーの掃討。そして、今回は、他のチームもこれに参加するらしく、報酬も、戦果しだいということになるらしい。

「それじゃ、みんな行こう!!」
奈々は高らかに言い放つ。全員が——潤を除いてだが——自身に満ち溢れた顔で出発した。

19、ヤルドラを染める血

僕達は、ブレイカーが多く住み着き、活動している「破界」にきた。ヤルゾーラ星というこの星では、今はまだブレイカーによる占領の面積は少ないが、その占領地を増やすべく建設中である基地がある。今回は、その基地の破壊及び作業中のブレイカーの掃討が目的だ。その基地が作られているのが、ヤルドラという場所、ということになっている。

今、僕達チーム・スレイヤーを乗せたシャトルRは、そこへ向かっている。僕らの前にも、二機のシャトルRが飛んでいる。他のチームもこれに参加するからだ。なにせ、基地の進攻だ。よほどの実力がない限り、複数のチームで向かうのが普通だ。クリエイターでもブレイカーでも、一チームだけが強大な力を持っているわけではないのだ。個々が生かせる能力を持って、初めてチームとして成立するのだ。

奈々のコクピットに、ヤルドラの空域に突入したという報告が入る。僕を含め、全員が、武器を手に取り、装備する。奈々も、片手で操縦しながら準備していた。

前を飛んでいたシャトルRが下降を始める。それに続き、僕らの乗ったシャトルRも下降する。少しずつ地面が大きくなっていく。前の二機が着陸したところ、僕達のほうも、降りたつ。前にある二機のシャトルから人が出てくる。五人と、四人。五人の方は、背が低いものが多い。それに、様々な色の服を持ち歩いている。潜入に適した装備と体型であることが、まだ素人の域を脱していない潤にもよくわかった。

一方、四人の方はガッチリとした体つきをしたものが多い。そして、それに見合った大型の武器を持っている。パワータイプというにはふさわしいものたちだ。

背が小さい者達は、僕達のところに向かってきた。

「チーム・スニーキング、隊長の井上いのうえ 尚ひさしと言います」

差し出されてきた右手を僕は見据える。そして、ゆつくりとこちらの右手を差し出し、その手を握る。

「チーム・スレイヤー、隊長の矢倉潤です。宜しくお願いします」
一方の奈々は、大きいものたちの方と手を握っている。少しばかり緊張と焦りを覚えてはいるようだが、特に気にかかる必要はなさそうだ。

「チーム・カイリキ、隊長の北林力也きたばやし りきやだ。よろしく頼む」

ガツチリと握られた手がようやく離れ、奈々が僅かに安堵の息を漏らしていた。さっそく、ヤルドラの地図を広げ、作戦会議が行われた。

作戦としては、チーム・スニーキングがヤルドラ基地内部に潜入し、内部爆発を行う。そして、その間に陽動も含め、チーム・カイリキとチーム・スレイヤーが外部で作業中の敵を殲滅するらしい。こうして、それぞれの役割を持った僕達は、各員の健闘を祈り、円陣を組んで、士気を上げた。

午前十時、作戦開始時刻と時を同じくして、僕達は真正面から攻め立てた。チーム・スニーキングは、今は裏側から進入しているらしい。

僕達チーム・スレイヤーは、これといって総合的に突出しているものはない。だが、各員の力はそれなりのはずだ。今までの戦いからも、それが嘘ではないことを照明してくれているはずだ。ハリウス戦、ドラキル戦、そして、ジャステイス戦。その戦いを通して、僕らは一人一人が、少なからず強くなっていた。といっても、僕自身がどのくらい強くなったかは分からない。何せ、攻撃という攻撃は基本的にキーラーが行ってきたからだ。

チーム・カイリキは、見かけによらず、すばしっこい。足が大きいから歩幅も大きい、といえば辻褄が合うのだろうが、それにしても速い。あつという間に作業をしているブレイカー達にたどり着き

攻撃を開始した。その騒ぎに、内部で待機していた戦闘用兵士が次々と現れる。彼らはチーム・カイリキの面々に攻撃をしている。だが、基地に攻撃するのはチーム・カイリキだけではない。

僕達、チーム・スレイヤーも戦う！

だが、実際僕はそんな勇気はない。懷から、ソードブーメランを取り出し、それをブレイカーの集団に投げつける。数人が傷を負い、こちらに初めて気がつく。そして、こちらに剣を向けてくる。しかも、正確に言えば、チーム・スレイヤーの内の僕に向けている。

僕は突っ込んできた兵士達の斬撃を軽くかわす。大振りの攻撃は、僕からしてみれば亀のような攻撃だ。そうして数人の攻撃をかわしているうちに、周りを取り囲まれる。仕方なく僕は剣を鞘から抜刀する。周りを囲んだ兵士達が全く同じ体勢からジャンプし、真上から斬りかかった。僕はそれを剣で受け止める。ぎりぎりと言わなくては、このままでは、斬られるのも時間の問題だ。

——俺がやる！代われ！——

突然にキーラーが頭の中で話しかける。そして、体の感覚がなくなり、キーラーが僕の体をのっとる。そして、僕を押し込んでいた全ての刃を押し返す。それによろめいた兵士達を、キーラーは次々に攻撃していく。足を斬り、腕を飛ばし、絶対に反撃が不可能な状態にした。そうして、周りを取り囲む兵士がいなくなったところで、キーラーは作業中のブレイカーに斬りかかる。

「はあああつー！！」

一瞬のうちに数人のブレイカーを切り刻む。さらに溢れ出てくるブレイカーに、キーラーは全く屈せず、突っ込んでいく。僕とは違い、攻撃のほとんどを受け止めている。かわすことはほとんどない。

「お前らあああつー！！」

キーラーは力と感情に身をまかせて突っ込む。ブレイカーに向かって叫びながら。

「いつも好き勝手やれると思うなアァッ！！」

その刃が、また数人のブレイカーを切り刻んだ。

風を切り、それでいて風を受け止めているかのように進んでいる一つの戦艦。雲の上を進むその戦艦は、一つの戦いを見つけ出した。この戦艦の艦長である一人の女性は、入ってくる情報に、ただ黙って聞いていた。

クリエイターの、ヤルドラ基地の進攻……か……。

しかも、どちらとも、かなりの戦力を携えて戦闘に挑んでいるようだ。戦いは数だけではない。その戦況を自分、あるいは自分達のものにするための力が必要だ。だが、力が大きければ、余計な被害を出すことだってある。

「ユナ艦長、ジャスティスを出しますか？」

この艦の艦長、シーナ・ユナは、その答えに僅かに戸惑ったが、すぐに判断を下した。

「今回は、ジャストも共に出します。しかし、ジャストは少し間を開けてから発進させて」

「はい」

それを聞くと、そのクルーは、通信機に向かって発進の準備を呼びかけた。

ジャスティスは、艦内に流れてくる通達を聞いていた。また、戦わなければならない。自分に与えられた力。この力を、どのように扱うかなんて自分次第だ。だったら……。

この力、正しい使い方をしなければ……。

「ジャスティス」

後ろから声を掛けられる。後ろにいたのは、いつも共に過ごしてきた親友がいた。

「ジャスト……」

ジャスティスの親友、ジャスト・キライスは、戦いを拒む彼に向かって言った。

「戦って何か欲しいわけじゃないんだろ」

ジャスティスはその言葉を聞いて僅かに微笑む。いつも、自分が戦いに行きたくないとき、そう言われてきた。自分は、戦って得るものなんてないと信じている。だからこそ、自分は何かを得るために戦うことは決してない。金も、地位も、権力も名誉も、戦いで勝ち取ることはない。いや、そんなことはしたくない。ジャスティスは、それらは少なくとも、戦いで勝ち取るべきものではないと思っている。たとえ世界がそういう思想に埋もれていたとしても。

だが、それでも戦わなければならないときがある。勝ち取るために戦うのではない。何かを守るために。ジャスティスは機体を立ち上げる。戦うしか、この身を投げ出さなければ、何も守ることはできない。目の前に青い空が見える。ジャスティスはペダルを踏み、機体のエンジンを点火させた。

「ジャスティス・ファイア、コアフライヤー、行きます！」

その一言と共に、一機の戦闘機は大空に飛び出した。

20、蒼い翼、紅い風

ジャスティスはコアフライヤーを操縦し、戦いが起こっているヤルドラの基地に向かった。彼の乗っている戦闘機の後を、いくつかのパーツがついてくる。ジャスティスは雲を突き破るように下降した。遠くからさまざまな戦いの音が聞こえてくる。銃声、鉄同士がぶつかり合う音。そして、やられた者たちの嘆きの声。ジャスティスには、その全てが嫌いな音だ。だが、自分もそんな音を出すことになる。それに僅かな抵抗を覚えながらも、彼は見えてきたヤルドラ基地の周辺にいる人に向かって、機銃を撃ち込んだ。

僕の体を借りているキラーはその勢いを衰えさせることなく、攻撃を続けている。いまだに溢れてくるブレイカー達を、いとも簡単ににはねのける。襲いくる刃を受け止め、撥ね返し、反撃に出る。ワンパターンな戦法だが、確実に数は減らしていた。

だが、また一人のブレイカーに斬りかかろうとしたとき、キラーは咄嗟に何かを感じ取った。攻撃される感覚だ。そして、地面にぶつかってくる弾丸をかわした。その弾丸はおそらく空からの攻撃。キラーは空を見上げる。一機の戦闘機が、こちらに向かってきていた。

「あれは……」

キラーをぼそりとそう呟く。戦闘機から人が飛び出してくる。そして、戦闘機の後ろについできていた部品のようなものが彼の体に取り付けられていく。全ての部品を取り付けた青年はこちらにまっすぐ飛び込んでくる。

まちがいない。あれはジャスティスだ。あのとき、僕らの戦闘の邪魔をしてきた。僕らのときだけではなく、そうだったのは幾度かあるらしい。つまり、彼は戦場を混乱させ、いらぬ犠牲者を出しかねないということだ。ドラキルとの戦いときだって、彼がこなけ

れば、ドラキルはあの一撃で倒せていたのに、余計に長引かせてしまったのだ。

（キーラー、あいつは……）

「分かってる！ あいつをあ空から叩き落す！」

キーラーはぶつきらぼうに言い返すと、迫りくるジャステイスを真正面から捉えた。ジャステイスは、円盤のようなものを背中から抜き取る。そして、それをこちらに振り下ろしてくる。キーラーはそれを剣で受け止める。だが、そちらに氣をとられている間に、ジャステイスは足に取り付けられたレーザー兵器で攻撃してくる。もちろん、かわせるはずがない。威力は最大限に弱めてあるようだが、それでも、こちらを吹き飛ばすほどの火力は持っているようだ。僕は、吹っ飛ばされ、地面で転がり、ようやくおさまったところで立ち上がる。

「まだ………終わってないんだよ！！」

キーラーはそう言うと、再びジャステイスに向かって走り出す。

しかし、その攻撃は放たれた機銃によって拒まれる。キーラーは、機銃が撃たれてきた方を見上げる。そこには、ジャステイスのものと違う戦闘機があった。ジャステイスは、確か蒼い機首から広がっていくような蒼い機体だ。だが、こちらは違う。機首以外が真紅を彩っている。一方の機首は白だ。その様は、まるで炎をイメージしているかのような。そして、そこから人が降り立ってくる。ジャステイスと同じ歳だろうか？ 身長も雰囲気も、ジャステイスと酷似まではいかないまでも、近い気がする。その背中には、風のような紅いパーツを背負っている。

「ジャスト………来たんだ」

「当たり前だ。こんな戦い、早く終わらせたいんだよ」

彼は少々ぶつきらぼうに言うと、こちらに向かってきた。速い。ジャステイスよりも速い。この戦場にいる誰よりも速い。

キーラーはなんとか攻撃を受け止める。だが、すぐに後ろに回りこまれる。攻撃されまいとすぐ振り返って蹴りを入れるが、その攻

撃を彼は軽々とかわし、腹部に拳を突き出した。

「うぐあっ!!」

キラーは倒れこむ。そして、僕は少しずつ体の感覚が戻ってくるのを感じた。目の前に、再び襲い掛かってくる青年がいる。僕の中で、恐怖心が頂点に達した。勝てるはずがない。これほどのすばしっこさをもつ目の前の青年と、大空を飛び回り、攻撃してくるジャスティスを同時に相手をして、僕が勝てるはずもないのだ。

だが、その恐怖心が再びあの現象を起こした。周りの時間の進みが遅くなる。唯一いつもどおりに動いているのは、僕の思考だけだ。他はまったく動かないといっているのは、僕の思考だけの時間を利用し、回避策を練った。あいつが、先ほど攻撃してきた場所、その直前の攻撃のかわしかた、攻撃パターン。回避の構想が成り立った、あれを回避する。だが、それを自分は実行できるのであるうか。それを迷っているうちに、時間は少しずつ元の早さに戻ろうとしていた。もうこうなったらいちかばちかだ。やられるなら、回避策を実行してからだ。

時間の流れが戻る。僕は、目の前からの攻撃を受け止める。そして、それを見た相手は素早く後ろに回りこむ。ここだ。ありったけの勇気を振り絞り、蹴りを繰り出す。

「はあっ!!」

その蹴りを、先ほどと同じようにかわす。これを回避しなければいけない。こちらの蹴りをかわした青年は、その拳をまっすぐ腹部に目掛けてくる。僕の片足は、さきほどの攻撃で浮いたままだ。だが、これを狙っていた。地に着いている足を滑るように地面から離す。それによって僕は体ごと背中から倒れこむ格好になった。腹部に向かっていた拳を掴む。そして、自分が倒れるのと同時に青年も倒れた。いわゆる、道連れだ。あっけなく倒れこんだ青年は、腰を強打したようだ。なかなか起き上がれそうになさそうだ。

「ジャスト!!」

ジャスティスがこちらに向かってくる。ジャスティスは背中につい

ていた円盤を抜き放ち、こちらに向かってくる。

——もう一度俺が行く！——

キーラーが再び僕の体をのつとる。そして、襲い掛かるジャステイスの攻撃を剣で受け止める。そして、腕をひねるようにして剣を動かす。それにつられて、円盤ごとジャステイスも横に半回転する。まさに、歯車状態だった。

こちらに背を向けたジャステイスに、キーラーは飛び掛り、その刃先を向けた。その刃先は、彼の心臓から揺るがない。

「うおおおおっ！！」

切っ先をまっすぐにジャステイスに向けている。だが、ジャステイスは次に思いがけない行動にでる。なんと、彼は、背中にある翼を切り離したのだ。それによって、剣は翼に命中した。翼が爆発し、キーラーは吹き飛ばされる。ジャステイスは翼を失い、地上での戦闘をよぎなくされた。これで、こちらのほうに勝機が見えてきた。

ジャステイスは目の前にいる少年の怒涛の連続攻撃に、ただただ圧倒されていた。あの見事な回避力は、以前の戦闘から変わらず、それに加え、時折攻撃を見せるといふ戦法に驚愕だった。一体、彼の中で何が変わったのだろうか？　だが、こちらは圧倒的に不利なことは明確だ。ジャストは戦闘不能、こちらも空中から攻撃できないため、こちらにほとんど勝機はなくなった。地上はもう彼のテリトリーだ。五メートルジャンプを使えばなんとかなるかもしれないが、それも無限に行えるわけではない。これ以上の戦闘は、ただこちらの被害を増やすだけになることを、ジャステイスは知覚していた。

「ウイングパーツ射出！これより、撤退します」

一方、その通信を聞いたテペーラは驚愕した。まさか、ジャステイスがウイングパーツのエネルギー切れ以外の理由で撤退しようとしているとは。今まで、こんなことは一度もなかった。いつもジャ

ステイスは悲しそうな顔をしながらではあるけれども、必ず勝利して帰ってきた。そこで起きている戦闘を、しっかりと中止させて。だが、こちらでは、まだ戦闘が続行されているという情報が入ってきていた。それも、ほんの二、三分前の情報だった。数も相当なものだから、いくらジャステイスといえども難しい話だろう。少なくとも五分は必要になっているのだ。

「ジャステイス！　なぜ撤退するんだ！　まだ戦いは続いているんだろ！」

『でも、あの敵……強いんだ……。それに、ジャストも負傷しているんだ』

——あの敵——強いんだ。信じられない言葉が耳に入ってきた。何かの聞き間違いなのではと錯覚した。その上、ジャストさえも負傷し、劣勢。彼ら二人を戦闘から遠ざけようとするほどの力をもつなんて、一体何百人の敵を相手にしたのか。

「ジャステイス！　一体何百人を相手にしてんだよ！」

『いや、その、相手は一人なんだけど……。』

またまた信じられない答えが返ってきた。確かに、「あの敵」、ということとは相手は一人だ。「あの敵達」ならまだ納得はできたのだが……。

「くそっ……。』

テペーラは小さく言い捨てた。

21、爆発する基地、撤退の翼

ジャステイスはあまりの劣勢ぶりに、戦闘続行は無理だと判断し、ウイングパーツを射出させた。しばらくしてウイングパーツがやってくる。だが、それに気づいた少年が阻止しまいと襲い掛かってきた。ジャステイスは素早く横っ飛びでかわし、ジャストの横に着地する。ジャストを抱きかかえる。が、その隙に少年はみるみるうちに迫ってくる。ウイングパーツがすぐ近くまで来ている。ジャステイスは右手にレーザーガンを構え、襲ってくる少年に撃つ。だが、彼は攻撃を一瞬にしてやめ、その射線かわした。だが、これがジャステイスの狙いだった。ジャステイスは、相手が回避に専念している間に、上空へジャンプした。いつもよりかなりの力でジャンプはしたが、いつもとあまり変わらないジャンプだった。背中にウイングパーツが取り付けられる。ジャステイスは、ジャストを抱えたまま、戦場を後にした。

襲い掛かる射線かわしたところには、すでにジャステイスは、もう一人の青年を抱えて、空中にいた。背中に翼が取り付けられる。

「逃げられる！」

射線を回避するため、一旦僕は体を取り戻した。だが、これがジャステイスの狙いだったらしい。僕は攻撃しない。だが、キラーは回避しない。この二つの欠点、ジャステイスの撤退を許してしまつたらしい。

僕が攻撃拒否、キラーが回避拒否。この二つのことを、一つの体で行う。すると、いくら敵の目前までキラーが迫っても、僕に代われば攻撃することができない。それが、最大のチャンスだったとしてもだ。一方、逆でも同じようなことが言える。敵の連続攻撃をかわし続けていても、キラーに代わってしまえば、よほど大振りの攻撃でないかぎり、受け止めるほうを選ぶのだ。それが、重傷

を負うような攻撃であつても。

もしかしたら、ジャステイスはこの性質を見抜いたのかもしれない。僕とキーラーで同じ体を共有していることは分からなくとも、この行動パターンの癖は分かったはずだ。だからこそ、彼は攻撃したのだらう。

ジャステイスの姿が見えなくなったところ、内部で爆破作業をしていたチーム・スニーキングから無線連絡が入った。

『聞こえるか。こちらチーム・スニーキング。基地内部に爆弾の設置が完了した。すみやかに他のブレイカーを殲滅し、五分以内に撤退する』

「こちらチーム・スレイヤー。了解です」

僕は、その言葉を少しほつとしながら聞いた。だが、まだ敵はいる。僕達チーム・スレイヤーの隊員である修二と海はすでにほとんどのブレイカーを殲滅させていた。まあ、ほとんどは奈々が殺したらしいが。

チーム・カイリキのメンバーも全員が生き残っていた。僅かにブレイカーが残っていたが、このペースならすぐ終わりそんな勢いだ。その勢いのまま、チーム・カイリキはブレイカーを殲滅させた。

「こちらチーム・カイリキ。敵の殲滅が完了したあ」

外には僕ら以外には誰もいなかった。だが、基地の天井を突き破つて、チーム・スニーキングは戻ってきた。僕達は、爆発に巻き込まれないために、急いでその場を離れた。数分後には、すでに僕らはシャトルRに乗り込んでいた。

「シャトルR、発進」

奈々はそう言いながら、シャトルRを起動させる。ゆっくりと機体は上昇していき、やがて前進を始める。そのとき、後方に赤い何かが見える。僕は後ろを確認する。基地が、黒煙を立てて燃えている。爆弾が爆発したのだらう。僕は、僅かに恐怖心をかきたてられた。自分が、ブレイカーでなくてよかった。自分が、あの中にいなくてよかった。だが、それに反するかのような想いもよぎる。

でも、あの中にいた人達は皆、死んだんだ……。

彼らに罪がないわけではない。だが、生まれてきただけで敵と判断していいのだろうか？ あの場合はブレイカーだから、破壊者だからと、刃を、銃を向けていいのだろうか。そして、ただ殺してしまっただけだろうか。中には、なにもしていないのに、ただ隅でじっと小さく生活していただけでも、あれは敵だ。もしくは、いずれ脅威となると、襲ってしまったていいのだろうか。

必ずやること全てがそうだとは言いつけない。だが、そんなことばかりを繰り返して繰り返してしまっただけでは、単なる一方的な戦争だ。自分達の意見ばかりを押し付け、意のままに人を操り、世界を自分達の物にする。非戦闘員を殺し続けられ、いずれそうなるだろう。

そんな世界にはしてはいけない。そして、クリエイターはそうやってはいけない。確信できる。もし、そんなことが起これば、おそらくは……。

また、あいつ——ジャスティス——が現れる。そして、自分達だけを狙うだろう。戦いに突如介入し、いらぬ犠牲者も出すことになる。それは、戦闘を起こしている双方にとって、だ。

大気圏にシャトルRは突入する。そのまま、大気圏を突破する。前を先行している二機がワープを開始すると、奈々もワープを開始した。瞬く間に周りの風景が流れていく。そして、しばらく行ったところに、「破界」のロント支部が見える。そこに着艦したシャトルRは、パワーを落とされ、そしてハッチが開く。そこから僕達は出て行く。それぞれのリーダーが握手を交わすと、それぞれが報酬金をもらいに散っていった。

22、翼なき青年の想い

昨日行われた、ヤルドラ基地進攻作戦は——形式的には——無事成功した。ジャステイスも現れたりはしたが、なんとか撃退には成功した。

僕は、報酬金の額に驚愕した。二千五百ルギ！ 日本円にすれば二万五千円という——僕からすれば——大金だった。その報酬金を握り締め、部屋に戻る。貯金箱にルギを入れ、部屋の鍵を閉めたのを確認してから、僕は部屋に戻っていった。

次の日、僕はいつも通りの登校をした。今日はいつものように勇からの噂話もなく、平穩に過ぎていった。なぜか今日は、喧嘩も売られなかった。少し拍子抜けしてしまいが、それでも、逃げ帰るよりは、ヘトヘトになるよりはましだった。

帰りは勇は今日はラグビーの練習に付き合わなければならないかと、断ってきた。あいつが、ラグビー部のタックルを受けて吹っ飛ぶ姿が浮かんで少しおかしかったが、本人の前なのでなんとか我慢した。

帰り道の途中に大きな橋がかかっている。その下には大きな川がある。興味もないから、川の名前は覚えていない。でも、緩やかな流れは僕の心に癒しと安らぎを与えてくれる。少なくとも僕は、この川にそう感じていた。

僕は、川沿いの人影に目を落とす。ただの青年のような気がするが、どこかで見たことがあるような気がした。いや、会ったことがある気がした。自分にとっては、かなり重要な人物の気がした。僕は、無意識のうちに川の土手を滑り下りる。そして、その後ろ姿を見て確信する。昨日も会った。確かに。僕は、彼に声をかけた。

「こんなところで、なにをしているんですか」
その声に気づいた青年は、こちらを見やる。少しばかり驚いていたが、すぐに優しい口調で確かめた。

「君は……あのときの……」

その青年は、ジャスティスだ。いつものように、針金のようなものもついておらず、服も違う。私服だった。僕はもちろん、ジャスティスも僕のことを覚えていたようだ。僕は、声をかけたにもかかわらず、言いたいことがよく見つからなかった。だが、無意識のままに言葉は口からはき出た。

「なんで、いつもいきなり戦闘介入をしてくるんですか」

「それは……」

彼は言いよどむ。なぜ、戦うのか、なぜ、銃を取り、相手に向けるのか。わざわざ、いずれは止まる戦闘を長引かせるようなことをするのだろうか。

「戦いを止めたい。ただそれだけだよ」

彼の目は、悲しい目をしていて。それは、こちらに対して言いづらい雰囲気があったが、それ以上に、何かに縛られているような、そんな目だった。なんで、戦いを止めるために戦う？ 僕に言わせれば、結局は戦いを逆に長引かせ、いらぬ犠牲者、もしくは負傷を招く。

「どんな命だって、護られる権利があるんだ」

その言葉は、一段と大きな意味を持つている気がした。その言葉を発したとき、ジャスティスの目には、悲しみと共に、強い意志の目があった。

「だから僕は、この力を使うんだ」

ジャスティスは拳を握る。その拳を見下ろしているジャスティスには、やはり悲しみと強い意志の目があった。力を使うことで、戦いを止め、本来あるべき尊い命を護る。だが、力を使えば、誰かを傷つけることになる。

「なんで……」

僕は、やはり無意識のうちに言葉が出ていた。

「同じ力という種を体に植えても、違う使い方の花を咲かせるんだろ……」

その言葉の意味も、僕自身ですら、よく分かつてはいなかった。けど、その言葉を放って少しして、その言葉の意味を悟る。

人には、それぞれ力がある。その強さは違っても、人は皆、力を持っている。けど、その力という種を自分の手の内に入れたとして、その使い方が、それぞれで違ってくる。科学の研究に使う者、人を守るために使う者、正しい使い方をすれば、それは人類の発展と、安全が約束されるはずだ。だが、その使い方を誤り、力で人を支配し、全てを思い通りに動かそうとする者もいる。力の弱い者は、ただそれに従い、時に抗う。そして、抗った者は皆処罰される。そんな、独裁者の作る世界は、けしていいものではない。そんなふうに、使い方を誤れば、人は皆、その者から離れるだろう。

いや、違つかもしれない。力はそれぞれが持っている。だからこそ、それぞれが、自分の力の使い方は正しいと思い込んでいるのだ。誤っているなんて思いたくない。いや、決して思わないのだ。本当に力を間違っって使っている者は。正しい使い方をしていれば、その力で人を傷つけたり、悩ませたりしたときに、ちゃんとそれを自覚する。

だが、目の前にいる青年は、自分の力が誤った使い方をしていると思わないのだろうか？守られるべき命を守る。だが、どちらかを守ろうとすれば、必ずもう一方を傷つけることになる。守ることができなくなる。だからこそ、彼は両者に対して攻撃をしてくるといふのか。

「力を闇雲に振るうだけが、守る方法じゃない。僕はそう思う」その一言を最後に、僕はジャステイスに背を向けた。お互いにかなり意味深な発言をした気がしたが、時間はかなり短かった。家までの道のりは、ここからはほとんど遠くはない。この川からなら歩いて五分もあれば着けるだろう。それくらい近い場所に、この川はある。

僕は、家に帰り、母さんに「ただいま」と一言言って、自室へと続く階段を上っていった。自室に入り、窓を開ける。目の前に光る

階段を上り、もうひとつの自室へと向かっていく。徐々に光が包み込んでいく。そして、自分の部屋にたどり着いた。僕はロントの制服を身に纏った。そして、貯金箱に入っている中から数ルギを取り出し、財布に入れ、ロントの食堂へと、足を運んだ。

23、失踪の友、焦燥の少年

ジャスティスとの思いがけぬ対話から数日が経った。明日から春休みに入る。修二は、中学の入学準備が忙しいとかで来られないらしく、チームスレイヤーは、しばらくは三人で活動することになった。もちろん、そのせいで、チーム内の活気が激減したのだが。

終業式の日である今日、勇は休んだ。勇にしては珍しい。誰も座っていない椅子と机を見て、僕は思った。だが、かばんを下ろしたころ、他の生徒からの噂が聞こえてきた。

「なあ知ってるか、勇、失踪したらしいぜ」

「ええっ！ マジかよ！」

「マジもマジ、大マジ」

勇が——失踪！？ まさか、ありえないだろう。さすがに今回は違うはずだ。滅多に休まないとはいえ、ちょっと怪我とか風邪とか引いたのだろう。だが、その予想も聞こえてくる噂で断ち切られる。

「でも、風邪とか怪我じゃねーの？」

「でも風邪も流行ってねーし、あいつの運動神経なら車が来ても避けられるだろ」

確かにそうかもしれない。僕は一度振り切った——正確には振り切るうとした——不安を募らせた。普段から幾度となく部活の練習に付き合ってきたんだ。野球やサッカー、ときには女バスまで……。反射神経だって相当なものだ。勇は常に五感が激しく働いている。

いつだか帰りが一緒だったとき、勇はなぜかなにかを避けた。「砂を避けたんだ」と言っていた。冗談だとは思っていたが、その瞬間僕の目に砂粒がついた。

「うわっ、目に砂があっ」

「大丈夫かよ」

僕は軽く笑って「大丈夫」と返した。あのときは確かに砂をかわし

ただ。それに、砂をのせてきた風の動きも正確に捉え、かわしたのだ。あの五感能力、当時はなんとも思わなかった。その話は、僕がクリエーターだと気づく前の話だったからだ。気にかける必要もなかったのだ。だが、今ならかなりのことだと熟知している。目に見えない、視覚に頼って避けることのできない砂を、勇は軽々とかわした。砂をかわせるのだ。車をかわせないはずはない。

そんな勇が休むなんて、ありえない。だからこそ、失踪なんて噂が流れているのか。僅かに首筋に冷や汗が流れた。大切な友。それを失いたくはない。でも、意外にも風邪だったりするかもしれない。とにかく僕は、今日勇の家に行くことに決めた。

帰り道、回り道をしながら勇の家へ向かう。いつもの帰り道なら、僕の家の前を通るからだ。同じ場所を二回通るのは好きではない。だからこそ、勇の家、僕の家という順番で帰れるようなルートにした。いつものように、大きな橋のかかった川の上を歩くことはなかった。

かなり川が浅くなるあたりで、簡単に木でできた橋ができている。この橋は人、及び自転車専用で、車が通れるほどの広さはなかった。その橋を渡り、しばらく行ったところで、勇の家は見えてきた。もし、本当に勇が失踪したのなら、親も動揺するだろう。でも、勇に失踪する理由はない。失踪して、いいことすらもない。

勇の家のチャイムを鳴らす。誰も出てこない。というか、なぜか人の気配すらしない。ドアに手をかけ、引いてみると、鍵は開いていた。

「お邪魔しまーす」

僕はそういいながら家の中へと踏み入る。入ってから何回か呼び出してみたが、何の反応もない。もし、失踪ではないとしたら、病院に行っているのだろう。そうであって欲しいのだが。

居間に入った僕は驚愕した。勇の両親は倒れていた。胸に耳を当てると、まだ心臓は動いている。どうやら、気を失っているようだ。そのとき、僕は目の前からする足音に気がついた。

「人間はいつも醜い争いをする」

目の前には一人の少年が立っていた。家の前に立っても人の気配などなかった。それはつまり、この家から自身の気配を、この少年は消していたのだ。涼やかなようで、憎悪のようなオーラを放っている——ような気がする——少年だ。だが、彼の言っている意味は理解できない。

「だからこそ、自分の身を守ることができない」

「あなたは一体……」

少年はすぐに答えを返してきた。だが、答えはかなりそっけないものだ。

「紅龍。それが俺の正体だ」

この少年は、やはりどこかつかめない。第一、姿を隠してもいないのに正体とは……。だが、少年はそんな僕にお構いなしに、歩き出した。

「君が会いにきた少年は、我々が預かった。彼は三つの世界に必要な存在なのだ」

そんな……。彼らが、勇を誘拐した！？というより、このようなことを起こしたのは、彼一人ではないということなのか。なぜ、勇を奪っていったのだ。なぜ、彼が世界に必要なのか。三つの世界というのは、恐らくは、この地球のある世界、モンスターのうろつく「魔界」、ブレイカーが多くいる「破界」の三つの世界のことなのだろう。この龍という少年は一体……。

「君のことだっけ知っている。君は、彼が定めた禁句を聞くと錯乱することだ」

「……」

禁句……。複合のことだろうか。というか、それは何者かが定めたものなのか。誰が、僕にこんなものを定めたのだろうか。僕自身が知るはずもない。もし、その言葉を誰かに聞こうとし、直接聞いてしまったら、また僕はあの状態に陥ってしまうのだろうか。

「意思」

彼は一言、そう呟く。その瞬間、僕はかなりの頭痛を引き起こした。世界が回る。

意思——いし——イシ——！！

「うあああああつ！！！！！！」

僕はかなりの声量でわめいた。頭痛がまったく止まない。吐き気もしてきた。僕は、必死の思いで窓を開け、そこに胃の中ものを吐き出した。そうすると、僅かに楽になった気がしたが、頭痛は治まる気配がない。いつまでも頭をうならせる。少しずつ意識が薄れていく。

「君は……い……を……つさせ……べてのも……むに……」

龍という少年の言葉が途切れ途切れに聞こえてくる。だが、それはほとんど記憶に残らずに、僕の意識は薄れていった。

龍は、意識が薄れつつある潤に向かって言った。

「君は、いつか世界を破滅させ、全てのものを無に帰す」

それを言ったことも、禁句を放ったことにも、龍は後悔はなかった。早いうちに、潜入先で作戦を実行させなければならぬ、ということ、龍は考えながらも、その場を立ち去った。

24、来訪者

潤が気を失ってしまったところ、奈々達は潤を探していた。家に行っても帰っていないらしいし、所在も分からない。学校で聞こうにも、また妙な噂を立てられるのも嫌だった。だからこそ、自力で探していた。学校のことよりも、潤の方が心配だった。パートナーとして、同じリーダーとして、かけがえのない仲間として。

奈々は空が赤く染まるまで探し続けた。だが、潤の姿はなかった。

地球のとある場所、ジャステイス、ジャストらを乗せた戦艦は、補給の真っ最中だった。艦長、シーナ・ユナは、自分の艦を見上げていた。

後ろから声を掛けられた。聞いたことのない声だ。こんなところまで来る人がいるのかと振り向いた。

「あの、この艦に入れてもらえませんか」

かなり大胆なことを聞いてくる者だ。目の前にいたのは少年だった。優しい目をしていて。それにしても、なぜこんなところまで来たのか。しかも、この艦に入れて欲しいのか。

「この艦に……。つまり、自分もこの艦で共に戦いたいと？」

「はい。自分は、紅竜くれないりゅうと言います」

少年には、やはり優しい目しかない。だがなぜだろうか。

どこか違う気がする。その優しい目は偽りと物なのだろうか。なぜか、そんな気がした。

「この艦、ルナビートは、人手不足なんじゃありませんか？」

この船の所在だけでなく、名前まで知っている。単に戦いたかっただけではないのか。

「そんなことはないわ。この艦には十分な力を持ったものが二人もいる」

「ジャステイス・ファイア、ジャスト・キライス。彼らのことですね」

この少年は、一体我々のことをどこまで知っているのか。

「ですが、新たな力が迫っているんです」

彼はいきなり深刻な目つきをした。まったくの別人のように。このまま、彼を受け入れるべきなのだろうか。この艦で、彼を入れるかどうかを決めるのは自分だけだ。他の誰にも、そんな決定権はない。

「あなたはこの艦のことをどれだけ知っているのかしら」

「それは、入れてくれれば、迫っている新たな力もおまけで教えます」

どこか子供っぽい言い方をしているが、言い換えれば、教えて欲しければ入れる、ということになる。

「いいわ。とりあえず案内するわ。だけでもし、この艦の情報を他に漏らすような行為をした場合、問答無用で銃殺だから、そこはよろしく」

「はい」

彼はうなずく。そして、二人はルナビートへと入っていった。

艦内に入った。ゆつくりとした足取りで進む。勿論、重要な機密がある部分は近寄らせやしない。各所をまわったあと、艦長室に入れた。彼から聞き出さなければいけない。彼の知っている、全てを。「聞かせてもらうけど、新たな力とは？」

竜はシーナの座ったソファの向かいにあるソファに腰をおろした。

「複合され、その体内に全く血縁関係のない人間の意志を植えつけられた人のことです。複合人間とでもいいましょうか」

いきなりわけがわからないことを切り出してきたものだ。この少年は。シーナは心の中で舌打ちをする。それでも、表情は全く変えない。

「その複合人間は、ある条件を満たすことによって、内に植えつけられた意思が目覚めるのです」

つまり、迫っている新たな力というのは、その複合人間のことなのだろう。一体誰がそんな人間になっているのか。いや、それ以前に、誰の技術がそのような人間にになってしまうのだろうか。

「ですが、それ以上に危険なのは、その意思が直接自らの体を生み出してしまったときなんです」

「どういうこと？」

「つまり、意思が、複合人間の体から、自らの肉体を持って逃げ出す。そういうことです」

血縁関係の全くない者の意思を、人間の中に組み込み、複合される。その複合人間は、特定の条件を満たせば、植えつけられた意思が、体をのっとり、目覚める。だが、本当に恐ろしいのは、その意思が複合人間の体をのつとらず、意思そのものが肉体を持って、複合人間と分離したとき。それが、新たな力。迫り来る危険な力。

「分離した後に、複合人間にとつて衝撃的なことが起こると、複合の呪縛が解け、内なる力が目覚める」

なるほど。分離したときが恐ろしいのではなく、分離したときの内なる力が恐ろしいのか。シーナは話題を変えることにした。もうひとつ、聞くべきことが残っている。

「じゃあ、話を変えるけど、あなたはこの艦についてどれほど知っているのか、そして、どうやって情報を手にいれたか。説明してもらっわ」

「宇陸海空襲撃戦艦ビート級2番艦ルナビート。クルーは計二十三人。艦長はシーナ・ユナ。戦闘員は、ジャステイス・ファイア、ジヤスト・キライス」

基本的なことだが、なかなか手にはいる情報ではない。だが、竜は驚くべきことを発した。

「ちなみに、ルナビートのクルーは、全員が名前を持たぬもの。そのため、クルー全員が英名である」

「・・・・・・！」

シーナはその言葉に驚愕した。ここまで知っているととは思わなかつ

たからだ。シーナは、僅かにゆがんだ自分の顔に気がつかなかった。シーナは迷った。本当にこの少年を招き入れていいのだろうか。ここで拒めば、彼はどうするだろうか。力ずくでこちらを屈服させるのか、それとも潔く諦めるのか。

どちらにしても、これは迷い事に他ならない。ここで断って、向こうが暴挙に出ずに、黙って帰ったとすれば、情報が漏洩される可能性は格段に跳ね上がる。だが、招きいれるということは、更に深いこの情報を向こうに与えることになる。

シーナは、竜に分からぬように一つ、溜息をついた。竜は狙い通り、その溜息には気づかなかった。

25、十年前 Act 2 意思

正男は、自らの研究施設の前に、無造作に車を止めた。潤を抱いて歩き出す。駐車場の隣にある草むらから、物音がした。正男はそれを全く気にせずに研究施設へと入ろうとした。

「待つて」

入り口のセキュリティを解除していた正男の後ろから声がした。

正男は振り返る。そこには、八歳ほどの幼年がいた。勿論、彼が幼年とは、正男が勝手に決めたことだ。もしかしたら、あの歳だと少年と呼ぶほうがいいのかもしれないと思った。

「彼に……その子に何をする気？」

「君は……正義君じゃないか」

正義と呼ばれた少年にはなんの迷いもない。なるほど、話を逸らせでなんとかやり過ごせる相手じゃあない。それに、正義からは、僅かな殺気が出ている。同時に、守ろうとする目をしている。見ず知らずの子供でも、守ろうと思う。素晴らしいことだが、人の心配をするまえに、まず自分の心配をするべきだろう。

「聞かれたことに答えてください」

これで、小学一、二年なんだから、たいした者だ。だが、そんなことを言ってもなんの変わりもない。正男は敢えて素っ気ない答えを返した。

「君には関係のない話さ」

事実であつた。自分が今からすることは、目の前の彼には何の関係もないことであり、知る必要も、知って助ける必要もないのだ。

「関係あります」

「なぜ俺に纏わりつく、君は？」

「危険だからです」

きつぱりと正義は言い放つ。怪しい場所に、怪しい者が、なんの関

係もしていなさそうな者を連れてくる。そして、出てくるときは、何もなかったように、帰ってくる。極めて怪しく、危険な匂いがする。

「君には、これで十分だ」

正男はそう言っ指を鳴らす。闇の中に響いたその音に反応し、三匹のモンスターが現れた。小型の部類には入るが、大きさ的には、正義とほとんど同じだ。この動きや体の特徴から、このモンスターは、腕を伸ばして攻撃するハリウスの下位種のリウスだ。正男は僅かに笑みを浮かべながら、こちらを見ている。リウスの一匹が飛び掛ってくる。正義はそれをなんなくかわし、その腕を掴む。下位種のリウスは、腕を伸ばすことができない。だからこそ、このような攻撃に転じた。掴んでいたリウスを、別のリウスに投げ当てる。残ったリウスに急迫し、素手で殴りつけた。その一匹はそのショックで力尽きたようだ。その間に起き上がった残りの二匹を流れるように蹴りつける。そんな連続攻撃に、リウス達はたちまち全滅した。「確かに、この程度なら倒せるか。なら、こいつでとどまっていてもらおうか」

そういつて再び指を鳴らす。その音につられ、正義の倍の大きさはあるモンスターが現れた。むき出しているようにさえ見える筋肉、大きな腕と足。部類としては人型に部類する。だが、大きさはリウスの比ではない。

「では、がんばってくれたまえ」

そう言つと、正男は研究室の中に入っていつてしまった。

目の前に現れた巨大なこのモンスターは、正義はすっかりと記憶していた。サイズレベル、大型、危険ランクB。とてもではないが、七、八歳の子供が戦って勝てる相手ではない。そして、このモンスターの名前。こいつの名は、ギルル。大型モンスターの中でも、かなり強い部類に入る。攻撃力は、数いるモンスターの中でも、トップレベルだ。五発も攻撃を受ければ生きることが何者も許さないだろう。

正義は、攻撃を開始した。まずは顔面を殴る。攻撃しようとギルルが腕を引く。攻撃を受けないために、正義は顔面を蹴り、ギルルから距離をとる。ギリギリのところまでギルルの腕が止まる。どうにか間に合ったようだ。次は、走りながらひざの辺りに拳を入れる。そして、そのまま逃げるように後ろに逃げる。ギルルは後ろを振り返る。その隙を正義は見逃さない。今度は、ギルルの股の下を走る。そして、すれ違いざまに両拳で両膝を殴る。ギルルは、再度こちらを振り返り、大きく飛び上がる。巨体なのにここまで高く飛び上がるのも、ギルルしかない。もっとも、羽や翼のあるものは別だ。

正義は、バックステップでかわそうとする。だが、ギルルの拳の着拳点から放たれた衝撃波が、正義の足をとる。それによってしりもちをついてしまった正義に、ギルルのアッパーが入る。上に吹っ飛ばすというよりは回転させたような感じだった。だが、そう思ったのは後の話だ。

そのときの衝撃は並大抵のものではなかった。本当に遠くに飛ばされていくんじゃないかと思わせられるほど、ギルルの拳には威圧感があった。

「うあああつー！」

正義は地上二、三メートルまで飛ばされた。そのまま地面に体全体を強打する。かなりの激痛が走る。こんなのを五発も食らってたら骨が全部折れるのは必然的であり、それ以前に四発以上食らって立ち上がれるとは到底思えない。どうにか立ち上がった正義に、再びギルルが襲い掛かってきた。さすがに避けきれない。先ほどよりもかなりのパンチが来る予感がした。あれを食らったら、生きていれるかも怪しい。

一瞬とはいえ、回避できる可能性を失った正義は目を閉じた。

次に目を開けた時、眼前まで迫ったギルルが、なぜか腹を押さえながら後ろへと下がる。目の前には、一本の剣を右手に構えている、正義と同じくらいの少年だった。少年はギルルにも注意を向けなが

ら、こちらに目をやり、聞いてきた。

「大丈夫？」

彼の言い方には、どこか優しげな雰囲気さえあった。正義は、彼の姿に、ただただ驚いていた。彼は、答えも待たずに目の前に目を戻す。

「僕、炎道正義えんどう せいぎと言います」

なんとか体勢を取り戻したギルルに向かって、再び走りだす。二メートルの間もない距離を一瞬で移動した少年は、ギルルの足を斬り逃げる。ギルルはバランスを崩し、離れた少年の方に体を向ける。そして、そのままこちらに向かって倒れてくるのが見えた。さすがにこの距離なら届きそうで届かないだろうと思えた。どのみちここから避けることはできないのだが。

正義はかわそうとしてふらつく体でバックステップをとろうとした。だが、その足が拳の下敷きになる。完全に後ろに重心が傾いていた正義は、後ろにあった塀に後頭部を強打した。

なんで……こんなことに……何も守れずに……自分が守られるなんて……僕は……何かを守る力が……ない……。

強打した瞬間、一気に視界が真っ暗になり、意識が薄れていく。闇の中に消え去ろうとする意識は、正義のあるものも奪い去っていった……。

正義が意識を失ってしまったのをきっかけに、少年はギルルに急迫し、その腕を斬りおとした。少年の目から、怒りの涙がこみ上げた。自分自身に対する怒りの涙が。目が潤い、耳の聞こえが鈍くなった気がした。そのとき、耳についていた無線機から声がした。

>そのチビつれて帰って来い。今、あれを送るから<

その声も、ほとんどまともに聞こえたものではなかった。少年は、正義を抱き上げる。そして、開けた場所にゆっくりと歩き出した。

ギルルを呼び出してから、まだ間もない時間。正男は研究施設内で、ある装置のセキュリティシステムを解除していた。長いパスワードを入れると、装置に潤を拘束する。ほとんど宙吊りになっていた。手足には、合金の手錠をかけ、システムを作動させる。装置の隣にあるパソコンから、いくつかのデータを拾い上げる。正男は、そのデータを少しずつ結合させていく。そのデータはやがて、一つの生命体となつて、パソコンという狭い空間の中で生き始めた。正男はそのデータ生命体の意思を装置へと送り込む。正男は装置のほうに送られたのを確認し、装置作動のレバーを引いた。

「これで……ようやく……」

正男は引いたレバーを握りながら感激の声を漏らす。装置に電流が流れ込み、潤の拘束されている装置を作動させた。

「ああつ……がっ……がああああつ!!」

潤は悲鳴をあげ、流れ込んできた電流を受ける。体全体を走る電流は、彼の体力を徐々に奪っていく。ようやくおさまった電流の中から、かなりの傷を負った潤が見える。正男は手錠を外す。いたるところに見える傷を、カーゼやら何やらで仮初めの治療を施す。正男の潤に対する僅かな情けであつた。

装置には「成功」の文字が映し出されている。正男は装置のスイッチを切り、外に出る。そこにいたのは、血まみれになつて倒れていたギルルだけだつた。

26、邪悪な気配

奈々は、次の日も潤を探していた。学校が終わり、町中を歩き回った。だが、潤の姿はない。昨日は、普通に学校へは来ていた。今日来ていないということは、昨日帰ってから今日の朝までに、何かあったしか考えられない。そのとき、頭の中に一人の少年の姿が浮かぶ。潤とともにいつもいる少年だ。名前は分らないが、もしかしたら潤のことを知っているかも知れない。奈々は、唯一の手がかりを求め、今日は一旦引くことにした。

「ソルビートから通信？」

ルナビートの艦長、シーナ・ユナはその知らせを聞いて戸惑った。宇陸海空襲撃戦艦ビート級1番艦ソルビート。ジャステイスやジャストのように、強力な戦闘員はいないが、総数五十という戦闘員と戦艦そのものの火力は、ルナビートを大きく上回っている。だから向こうが連絡してくるのは、本当に極稀な話なのだ。

「いいわ。つなげて」

「はっ！」

慌ただしく通信回線を開く。モニターには一人の男の姿が映し出される。

「久しぶりね。艦長」

「どっちも艦長なんだ。名前で呼んでくれ」

相変わらずの艦長だ。数年前、二人は軍に所属していた。だが、わけあって軍を抜け出し、それぞれが艦を持った。だからこそ、二人は名前で呼び合うほうがしっくりきているのだ。

「ところで、なんでこちらに連絡を？ ストーム・アルフ」

シーナはその名を呼んだ。向こうは急に顔をこわばらせ、話し始めた。

「うちのスパイの情報なんだが……」

挑むような目つきでこちらを見てくる。僅かの間開かなかった口が開く。

「どうやらブレイカーが地球を攻め込むらしい。世界を超えてな」その一言にそこにいた全員が驚いた。ブレイカーといえども、クリエーターといえども、自分達といえども、地球が唯一住める場所。故郷なのだ。人間にとっては。それを攻め込むということは、地球の領土をブレイカーが全て奪うことになる。それでは、そこに住む人たちは一体どうなるというのだ。実際、彼らには破界がある。そこを住処にして暮らしていけばいいのではないのか。シーナは、聞き返した。

「クリエーターの方は？そのことを知っているの？」

「これも、こっちのスパイの話だが、どうやら、上層部の方にしか知れてないらしい」

「そのスパイ、上層部ってことかしら？」

「まあ………皮肉な限りだがな」

僅かな笑みを浮かべた後、ストームは再び顔を引き締め、語りだす。

「おそらくは、地球側も、各国が軍を出すだろうな。クリエーター

も、このまま黙ってはいまい。なぜなら………」

「ブレイカーを一気に数を減らす絶好の機会だから？」

シーナは、ストームの言葉をさえぎった。勿論、この答えは正論だ。各国が軍を出すのだ。少数ゲリラ戦法なんかでは制圧できるはずもない。つまりは、かなりの数のブレイカーを戦線投入してくる。もしかしたら、全軍なんていうのもありえないことではない。女子供まで戦場に駆り出される。そんなことはさせてはいけない。なにがあっても。

「作戦はいつごろの開始なのかしら」

「遅くても、一ヶ月以内には攻撃が開始されるらしい」

「わかったわ。報告は以上？」

「ああ。時間とって悪かったな」

そこで通信は途切れた。今現在、ルナビートは木星の周辺を漂って

いた。エンジンは起動させず、流れるように木星の周りを回っている。エンジン節約のため、あまり無駄遣いはできない。かといって、素早い行動を惜しむことはできない。だからこそ、このあたりを漂っていた。

もう、戦わない道を選ぶことはできない。

とある巨大な基地では、ブレイカーたちによる、最終作戦会議が行われていた。その一人であり、ブレイカーの最高総司令官の、グール・ブレイは、熱烈な演説で、会議を取り仕切っていた。

「我々は、地球という大地を手にし、ブレイカーの繁栄、ブレイクの拡大をすすめるのだ！」

その気迫ともいえる声は、その場にいた司令官達を圧倒した。それぞれの司令官は、各星々を取り仕切っている。それぞれが持っている全勢力を挙げて地球を制圧する。ということで話は決まった。

「作戦は今日から五日後、四月一日。作戦名「エイプリルベース」。
午前五時、地球進攻開始」

地球進攻作戦、エイプリルベース。自分達の領土を拡大し、自分達の力を全ての者に知らしめる。四月一日はエイプリルフル、嘘をついてもいい日だ。だが、その日に起こるのは、嘘でも冗談でもない、まぎれもない真実だ。会議が終わり、自室に入ったグールは、高らかな笑い声を上げた。

いずれ掴む、勝利の笑いを。

三月二十八日。僕は目が覚めた。長き眠りからの開放は、一瞬、僕に不安を与えた。一体、僕がこの状態になっていた一日になにがあったのか。奈々は？勇は？あの少年は？僕の周りに分らないことが多すぎる。僕は、なんとかまだ重い体を持ち上げ、外へと出た。いつもと変わらない風景。僕は、急いで自分の家へと走って行った。

28、動き出す鼓動

三月三十日、「エイプリルベース」まであと二日。一人の少年を護衛に持たせながら歩いてきた紅龍は、天高くに輝く月を見上げた。ここまでは全てが彼の計画通りに進んでいた。まもなく巨大な戦闘が起こるというのに、ここはかなりの静けさだった。ここはいい。うるさい虫や鳥は生息せず、肉となる豚や牛を大量に飼育している。さらには、地下に人工の小規模海を作り上げ、マグロやらなにやらを泳がせている。周りを森林に囲まれ、夏でも涼しい。龍にとつて、これほど裕福な場所はなかった。力を見つけるまでは。その力を手に入れるまでは。

静か過ぎる月を見るのも飽きた。龍は顔の角度を直すと、部下へ向かつて言った。

「やつの状態はどうだ？」

「かなりぐっすりですね。さすがは龍様の薬です」

「製薬を褒めるとは、なかなかいいところをついてくるな」

「ありがとうございます」

深々と頭を下げる部下に、僅かに笑みを見せる。

「明日は戦闘前夜だ。飼育課と調理課のやつにはごちそうの準備を言い渡しておけ」

「了解」

部下は返事を返すと、「失礼します」と言つて頭を下げ、何処かへと行つてしまった。

クリエイター、ブレイカー、地球軍、我々、そして、ルナビートとソルビート。クリエイターと地球軍は協力するだろう。ビートの方はおそらく、我々やブレイカーだけを狙うだろう。各軍とも、味方と敵を判別して戦うだろう。だが、我々は違う。全員を狙う。表向きではブレイカーに味方するように地球に進攻する。だが、そのどさくさに紛れ、ブレイカーを殺していく。まるで相手の攻撃が当

たつたかのように。そうしていけばいずれ我々以外は全て戦死する。そして、誰も治められなくなった地球の支配権を、自分たちが握る。あの方の望む、世界人類の意思統一への第一歩が。

「間もなく訪れる……ドラゴンの世界が」

ブレイカーの地球進攻作戦。一昨日リエイトの掲示板でそれを知った僕は恐怖のあまり僅かなめまいを感じた。倒れこんだりはしなかったが、部屋に戻ってから、僕は自分の足が小刻みに震えているのに気がついた。

そういえば、そのこと以外にも、掲示板には報せがあつた。「蒼い翼を持つ、ジャステイス・ファイアと名乗る少年には注意せよ」とあつた。そして、そのすぐ下には、「矢倉、桜井率いるチーム・スレイヤーが撃退に成功。しかし、今後とも警戒を怠るな」とあつた。つまり、あれだけの手紙が来ていたのは、この掲示板を見たからだつたのだろう。僕は納得した。そうなれば、そりゃまああんなに手紙もくるわけだ。

「ジャステイス……」

ジャステイス。なぜ戦闘介入をしてくるのか、この間まで知らなかった。全ての命を護るため、自分は力を使い、戦う。もし、ブレイカーの地球進攻作戦のとき、彼らがこちらについたときどうする？ 彼らすら追い払うか、共闘するか。

「正義……か……!!」

突然、激しい頭痛が襲った。ここで倒れたら、地球進攻作戦ギリギリに起きることになる。僕は症状を起こした禁句を探した。

（正義か！ 禁句は！）

だが、気づいたところで、僕はもうどうしようもなかった。僕の意識は再び深い闇の中へと沈んでいった。

ルナビートは、月にその腰をおろしていた。地球進攻作戦、「エイプリルベース」まで、あと二日を切った。現在の日時は三月三十一日、午前一時十二分。月でこれからはブレイカーの監視を行うこ

となる。ブレイカーの軍が発見され次第、ルナビートは宇宙でブレイカーに攻撃を開始する。地球への被害を少しでも食い止めるためだ。ジャステイスたちには宇宙用の装備をさせることになっている。もし、それでも降下を許してしまったら、地球軍とクリエイトで撃退してもらうしかない。生身の人間が大気圏を突破できるわけがない。一旦帰艦させ、それから突入しなければならない。

「ブレイカーは？」

「まだ発見できません」

「そう、警戒は怠らないでね」

「はい」

シーナはそうクルーに命じる。ジャステイス達には、いつでも出撃できるように言っている。この戦い、なんとしても食い止めないといけない。この地球を守るために。帰る場所を失わないために。

周りには月と、無限にとも思える宇宙、そして、そのなかで輝く星々がある。ジャステイスはその星を見上げながら、これから起こる戦いについて考えていた。

何故、こんなことをしなければならない。どうして、戦わなければならない。戦う必要なんてない。彼らには世界がある。自分達が住める、自由にしてもいい世界がある。だが、実際はそれもかなわないのだろう。クリエイトが常にブレイカーを危険視し、基地を作ろうとすれば破壊し、軍があつまってくれば攻撃する。そんな彼らだけを見ていると、クリエイトも悪いように見えてしまう。だから、戦ってはいけない。争ってはいけない。

後ろから足音がした。ジャステイスはそちらに振り返る。そこには、いままで共に戦ってきた親友がいた。

「ジャスト……」

「もうすぐ………始まるな……」

「うん……」

ジャステイスもジャストも、戦いたくないと思う気持ちに偽りはな

い。だが、向こうは話す口も持たなければ、話を聞く耳も持たない者たちだ。手加減をして、戦いを躊躇っしまえば、こちらがやられる。殺される。

「だから、もうこれで、終わりにしなきゃ。全て」

「ああ……」

戦いたくない。だが、戦わせたくない。誰にだって、守られる命、生きることのできる命がある。命は、どんなものにも、一つしか存在しない。全く同じ命なんてない。だから、力が必要なのだ。戦いをとめる力が。

——力を闇雲に振るうだけが、守る方法じゃない。

あのとき、川沿いで少年に言われたことが浮かぶ。守ることは、ただ全てを沈黙させ、戦いを終わらせることではない。そう彼は言いたかったのだろう。

ジャスティスは、自動販売機から缶ジュースを取ると、ふたを開け、それを口につけた。

29、十年前 Act Final 正義

ようやく見えてきた家を見て、正男はほっとした。これで世界は救われた。滅びることのない世界に戻ったのだ。彼らの力を封じること。正男は、後ろの席に寝ている我が子の姿を見やった。少しばかりの傷はあるが、世界の崩壊に比べればましなのだ。

「これで……いいんだ」

一人、ぼそりと呟く。一人の少年の身が異変におかされると、世界が崩壊するのでは、スケール自体が違う。どちらをとると世界中のものに聞けば、九十九パーセントが、少年の異変を選ぶだろう。だが……。

「全員がそう思ってくれば、ありがたいんだがな……」
一人いる。少なくとも。この少年のことを誰よりも愛し、守ろうとしてきたもの。潤の母、洋子だ。彼女だけが、世界崩壊を望むだろう。

だが、もう遅い。すでに彼は複合されたのだ。世界を脅かすことのない、ただの人間に戻ったのだ。だが、複合にはいろいろとリスクがかかるものだ。代償として、禁句を設定しなければならぬ。費用もかかる。だが、世界崩壊に比べれば、この程度、なんともない。

三つの禁句を放てば、一步、世界の崩壊へと近づいてしまう。三つとも放ってしまったら、世界の崩壊は免れない。三つの禁句が、意思の開放にもつながるかもしれない。

正男は、駐車場に車を止め、潤を抱きかかえて家の中へと入る。電気のつけっぱなしの居間を覗く。そこには、意識を失ったままの洋子がいた。正男は、彼女を起こさないうちに潤をベッドに戻し、自分の物をまとめた。

正男は、とうとう家を出て行った。

一つの戦艦に、少年は降り立った。自分と同じくらいの少年を抱いたまま。

「ジャスト・キライス、帰艦しました」

少年の名はジャスト・キライス。少年を抱いたまま艦長室へと向かう。艦長室には、一人の女性が座っていた。

「失礼します。ジャスト・キライスです」

ジャストは艦長室に入る。そして、一人の少年をそばにあったソファにゆつくりと降ろした。

「ギルルとの戦闘中、頭を強打したみたいです」

「そう……名前は何？ 聴いてる？」

「炎道 正義と言っていました」

正義はいまだに意識を失ったままだ。ジャストは少し顔を曇らせて喋った。

「俺……いえ、自分の予測では、やはり記憶もすつとんでるんじゃないかと思います」

そのとき、後ろから少年の声が聞こえた。

白い天井が視界に入った。ゆつくりと体を起こす。目の前には、自分と同じ位の少年と、二十後半くらいに見える女性が、こちらに気がついて見ていた。

「あ、大丈夫？」

少年がこちらに向き直り、優しく、いたわるように話しかけてくる。

「僕は……？」

僕は誰だ、一体？ ここになぜいる？僕は誰なんだ？目の前の少年は？その後ろでこちらをみている女性は？自分は誰？

「僕は……」

「やっぱり……」

少年が小さくため息をつく。なんのため？もしかして、こうなることを予測していたのか。

「君は、記憶がないんじゃないか？」

目の前の少年が原因とも言えることを聞いてくる。そうか。記憶がないのか。だからこそ、自分の名前も出てこないんだ。

「それは……その……」

でも、認めたくはない。記憶がない？ いつからない？ いつ、自分が記憶をなくしたというんだ。

「君の名前を、俺は君の名前を知っている」

「僕の……」

記憶がないのは、どうやら信じるしかないだろう。いったい、自分の名前は、正体はなんなんだろうか。

「君の名前は、ジャステイス・ファイアだ」

「ジャステイス……ファイア」

ジャステイス。それが僕の名前。僕の姿。僕の記憶。これからは、この名前で、記憶のないままでも生きる。生きるために、守り抜く。全力で命を懸けて。守る？ 守るということは、戦って守ること。迫り来る脅威から、人を、生き物を、世界を守り抜く。

でも、なにか不思議な気がする。僕は、記憶をなくす前も、守るために戦っていた気がする。でも、あやふやな過去の記憶よりも、今日の前にあるはつきりとした真実の方が、僕に力が与えられる気がした。

「あなたも今日から、この艦の一員として、戦ってもらっわ」

ずっと後ろで僕と少年の会話を聞いていた女性が立ち上がり、まっすぐにこちらを見据えて話しかけてきた。

「この艦で……戦う？」

僕は、いまいち理解できない。あやむやな質問を無視しているのか答えているのか分からないような言葉を向こうは放った。

「そう、この艦、ルナビートだね」

これから、辛く厳しい道が続いているのかもしれない。ひょっとしたら、戦いの中で死ぬかもしれない。でも、僕は守るために戦う。いつの日か、戦いのなくなる世界を夢見て。

30、破壊の始まり

ベッドに横になっていた僕は、ようやく目が覚めた。まだ僅かにぼんやりとしている。脳の思考回路が鈍っているかのようだ。いや、もしかしたらほんとに鈍っているのかもしれない。

「うーん………今何時だ………?」

僕は今にも転びそうな足で、日にちも表示されているデジタルの時計を見た。

「四月一日………二時十二分………」

ゆっくりとデジタルに表示された日にちと時間を読み上げる。

「………ってええええっ!!!!!!」

僕は、自分でも驚くような大声を出してしまった。エイプリルベースは四月一日、つまり今日開始されるのだ。僕は急いで奈々の部屋へと赴いた。

ノックをして返事を待つ。寝ているのだろうか。返答がない。僕は焦る気持ちを抑えきれずに、ドアを開けた。奈々は部屋にいなかった。ということは、僕をおいて何処かへ行ってしまったのか。だが、諦めるのは早い。僕は全速力でチームルームへと駆け込む。ドアを勢いよく開ける。ここにもいない。僕は、掲示板の方へと急いだ。掲示板に、情報が載っているかもしれない。

あった。「ロント全軍は三時まで、ロント地球支部に集合せよ」
「地球支部………!」

僕はいうがはやいが転送装置に向かって走り出していた。地球支部のデータを開き、すぐに転送装置を作動させる。あの焦った中でも武器などはなんのまちがいもなく持ってこれていた、僕にしては奇跡に近いだろう。

転送装置が作動し、瞬く間にまわりに宇宙が広がる。かなりの速さで星々が流れていく。そして、地球支部が眼前に迫ってくる。いつもなら、その巨大さに圧倒され、流れる星に心惹かれるが、今僕

は完全に時間に引っ張られていた。

転送装置が止まる。地球支部の中を見てまたも驚いた。人がごつた返している。僕は人波に流されそうになりながらも、必死にその足を進めた。

流れから抜けれそうになった。その一步を踏み出そうとしたとき、いきなり腕を掴まれ、グイグイ引っ張られた。

「え？ うわっ……うわああっ！」

僕はまたも、人波の中に飲み込まれてしまった。僕はなんの抵抗もできないまま、ただその腕に引っ張られていた。そして、今度は反対側の方から流れを抜けれそうになった。どうやら今度は、人波から抜け出ることができたみたいだ。

「はひい……はひい……死ぬかと思った……」

「」

僕はようやく抜けられた安堵感と、またこっちにも人波が押し寄せてくるんじゃないかという恐怖感に包まれていた。

「大丈夫？ 潤」

僕はずっと僕を引っ張っていた人の顔を見やり、僅かな笑みを見せながら言った。

「大丈夫なほうがすごいよ、これ」

「あはは……ごめんごめん」

ずっと僕と一緒に戦ってきたパートナー、奈々だ。

奈々は僕の様子を確認しながらも進んでいった。着いた先には、チーム・スレイヤーの面々が揃っていた。そして、その中には新人である光も混じっていた。彼女も、ようやく居場所を見つけることができたのかもしれない。

「遅いですよ。隊長！」

修二がにこやかに出迎える。

「時間は守っていただかないと」

海がいつもながらの口調で僕を出迎える。

「初ミッションなんですから。よろしくお願いしますよ」

初めてあつたときよりもはるかに明るい顔で光が出迎える。

「じゃあ。行こう。私たちの地球へ」

奈々が、強い意志のこもった目でこちらを見た。

「うん！」

僕は、彼ら一人一人への期待に応えようと思い、決意のこもった声で返事をした。

僕達は戦う。僕達の地球を、未来を守るため。

そのためにはどんなときも、どんなことも、乗り越えてみせる。

僕ら五人を乗せたシャトルRが、勢いよく地球支部を発進した。

潤達のシャトルRが発進した二時間ほどあと。宇宙ではブレイカの艦隊が地球へ向かって突き進んでいた。

理由はもちろん一つしかない。地球侵攻作戦「エイプリルベース」を行うためだ。しかし、どんなことにも、反対者、そして阻止しようとする者はいた。

巨大な一隻の艦。情報はすでに入手済みだ。あれがルナビート。本部からは、なるべくあれとの戦闘は避け、できるだけ多くの艦隊を地球に送り込むように言われている。囹の無人艦を先行させ、本隊は敵機の後ろを回りこんで地球に降下するというものだ。降下位置は大気圏で合わせればいい話だ。最高総司令官、グール・ブレイは、高らかに宣言した。

「いくぞ！ ブレイクの諸君！「エイプリルベース」開始！！！」

北暦二〇一〇年、四月一日、午前五時〇〇分。エイプリルベース開始。

第三章 エピローグ

十年前、潤の家では、父、正男と母、洋子による口論が起こっていた。潤がそのうち、世界を脅かす存在となるから、自分がそれを食い止める。そう言った正男に反対し、潤を守ろうとする洋子を、正男は気絶させ、潤を奪っていく。「朝までには元通りにしておく」と言い残して。

何も知らない潤を乗せた車は、正男の研究施設へと向かっていた。研究施設へたどり着いた正男を拒むのは正義という青年。彼の攻撃により、少しばかり遅れをとった正男は、巨大モンスター、ギルルを呼び出し、正義と戦わせ、自分は研究施設へと入ってしまった。激戦の中で、正義の前に、謎の少年が現れた。だが、ギルルが正義を道連れにし、正義は後頭部を強打し、意識を失ってしまったのであった。

施設内では、正男は潤にとうとう複合を果たしてしまう。そして、誰もいない研究施設外から、車で自宅に帰っていった。

複合された潤に、正男は三つの禁句を定めた。この禁句が生涯放たれず、世界の崩壊を永遠に遠ざけられることを願って。そして、正男は潤をベットにおろすと、荷物をまとめて家を出て行ってしまった。

一方、ジャストと共にルナビートへと来た正義は、戦闘中の出来事により、記憶を消失してしまっていた。ジャストから、ジャステイス・ファイアという名前を受け取り、守るために戦うことを決意したジャステイス。もはや、彼の中には、正義という名前は存在しなかった。

僕、矢倉潤は、ヤルドラ基地進攻作戦を無事に終了させて、通常通りに登校していた。

そんなある日、僕は帰り道に川辺でジャステイスと会った。彼に

よれば、自分が戦闘介入をするのは、戦いを止めたいかららしい。だが、そのとめ方が悪いと思った僕は、一つの言葉を残して去った。「同じ力の種を植えても、違う使い方の花を咲かせるんだろっ」

その会話の後日、勇が失踪したのではという噂が広まっていた。実際に家に行ってみると、勇の姿はなく、両親は気を失っていた。その中にいたのは、紅龍と名乗る少年だった。彼は僕に、「意思」という言葉を発し、僕をまたあの状態に陥れた。

そのころ、ジャステイス達のいる艦、ルナビートには、紅竜という少年が、入れて欲しいと志願し、艦長シーナは、一応入艦を認めたのであった。

ようやくの目覚めからすぐに奈々から電話がかかってきた。彼女の口から放たれたのは、ブレイカーたちによる、地球侵攻作戦の計画だった……。

そして、その後、ヤルドラでのジャステイス撃退をきっかけに、かなりの入隊希望がチーム・スレイヤーにきていた。僕と奈々はそのなかから澤村 光という子をチームに入れたのであった。

僕達は、僕達の地球を、僕達の未来を守るため、シャトルRへと乗り込み、地球支部を発進した。

一方のブレイクは、ルナビートの攻撃を予測し、無人艦を囿に地球へ降下しようとしていた。そして、最高総司令官、グール・ブレイより、とうとうエイプリルベースの開始が宣言されたのであった。

北暦二〇一〇年四月一日午前五時〇〇分、「エイプリルベース」開始。

31、ブレイク艦隊を撃沈せよ！

ルナビートでは、接近するブレイクの艦隊を発見した。すぐにも大気圏に突入するかのように、こちらにかまわず突き進んでいる。シーナの元に、ジャステイスからの通信が入る。

>艦長！ 出撃許可を！ 放っておけば降下してしまいます！<

「了解。出撃を許可する。各員、発進せよ」

シーナからの許可が下りた。ジャステイスはすばやくコアフライヤーのシステムを起動させる。そして、コアフライヤーの内部に取り付けられているボタンの中で、いくつかのボタンを押した。

「ジャステイス・ファイア、コアフライヤー、行きます！」

ジャステイスのコアフライヤーが勢いよくルナビートから発進する。引き続いて、ウイング、ウイングウエポン、グローブ、レーザーガン、チェストレーザー、レッグレーザーのパーツも射出される。パーツが追いついたのを確認すると、ハッチを開け、宇宙空間に飛び出す。息を止めて宇宙空間に飛び出したジャステイスに、ウイングパーツが取り付けられる。今回ののは、宇宙用に整備してあるため、パーツを装備するだけで自動的に体内に酸素が供給される仕組みになっている。

引き続いて、ジャストがコアフライヤーのシステムを起動させていく。取り付けられているボタンの一部は、自動的にパーツを射出させるためのものだ。

「ジャスト・キライス、コアフライヤー、発進する！」

ジャステイスのコアフライヤーよりもはるかにはやいスピードでルナビートから飛び出していく。そして、それ以外にも、ダッシュ、クロウ、レーザーガン、チェストレーザーのパーツが飛び出していく。それらを体の各部分にとりつけていく。ジャストのダッシュパーツにも、ウイングと同じように、自動酸素供給が可能になってい

る。

「紅竜、コアフライヤー、出る！」

一方、初出撃の竜にも、もちろん酸素供給が可能なパーツを射出させた。コアフライヤーから飛び出した体に、パーツが取り付けられる。背中には、バズーカパーツというものが装着される。これにも酸素供給能力がある。そして、バズーカパーツは一つから二つへと分離し、背中に取り付けられる。パーツは暗緑色で、これ一つで二つの異なる攻撃が可能となっている。そして、その二つが分離して空いた背中の部分に、さらにもう一つのパーツが装着される。銀色の刃をきらめかせる、ソードパーツだ。それを鞘ごと背中に取り付ける。そして、腰にレーザーガン、胸にチェストレーザー、手にはグローブ、足の部分には、エンジン機能のついたブースターパーツが取り付けられた。

三人の戦士は、今向かい来る艦隊に向かって、その銃口を向けた。

レーダーに、巨大戦艦と人が映る。光学映像で映し出された映像には、無人艦へと向かっていくのだが、攻撃をしなければ、無人艦だとはすぐにばれる。そのためにも、すでに手は打ってある。

「無人全艦、機関砲起動！誘導ミサイルも同時発射だ！」

「はっ！」

そばにいる無人艦火器担当の兵士が返答し、機関砲の銃口を向かい来る三人に向ける。向こうの所有兵器から撃ちだされる前に、ミサイルが発射される。彼らはそれを容易にかわし、機関砲もかなりのスピードで逃げられる。

「前陣艦は機関砲、中陣艦はミサイル、後陣艦は光粒子砲を発射させる！」

「はっ！」

指示通りに無人艦が攻撃を開始する。

後ろでその様を見ていたグールは、いかにも悪魔のような笑みを作った。無人艦の攻撃をかわす三人の少年達を、鼻で笑う。

「本隊の動きは悟られていないだろうな！」

「はい。ルナビートからは、こちらになんの反応もありません」

「ならいいがな……」

無人艦隊はそれなりの艦数を出したが、本隊はその倍の戦艦なのだ。気づかれないかどうかさえ怪しいのだ。

「警戒は怠るな！」

「はっ！」

その一言を言つて、グールは再び口を閉じた。地球の大気圏には、このまま進めばもう三分もあれば突入できる。もつとも、このまま進めればだが。

機関砲をかくぐり、ミサイルを打ち落としたルナビートの戦士たちの前に、光の主砲が襲い掛かる。なんなくジャストはかわし、ジャステイス、竜もかろうじてかわした。

「あれは、もしかして……」

ジャステイスの予想通りの答えが、竜から返ってくる。

「おそらくは、光粒子砲といわれるものでしょう。太陽光を粒子状にして収束させ、それを撃ちだす。僕達のレーザーと同じような原理といってもいいでしょう」

ブレイクはすでにこの技術を開発し、戦線投入を試みたのか。これだと、やはりブレイク側にも勝機が見えなくはないかもしれない。技術面では劣るクリエーターが、果たしてあれらにどう対応しているのか。向こうはおそらくそんな技術はないだろう。地球軍ならなおさらだ、

ジャステイスは、全ての兵器を起動させる。ウイングウエポンから、八つの刃が離れ、それぞれが、戦艦の火器を狙っている。

「くそおおっ！ もうやめるんだ！ こんなことは！」

各パーツから光の弾線が迸る。一気に二、三艦を撃ち落す。爆発にまぎれているうちに、ジャストがすばやい動きで中陣に君臨する戦艦の火器を破壊していく。そして、その煙が晴れたころ、腰ために

構えたバズーカパーツから、チェストレーザー並みのレーザーが砲口から噴き出す。それが二つもあるのだ。ここまで遠距離だと命中率は激減するが、当たれば強い。一撃で沈むだろう。そう、竜の装備は、ジャスティスやジャストのように武装を狙って戦闘不能を狙うより、ともかく墮とすことで戦えなくするというタイプなのだ。

「まさか、これだけってことはないよな」

ジャストがもつともらしいことをきいてくる。ブレイク全軍で攻め込むのに、戦艦がいくつかあるだけ。これだけで攻め込もうとしているのなら、完全に、ロントの方に数負けするだろう。

そのとき、一つの通信が、ルナビートから入ってきた。

ルナビートでは、いきなり現れたもう一つの艦隊を目撃し、ジャスティスたちに通信を入れた。

「ジャスティス、ジャスト、竜！ 敵の本隊と思われる艦隊を発見！直ちに急行せよ！」

完全にやられた。おそらく、先ほど自分たちが相手にしていたのは無人艦。本体を確実に地球に送り込むための囷。無人艦でありながらこちらに攻撃してきたところを見れば、その通信技術の向上もしかと目に焼き付けることができる。

通信機の向こうから「了解」という三つの返事が返ってくる。シーナはすばやくクルーに命令し、主砲の発射準備を急がせる。

「ムーンライト、撃てーっ！」

ルナビートの中央部分の砲身から、光が収束され、一気に放出される。チェストレーザーの数倍の威力はある。

ムーンライトが一気に敵艦隊へと直進していく。向こうは避けることはできないだろう。少なくとも、一機も落とせないことはないだろう。

だが、彼女の目には、信じがたい光景が映った。

敵艦から、光の砲——おそらくはレーザー——がこちらに向かっ

て突き進んでくる。

「レーザーシフト起動！」

途端に、光の膜が戦艦群を包む。そして、直撃したレーザーが光の膜にかき消された。

「こりゃあすごいな」

「試作型とはいえ、この効果は絶大だな」

相手の母艦の主砲すらもかき消したのだ。周りのチビたちがいくらがんばったところで、このバリアは壊れないだろう。

このレーザーシフトといわれるバリアフィールドは、レーザーなど、実体のない攻撃を完全に防ぐことができる。レーザーシフトの中には、原子の中にある電子のようなものを組み込んでいる。当たった敵のレーザー等の性質を瞬時に演算し、その電力をこちらのイオン放出でかき消す。例えば、陽イオンがレーザーシフトに当たれば、シフトは陰イオンを大量放出し、互いの性能を打ち消すのだ。

以前、ヤルドラでの戦闘の際に取ったデータがここで役に立った。あのとときの翼の坊主のレーザーを細かく分析し、それをかき消すことのできるバリアフィールドを、研究員を大量に投入して開発させた。

「さあ、いまだ！ 敵が動揺している隙にこのまま降下するぞ！」

先頭の艦がとうとう地球の重力につかまり、吸いつけられるように降下していく。それに続いて続々と艦が降下していく。

「今回ばかりは勝たせてもらう。ブレイクを、永遠の種族とするために！」

とうとう、ルナビートは一艦も落とせぬまま、地球への降下を許してしまったのであった。

32、怒りのドラゴン 紅龍

降下する一隻の艦の中に、紅龍は身を置いていた。地球進攻作戦、「エイプリルベース」の協力という形で乗艦したのだ。大気圏の振動に対して、龍は近くの壁に体を預け、大気圏を突破するのを待った。

大気圏を抜け、眼下には日本があった。周りを海で囲まれ、今まではなんの不自由もなく暮らしていた国民達が今、恐怖に震えることだろう。

「地上降下準備！ 急げ！」

ゆっくりと近づいてくる緑の土地は、しばらくいくとビルの立ち並ぶ場所へと変貌していく。龍はパラシュートを背中に取り付け、降下できる状態になる。

「各員、降下！」

その命令の元、次々とブレイカー達は地表へと降りていく。龍もそれに混じり、戦場へと赴いたのであった。

一方の地表では、ブレイカー達が降下してくるのが見えた。僕達は、狙いを定めて手榴弾を投げ込んだり、ライフルで撃ち落したりして、数を僅かながら減らしていた。だが、それでも多いのには変わりはない。

「自衛隊は動いてないんですか！？」

修二がスナイパーライフルを撃ちながら聞いてくる。

「説得してもこなかったんだ。今頃パニックになって動かせないと思う」

僕は、修二の質問に返答しながらも、手榴弾を投げ込む。作戦前に渡されたもので、結構広範囲を攻撃できる。そのとき、奈々が僕らに向かって叫んでくる。

「前衛部隊より、ブレイカーの着陸を確認！」

無線機からの連絡をそのまま僕達に伝える。急いでビルとビルの間を駆け抜ける。

今の僕には、恐怖心などなかった。

ただ守りたいと言う気持ちだが、僕を突き動かしている。

僕は、強くなったのだろうか？ あのと看願ったように、まだ、力も持たぬころに抱いた願いを。動き出した運命の齒車が、恐怖心をすり潰したのだろうか。

ブレイカーは次々に地上へと降り立つてくる。前衛に到着したとき、僕は一人だけ、知り合を見つけた。

「あいつは……！」

他のブレイカーよりもかなりの力をもつ雰囲気だ。容姿も他のブレイカー達とはかなり違ふ。赤を基調とした着こなしは、いつだかも見ることがあった。

「紅……龍……！」

勇をさらい、僕に禁句を投げかけた男！ いつの間にか、僕の中には怒りが渦巻く。ここまで怒りを覚えたのは生涯初めてだったかもしれない。

僕は、右手に剣を握り締め、大きく地面を蹴って、ブレイカーの中にいる龍へと飛び掛っていった。

（やるぞ！）

「うん！」

キーラーが僕の体をのっとり、さっきよりもかなり速いスピードで龍へと向かう。目の前には、キーラーを拒むように立っているブレイカー達がいる。

「邪魔だあつー！」

キーラーは素早く剣を振り、目の前の敵の四肢の一部を斬りおとしていく。一気に龍との間合いを詰め、剣を振り下ろした。

龍が懐から細身の剣を取り出し、頭上に掲げ、こちらの攻撃を受け止めた。つばぜりあいだ。キーラーは一步も引かぬとでもいうかのような気迫でどんどん龍を押していく。

「甘いっ！」

龍が剣をしならせ、こちらを振り払う。もう一度近づこうと足を踏み出した時、龍から強いオーラが放たれた。

龍は怒りに震えていた。目の前の敵は、今この瞬間、自分よりも格上であると。だが、今なら変わる。変えられる。

「この力を解き放つ。私の命を削ってでも！」

龍の中で弾ける音が聞こえた。一気に視界が開ける。目の前の敵の動きが手にとるように分かる。これが、自分の力。

「究極の覚醒システム、『ノヴァ』。強烈な戦闘力を手に入れることができる、まさに究極」

龍の体が見るみるうちに変わっていく。体が長くなっていき、うろこで覆われた体は、どんどん膨れ上がっていく。手に鋭い爪を見せるその姿は、まさしくドラゴンだった。

「これは……！！」

巨大なドラゴンが目の前に現れる。いや、現れたというよりは、変貌したというほうが妥当だ。赤いうろこで包まれた体は、そのらのビルほどの大きさもある。さすがのキラーも驚愕したが、すぐに剣を構えなおし、再びドラゴンに変貌した龍へと向かっていった。

龍が巨大な尾を地面にたたきつけた。キラーは瞬時に僕に代わった。僕は巨大な尾を斜め前方向にかわす。そしてキラーに再び代わると、キラーはうろこをつたう様に上っていく。そして、龍の頭上まで昇りつめ、一気に剣を振り下ろす。

「はあああっ……！」

がつつりと振り下ろされた剣は、そのまま引きずるように龍の背中を切り進んでいく。ゆっくりと下りながら、龍には確実なダメージを与えているのだ。

地上に降り立ったとき、龍はしばむようにもとの姿に戻っていく。背中血でにじみ、片膝を地面についたまま、ようやく息をついて

いるといつところだった。

33、対峙

龍はその力を存分に発揮できぬまま戦闘不能となった。少なくとも、あの体では戦うことはできないだろう。一瞬の安堵を切り裂くように、龍は笑い出した。

「ふふ……ふはははっ！」

錯乱でもしたかのように笑い始め、ようやくおさまったというところでこちらに視線を向け、冷やかな声を投げかけた。

「我々はまだ負けぬ。貴様にはあの方に……マサ様に勝てるはずもないのだから！」

マサ……様？ 一体、そいつは誰なのだろうか。龍以外に仲間として見かけたものはいない。僕が見るときは、全て一人で行動していた。仲間といえる者など……。

「久しぶりといった方が妥当かな？ 潤」

自分と呼ぶ声がある。誰の声なのかは、想像がつかない。だが、いきなり、キーラーが苛立ちのこもった声で叫び始めた。

「あんたは……正男か！！」

正男……？ どこかでその名を聞いた気がした。友達にもいない。学校全体にもいない。そこいらの地域にもいない。有名人でもない。家にも……。

家？ そういえば、正男という人の名を、確か家で聞いた気がする。かなり自分に近い存在だった気がする。

渦巻く迷いのなか、一人の男が、背中にジェットパックを背負い、地上へと降り立ってきた。その姿を見た途端、正男という人物との光景がフラッシュバックされる。

彼——正男——は僕の父。母さんと結婚し、後に離婚したと言っていた。

「母さんに未練でもあるの？ 父さん」

いつの間にか、僕とキーラーは入れ替わっていた。キーラーは苛立

ちを放ちきれないのか、こちらにも怒りが伝わってきた。

「違うな。俺が未練があるのはお前だ。潤」

「僕………？」

なぜ自分に未練があるのか、僕自身分からなかった。だが、無言の質問に答えるように、父、正男は話し始めた。

「お前の家系は代々戦いの歴史を潜り抜けてきた戦家だった。そして、戦うことを恐れ、世界の破壊を望んだ。その結果、とうとうお前の代で世界崩壊の力を手に入れてしまった」

僕の家系………あんなことを言っているということは、正男は僕の家系ではないのだろう。戦いの歴史………もしかして、歴史の中にあつた戦争や戦のなかに………。

「元寇、関ヶ原の戦、日清日露戦争、太平洋戦争。それ以外にも様々な戦いに足を踏み入れ、終わらせようとしたのだ。お前の先祖は！」

否定はできない。第一、僕の先祖が何をしたって、僕が変わることなんてない。これは決められた運命なんだ。変わることもない。何一つも。

「やがてお前は、全てを、この世界を破壊する！」

いきなり正男は叫び始めた。そして、頭上に両手を掲げ、巨大な光体を作り出す。

「だから俺は！　ここで貴様を破壊する！」

その光体から太いレーザーが放たれる。この大きさでは、さすがに僕も避けれそうにない。僕の中で、今まで消えかかっていた恐怖心が再び蘇る。

「うあああつー！」

僕は目をつむった。なぜか、体が僅かに軽くなったような気がした。でも、肉体的ではなく、気分、つまりは精神的に軽くなった気がした。僕は、ゆっくりと目を開ける。目の前には、僕の知らない少年が、レーザーの直撃を受けていた。

「君は一体………！」

「俺の名はキーラー」

僕の質問に、彼は当たり前だとしてもいつかのように答えた。まさか、キーラーが自らの肉体を持つなんて………。

いや、それ以上に、僕の目の前に映る光景には、そんな気持ちをかき消すようにキーラーが叫び始める。

「ぐ………ぐあああっ!!」

レーザーなら、本当は焼き尽くされるはずだが、キーラーはそれに耐えた。耐え続けた。恐らく、自身にレーザーを吸収すると同時に、多方向に分散させているのだろう。

僕を守るために。

「キーラー!」

僕が彼の名を呼ぶと、キーラーはこちらを見ながら、僅かな笑みを浮かべ、語りかけてくる。

「大丈夫だ。お前はもう、一人で戦っていける」

僕は、僅かに震えながらキーラーの言葉に耳を傾ける。僕は声も出せぬまま、ただその様を見ていた。

「お前には、力がある。お前は、強くなっただよ」

そういうと、キーラーは徐々に光に飲み込まれていく。

「潤………生き………」

その言葉を最後に、キーラーは消滅する光と同時に、完全に光の中に飲みこまれた。僕はがくりと膝をついた。何もできなかった。ただ見ていることしかできなかった。実体はなくても、キーラーだった大事な仲間の一人だったのだ。僕はそれを見捨てた。

キーラーは死んだ。もう生きていない。

だが、かすかにキーラーの声が聞こえた気がした。キーラーは、今までも、そしてこれから、僕の心の中で生き続けている。そんな気がした。

涙が頬をつたって滴り落ちる。だが、その涙は一分も経たぬうちに枯れた。目の前にいる殺人者を睨みつける。僕は、今ほとんど感情を制御できずにいた。

僕の中で、弾ける音が響き渡った。

34、伝説剣——レジェンドソード——

僕の中に響いたあの音は、キーラーが初めて話しかけてきたときと少しばかり似ていた。だけど、あのときと今は状況が全く違う。場所も、敵も、そして、響かせた者も。

「とうとう覚醒を起こしたな………！」

震えるように声を出す正男を見上げる。恐怖で震えているのではない。怒りで震えているのだ。

「一つだけ聞かせてもらおう！」

「………」

僕は正男の言葉を黙って聞く。話すことさえ鬱陶しいくらいだ。まるで、言葉が殺されたように。

「お前は、ここにいたるまでに、力を求めなかったか？」

向こうは真剣に聞いてきていた。僕は、それに視線を揺るがせないまま返答した。

「求めた」

あのとき……。全ての始まりとなった、あの日。噂されている光の階段のことを思いながらも、僕は、生まれて初めての流れ星をみた。そして願った。「強くなりたい」と。力を欲したのだ。確かにあのときに。

「お前が力を欲したその日から、お前の人生は変わっていった。お前は、その運命に、その瞬間縛られたのだ。不幸だと思う」

「黙れっ……！」

僕は叫ぶ。目の前の、憎い「敵」を圧迫させようともいう目つきをしながら。その様子を見ていた奈々達も、僕が叫んだのには驚いているようだ。だが、僕には今そんなことは全く関係なかった。

「あなたを……。倒す！ 今日、ここでえっ……！」

僕は力の限りに叫ぶ。その瞬間、背中が妙に疼いた。僕はゆっくりと自分の背中を見る。赤く色づいた翼がその姿を現した。天使を想

像させる翼の色は紅に染まっている。紅いその翼は、どこかたくましくも見えた。

それに驚いているうちに剣がいきなり僕の手から離れる。僕は慌てて取るうとしたが、なぜか透けた状態になっている。剣が少しずつ光に包まれていく。そして、気づいたときには、剣はかなりの変貌をしていた。今までよりもかなり硬そうな、鋭そうな素材。持ち手が少し変わった形で、柄の部分に、半円のわっかがついていた。だが、僕はあまり気にしなかった。

僕は勢いよく地面を蹴る。案の定、空中に飛び出す。僕はぐんぐん上昇する。正男とほとんど同じ高さまで上り詰める。

「覚悟しろ……………」

「そちらもな……………」

僕は正男に向かって刃を向ける。すると、剣から機械音がした。柄の部分が曲がる。そして、刃の中から銃口が覗き、わっかが連結した。

「銃だと……………!？」

僕自身も驚いていたが、すぐに納得はできた。

銃と剣が一体化し、遠近全ての戦いを制し、その力をしのぐことのないと言われる、伝説の剣——レジェンドソード——!!

僕の力に呼応するかのように、これは創られたのだ。

これが僕の力。誰にも奪われることのない、最強の剣。

僕はトリガーを引いた。決意を込めた指は、初めてのブレイカーとの戦闘の際に引いた引き金に掛けられたあの時の指よりも何倍も強い決意がこもっている気がした。

銃口から放たれたのは、鉛の弾丸などではない。そんなものではないのだ。僕は、幾度かこれを見てきた。そう、レーザーだ。ジャスティスはレーザーを武器に僕と、僕達と戦ってきた。僕は、ジャスティスと対等の力を手に入れたのだ。

「ビームだっ!！」

正男はジェットパックを操作してこちらのビームをかわす。僕は体

重を前に倒し、正男に急速接近する。そして、正男の目の前で剣を振った。正男は体を反らすようにジェットパックを操作する。僕は急いでもう一振りするが、そのときには正男の姿はなかった。正男は、反ったまま体を回転させ、ジェットパックを使って急降下したのだ。

「面白い！ こちらも本気を出させてもらおう！」

正男はそう叫ぶと、ジェットパックの中から一本の短剣らしきものを取り出す。胴体ほどのジェットパックから出てきた短剣は瞬く間に一本の長刀へと切り替わる。

つまり、あの剣は短くたたんで使う短剣形態——ショートモード——と、一本の剣に伸ばして使う長刀形態——ロングモード——があるのだ。

「さっきまでとは………違う！」

僕は改めて再認識する。今までの殺気とは比べものにならないのだ。僕は、後ろに下がりしながら、正男をひきつける。正男は、僕が後退するのを知ってか、ジェットパックからハンドガンを取り出す。

ハンドガンといっても、普通は両手で持って使う物だが、正男は片手で持っていた。片手では、撃ったときの腕や肩への負担が大きくなるのだ。だが、正男は気にせずこちらに銃口を向けて引き金を引いた。

大きな銃声が響く。僕の方ではまわりの時間がゆっくりと動いていた。こちらに飛んでくる弾丸さえ、ゆったりと動いている。このままなにもしなければ間違いなく心臓直撃のコースだった。

「せやああっ！！！」

僕は動き出した時間を確認しながらも叫ぶ。そして、剣で弾丸を切り裂いた。切り裂いた弾丸は、こちらの剣の衝撃によって、分割されると同時に、真横へとその軌道を完全にずらした。

「何っ！」

僕はもう迷わない。自分が選んだ道を。自分で動かした運命を。止めようと、変えようとはしない。僕は、運命を辿る。

僕が後退を止めたのを予想していたようで、正男は一気に僕に近づいて、頭上から長刀を振り下ろす。僕も剣を振る。鋼と鋼がぶつかり合い、火花を散らしてせめぎあう。確かに、体力差ではこちらは劣る。でも！

「僕は……倒す！ あなたを……アンタを！！」

僕は一気に剣を押し力を強め、つばぜり合いを制す。がら空きになった正男へ、僕は剣の切っ先を突きたてた。

「くっ！」

正男はジェットパックを操作して、ぎりぎりのところで僕の突きをかわす。だが、僕もそれに呼応するかのように、一気に前に飛び出す。正男はジェットパックで位置を微調整し、ぎりぎりで僕の突きを再びかわす。

僕は突きの体勢のままだった。正男は右手に握られている長刀で、僕の翼を切る。幸い、軽く傷がついただけのようだが、僕の体の一部となつている翼の傷は、僕に痛みを覚えさせた。そして、傷ついた翼のせいか、僕はゆっくりと落ちていく。

「く……なあああつ……！！」

僕は落ちる叫びと痛みの叫びを同時に上げた。どんどん高度が下がり、地面が少しずつ近づいてくる。

ここで僕は死ぬのか。何も守れないまま、ここで無様に死んでいくのか……。奈々も、修二も、海も、光も、クリエイターの皆も、地球の人たちも、母さんも、この地球も。そして、勇も守れないままで……。

——どんな命も、守られる権利がある。

ジャスティスが発した言葉が脳裏をよぎる。今僕が死んだら、何も守ることはできない。僕は今まで守られ続けてきた。母に頭を下げさせ、勇に盾代わりをさせ、仲間にはただ助けてもらうだけ。キラーは、そんな自分の代わりに戦ったのだ。

僕が、ここで負けるわけには……。

恩返し欲求。それを成すための、生への欲求。

「死ぬわけには・・・・・・いかなんだああっ!!」
僕の翼は、すでにその力を取り戻していた。

35、光の翼

僕は一気に上昇し、体勢を立て直した。そして、正男の正面位置まで上りつめ、剣を真正面に構える。そして、頭上に振り上げ、同じ位置まで振り下ろす。その瞬間、翼から光があふれ出す。赤き翼から放たれる光の翼は、僕にさらなる力を与えてくれた気がした。

「負けない……もう……。絶対に!!」

僕はすでに半分は我を失いながらも戦っていた。ただひたすら、目の前の憎むべき敵を討つために。

「全力で来い！ 俺の全力をかけてやる！」

「無論……。そのつもりだああっ!!」

僕は正男に急迫する。正男はかろうじてその攻撃をよける。僕はもう一步踏み出すように一振りする。正男の右肩を僕の剣がかすれる。正男が右肩を抑える。赤くにじむ服を気にすることなく、僕は正男へと飛び込む。僕は正男の頭上から剣を振り下ろした。

だが、そのときに鉄と鉄がぶつかり合う音が聞こえた。正男が長刀を短く折りたたんだ短剣形態——ショートモード——に切り替え、こちらの攻撃を受け止めていた。

「くっ……。!!」

僕は抑えきれぬ感情を弄びながら戦っていた。怒りを静めようとはしていた。だが、体がいうことを利かなかった。

「たああっ！」

僕は、正男が受け止めていた剣を素の左手で掴み、そのまま引つ張る。正男が体勢を崩し、剣を離れた。僕はそれを後ろへと投げ捨てる。僕の左手からは血が滴っている。僕は、剣にその左手をそえる。そして、今度は正男の左肩を斬った。今度は、さっきよりも深く切れたようだった。僕はそのチャンスを見逃さない。僕は正男とすれ違いざまに左足に剣を入れる。これも深い。そして、すれ違ったあと、すぐに振り向き、剣を銃型に変形させ、右足を撃ちぬく。四肢

がほとんど使い物にならない正男から僕は少しばかり遠ざかる。そして、最大加速で正男へと突っ込んでいく。

「はああああああつ!!!!!!!!!!」

剣の矛先は完全に正男の中心を狙っていた。

何も失いたくはない。これ以上は。

今まで戦いを拒んできた。死にたくないから。自分という存在を失いたくないから。

だが、今になってそれは違うと気がつく。

こんな僕のために、守ってくれた人たちがいる。母さん、勇、奈々、修二、海、光、そしてキーラー。

だから、今度は僕が守る。この命を懸けて。

怒りをこめた刃が正男の心臓をまっすぐに貫いた。おそらく、心臓はもうほとんど機能していないはずだ。剣から赤い血が流れ出てくる。僕は勢いよく剣を正男の体から引き抜く。ジェットパックを操作するものがいなくなったためか、ジェットパックは機能を停止し、正男はゆっくりと落ちていく。

正男が地上にその体を叩きつけたところ、僕は空を見上げながらかすかな笑い声を上げていた。

「く……………は……………」

自然と、涙がその頬をつたって体を流れていく。全身の力は抜けていた。笑おうとしてはいないのに、自然に声が出てしまう。こらえようとしても涙が止まらない。僕は今、かすかな満足感で満ち溢れていた。

「やったよ……………キーラー……………僕は……………」

声も泣いてるせいかかすれてしか出てこない。それでも、僕はすでにあの世へと旅立ったであろうキーラーに話しかけた。

「僕は……………手に入れた……………」

やっとこれで、キーラーも安心してくれる。

「力を……………!!」

キーラーは死ぬ直前、生きろと言った。僕は生きる。この命を、散

らすわけにはいかない。キーラーのためにも。

僕はまだ死ねない。僕を支えてくれた、全ての人たちのために。この命が尽きるそのときまで。

ゆっくりと降下していく。地面が少しずつ近づいてくる。

だが、そこで待っていたのは、仲間達だけではない。彼らの傍に横たわる父の姿もあった。僕は、正男が――父が死んだとしても、憎む。憎み続ける。大切な、自分の分身ともいえる存在を消してしまったから。殺したから。だからこそ、父に対しての悲しみの涙は、一滴たりとも流れることはなかった。

僕は、しばし父の姿を見つめた後、黙って正男に背を向けた。正男にもう言うことなどなかった。言っても意味のないことだし、あいつに同情などするきもなかった。

だが、唐突に僕は思った。

僕は人殺しだ。

ただ憎しみだけで命ある人間を殺す。ただの殺人者だ。

ましてや、殺したのは自分の父親だ。けど……

今は戦争中だ。だから犠牲は出て当たり前なのだ。どちらか一方の戦力が尽きるまで犠牲が出続ける。周りが止めようと割って入れば、彼らも犠牲を出すことになる。それこそが、正男。自分の父。絶対に、もう振り返ったりはしない。この過去を。

「忘れる……この記憶を」

僕は決意した。僕は戦う。どんな敵とでも。

上空から、再びブレイカーの艦隊が迫ってきていた。

36、舞い降りる正義

ブレイカーの艦隊がこちらに降りてくる。そして、その艦隊の各部分から、沢山のブレイカーがパラシュートで降りてくる。修二と光がスナイパーライフルを構え、パラシュートを狙い撃つ。次々と不時着する中でも、狙われなかったブレイカーや、運良くたいした怪我をしていないブレイカーがこちらに向かって剣を振り回していく。こちらからも大勢のクリエイターが向かっていく。

上空を動き回っている戦艦の一部が、こちらに向けられた。僕は咄嗟の判断で皆に叫んだ。

「戦艦から何か来る！」

僕はいうが早い動き出していた。近くにいた海と奈々を両腕に抱え、戦艦とは反対方向に突飛する。修二と光はここよりかなり離れた場所で狙い撃ちしていた。僕はそこに逃げ込んだ。

「どうしたんですか、隊長！？」

「戦艦から何か来る」

僕のことを少し驚きながらも了解する。戦艦の砲口が光をチャージしているように見えた。幸いこちらには向いていない。それに合わせるように、ブレイカー達がクリエイターから距離を取り始めた。ほとんどのクリエイターが、砲口が存在に気づいていない。気づいていても逃げようとしていない。

砲口が大火力で噴き出す。極太の光線がクリエイター達を飲み込んだ。

「あれは・・・ビーム砲！？」

しばらくチャージが必要なのか、砲口を覆い隠す。他の戦艦がミサイルを発射し、残っているクリエイターへと向かっていく。

あんな技術を持っているとは知らなかった。ブレイクはこちらより遥に大きな技術力を持ってこの作戦を結構したのだ。それによって、こちらに不利な状況を作り出す気なのだ。

「あんな・・・！」

ミサイルはそのスピードを緩めない。一度上空へと吐き出されたミサイルは、その後、一気に下方へと落ちる様に突き進んでいく。

間に合わない・・・！！

そのとき、無数ともいえる光がミサイルを一つ残らず消し去った。僕はその光が来たほうを見上げる。六枚の蒼い翼を広げている青年。「ジャステイスー！！」

僕は、彼の名を叫ぶ。やはりとでもいうのか。この作戦にも介入してきた。これは偶然か。それとも運命なのか。ともあれ、こちらを助けたのは事実だった。

ジャステイスの傍らには、紅い風のようなパーツを装備しているジャストという青年もいた。そして、さらにもう一人、僕の知らない少年もいた。

ブレイクの艦隊が大多数のミサイルを三人に発射する。三手に分かれる三人に、それぞれミサイルが襲い掛かる。だが、その数はジャステイスが一番多かった。

三手に分かれたうちの一人、ジャステイスは正面からミサイルへと向かった。広げていた翼を閉じ、降空状態——スカイダウンモード——へと変形させる。

襲い来るミサイルの雨を回転しながらそのなかをすり抜けていく。降空状態になると、自由に空中を飛べなくなり、地面へと落ちていくかわりに、圧倒的なスピードで動くことができるのだ。ジャステイスはミサイルを全弾避けきったあと、再び飛行状態——フライモード——へとウイングパーツを変形させる。そして、ウイングウエポンパーツの刃を切離し、チェストレーザーをチャージする。同時にレッグレーザーも起動させる。チェストレーザーのチャージが完了すると、全銃口、全砲口をミサイル群へと発射した。

「当たれええっ……！」

ジャステイスの武器から、光の筋が発射された。

十数のミサイルに追われていたジャストは、なんと余裕の表情を浮かべていた。

「結構遅いんだな」

突如、ジャストは音速よもいえる速さで空中を動き回る。今まで後ろから追っていたミサイルを、今度は後ろから追う立場になった。両手にはめられているパーツから鋭利な爪を展開する。そして、追いつく要領でミサイルを切り裂いた。

周りのミサイルは消えた。だが、背後から逃げ延びたミサイルが襲い掛かる。

「おっとお」

だが、そのミサイルの存在に瞬時に気がついたジャストは腰に装備しているレーザーガンを取り出し、ミサイルへと放った。

そして、竜は襲い来るミサイルをバズーカパーツで撃ち落しながらも逃げ続けていた。今、バズーカパーツはミサイルモードへとその砲口を変える。このミサイルモードの間は大火力のレーザーを逆噴射して空中を移動することができる。そして、レーザーを使用中や、回避等の補助パーツとして、ブースターパーツを取り付けていた。

そのミサイルから逃げ切った敵のミサイル群に対して、竜は背中に取り付けていたソードパーツを抜刀し、すれ違いざまに切り込む。周りを囲っていたミサイル群は竜が離れた後、一斉に爆発した。

そのとき、ジャスティスとジャストの背後に、光の攻撃が走った。ブレイクのビーム砲だ。それによって、ジャストのダッシュパーツとジャスティスのウイングパーツが大破し、二人一緒に落ちていく。バズーカパーツのスピードでは追いつけない。だったら、今自分に行うことは、さらなる追撃を防ぐことだ！

「しっずめええっ！ー！！」

ブースターパーツを起動させ、背中のバズーカパーツをレーザーモ

ードへと変える。チェストレーザーも同時にチャージを開始する。バズーカパーツの発射と同時に、チェストレーザーも、その砲口からレーザーを発射した。

ジャステイスとジャストは互いを見やった。そして、ジャステイスは高速で地面へと落ちながらジャストに話しかける。

「ジャスト！あれを・・・！」

「できれば使いたくはなかったが・・・」

ジャステイスとジャストは同時にルナビートへと通信を送った。

「ジャステイスビート、射出！」

『ジャストビート、射出！』

37、正義の鼓動

ジャステイスとジャストには、飛んでくるあのパーツがはつきりと見えていた。ジャステイスは体勢を立て直す。このジャステイスビートは、例えるならば人の下半身だ。ゆうにジャステイスの六倍の体積を誇っている。質量も、ジャステイスの全武装——フルアーマー——の五倍の質量だ。ジャステイスは、全てのパーツを分離し、ジャステイスのいわば股間部分にその体を入れる。そして、足の部分にジャステイスは手を通す。いっぱいに入れても、足先までは入らない。そして、両腕が完全に足の中に納まると、ジャステイスをしるい鎧が包み込む。ジャステイスビートが自動的にアーマーオンにしたからだ。

そして、胸に再びチェストレーザーパーツが取り付けられる。ジャステイスビートのエンジンが動き出す。ジャステイスは近づいていた地面からゆっくりと遠ざかっていく。

ジャステイスは、再び大空に飛び上がった。今度は、白き鎧を纏った鼓動を持って。

ジャストの装備するジャストビートは、ジャステイスビートとは反対に、上半身のような構造をしている。ジャストは、穴がぼつかりと開いている首の部分から体を埋め込む。そして、頭が白い兜で覆われていく。こちらにも、オートアーマーオンの機能がついている。腕から巨大な鉄の剣が現れる。ジャステイスビートには射撃的な武装が多いが、ジャストビートには格闘用の方が多い。

『ジャスト!』

通信機の向こうからジャステイスの声が聞こえてくる。

『僕は………覚悟を決めた!』

「………ああ!」

ジャストもそれに返事をする。自分には、とうの昔から覚悟はつい

ている。人が死ぬかもしれない。守りたいが故に、その犠牲になるものもいる。ジャステイスがこの艦に来たとき、いや、初めて戦闘に向かおうとしたその日からだ。

ジャステイスジャステイスビートから大量のミサイルを放出し、ブレイクの艦隊へ向ける。艦隊もミサイルを発射し、応戦する。ジャステイスはゆっくりと後ろへと下がる。互いのミサイルがいくつかすり抜け、数発のミサイルは戦艦へ、数発はジャステイスへと向かってきた。

「当たれええっ!!」

ジャステイスはジャステイスビートの足部分のレーザーをミサイルに定める。そして、胸に取り付けられているチェストレーザーと同時にレーザーを放出する。瞬く間にミサイルはレーザーの中に飲み込まれ、爆散する。

「てえやああっ!!」

ジャストは艦隊に突進し、両腕から伸びている巨刀で艦隊をなぎ払っていく。

ものの五分で、その場は沈黙した。ジャステイスたちによって。おそらく、まだ艦隊は来るだろうし、地上にもブレイカーはいるだろう。予想通りとでもいうかのように、空の彼方からブレイクの艦隊が迫ってきていた。

僕は、目の前で起こったことが、現実とは思えなかった。一瞬にしてブレイクの艦隊を殲滅させたのだ。それに、あの二人が纏っているあのパーツは、僕達は見たことがなかったのだ。

僕はしばらくその様子を見ていた。動き出す気は起きなかった。目の前の戦いにただただ圧倒されていたのだ。僕はつかまっていた壁をすると滑りながら地面に座り込んだ。

「あんな……」

僕は、あの力に恐怖を覚えた。

初めてジャステイスをみたときも思った感情。自分の中に、二度と戻らないと思っていた感情。恐怖。

僕はあの力に恐怖した。

僕はあの力に嫉妬した。

僕は、あの力を打ち倒したいと思った。

今の僕になら、それが可能なのではないのか？

僕のなかでの迷いは、今は消えることはなかった。

38、裏切りの竜、闇の勇

先ほどまで戦っていたブレイクの艦隊を殲滅したころ、竜は感じていた。これは、自分達にしか通じないもの。自分達が分かるテレパシーのようなものを。そして、それはゆっくりと近づいてきている。

「ルナビート……エネルギーパックを頼む」

「どうしたんだ？」

「今のうちに燃料補給しておくべきだと思った」

『了解。すぐに送る』

テペーラからの通信が途絶える。いや、正確に言えば、こちらが通信したのだが。

間もなく、燃料補給用のエネルギーパックが送られてくる。それに合わせるように、彼が近づいてくるのが分かった。竜は送られてきたエネルギーパックを受け取る。そして、頃合いを見計らう。もう、はるか向こうには彼の姿が点となって見えていた。ジャスティスもジャストも、ブレイクの艦隊に気を取られていて、こちらの様子には気づいていなかった。

竜はバズーカパーツをミサイルモードに変え、進行方向とは逆に取り付けられているレーザー砲を噴出し、ジャスティス達から一気に間を開けていった。なぜか、面白いことに、そのことにすら二人は気づいていなかった。

ジャスティスとジャストは、その集中力によって、高い戦闘技術を持っている。だが、その集中力の大きさは、いわば周りのこと全てに気を配ることができないということだ。一点を追いかけてようとすれば、それ以外の標的は目に入らないのだ。

ジャスティス達とはかなりの間が空いていた。しだいに、自分の追い求めていた人物が目の前に現れた。

「兄さん……」

「久しぶり……とでも言っておこうか。竜」

そう、全ては自分達の計画のため。仲間のふりをしておけば、そのうち向こうは心を許してくるのだ。それこそが人の……人間の弱点でもある。

「竜。やれ」

「分かっている……」

竜はバズーカパーツをレーザーモードへと変える。そして、微動だにしない二人の青年に狙いを定める。

「今まで世話になった……」

小声でそう呟く。もうこれで、彼らに対する信頼は捨てた。絆も、友情も、全て捨てた。唯一残っているとすれば。

「お前たちは、敵となる。今この瞬間から」

竜のバズーカパーツから、レーザーが放たれた。

バズーカパーツの発射音が耳に入ったジャスティスとジャストは、頭を動かし、その方向を見やる。そこからは、太いレーザーがこちらにまっすぐ向かっているのが伺えた。ジャスティスとジャストはすぐに回避行動へと移る。だが、ジャスティスビート、ジャストビートは共に直撃を受ける。それぞれのパーツから警告音が響く。

「くっ……機関部大破、長時間航行不能！」

「各武装被弾！ 使用不可能！」

もはや、二人にまともな戦力は残っていなかった。

僕は、宙に浮いている二人の少年にその目をやった。一人は、先ほどまでジャスティス達と行動を共にし、たった今裏切ったようだが、そんなことはある見知った一人の男を視界に捉えた僕には全く関係のないことだった。

「紅……龍……」

僕は伝説剣——レジェンドソード——を握り締め、背中に翼を展開する。そして、その二人へと飛んでいく。

もう絶対に許すものか！

「もう何も、失うわけには………！」

僕はさらに加速し、龍へとその刃を振り下ろす。

「いけないんだああっ！！」

龍はするりとそれをかわす。そして、不敵に笑いながらパチンと指を鳴らす。

「貴様にいい土産をくれてやろう」

目の前に現れたのは、自分と同じくらいの少年の姿だ。背中には不気味な翼を生やし、その口には鋭い牙を覗かせている。その姿はまるで………悪魔。

だが、その格好よりも、その少年そのものの方が、僕にとっては大きな存在だった。

「勇………！？」

目の前にいるのは、確かに僕の親友である勇だ。こちらをじつと見ているが、その目に親友でること、かけがえのない友であることどころか、僕のことをただの他人のような目をしていた。

「オマエを………殺す！」

僕の中で実体のない痛みが駆け抜ける。僕のことから分からない………ということになるのだろうが、いや、その状態からして、僕が分かることはないだろうとは思っていた。だが、そう気づくのは後の話だ。人間、こんなときには動揺し、思考回路の流れが悪くなるのだ。

「勇！ 僕が分からないのか！」

「知る価値もない………。知る必要などない！」

勇は腰につけている鞘から細身の剣を取り出す。そして、僕に向かってその刃を向ける。僕は剣を構え、それを受け止める。だが、勇は流すように僕を避ける。

さきほどジャスティス達を裏切った少年が、自分の背負っていたバズーカのようなものを勇へと付け替える。そして、燃料補給とでもいうように何かをそれに注ぎ込んだ。僕はそれを止めようとした

が、龍が進路を拒む。

やがて、補給が終わると、勇はそのバズーカを起動し、町をレーザーで焼き払った。もはや、今の勇には理性の力ケラもなかった。「やめろ………やめてよ、勇！」

僕は必死に止めようと口を開く。だが、まるで耳に入っていないかのように、レーザーの方向を変えながら町を焼き払っていく。

「オマエにも死んでもらう！」

勇は再び剣を取り出し、頭上からふりおろしてくる。僕は苦もなくかわす。僕は、分かっているながらも、攻撃を躊躇う。そうこうしている間に、龍ともう一人は逃げていつてしまった。

——倒すなら、こいつらの方が！

僕は勇の襟を掴み、龍たちとは反対の方向に投げる。無論、そこまで飛ばせるはずもないが、時間稼ぎには十分だった。

「龍うううっ！！！！」

僕は頭上へと振り上げた剣をそのまま龍へと振り下ろした。龍は僕の攻撃をなんなくかわす。

「もうお前にやるものはない。土産は置いていったはずだ」

「人を物のように言うな！！」

僕の攻撃をかわした龍たちは、瞬間的にかなり離れたところへと逃げていた。僕もなんとか後を追おうとしたが、その進路を拒まれる。

「オマエの相手は俺だ。彼らではない！！」

その瞬間、勇は僕に剣をまっすぐに突きたて、直進させた。かろうじてかわしたが、運悪く翼に剣がささる。

「くうっ………」

勇は戸惑っている僕を蹴り飛ばした。それによって、刺さっていた剣も抜ける。

僕の中で、ノヴァの覚醒が起こる。はじける音に合わせるように、翼からは光の翼が展開する。僕は勇の数倍のスピードで動き回り、握られている剣を払った。

「なにっ………！？」

それに混乱していた勇が背負っているバズーカを、銃で打ち落とす。勇は完全非武装。もう、戦うことはできる状態ではなかった。

「くそ……………オマエ……………」

「勇！僕だ、潤だ！」

「じゅ……………ん……………？」

勇の動きが止まる。まさか、僕のこと分かるのか！？そういえば、さっきまで僕は、自分の名前を発していなかった。もしかしたら……………。

「そうだ。潤だよ、僕は！」

「潤……………なのか……………！？」

どうやら、本当に僕のことがかつているようだ。そのことに少しほっとしながらも、絶えず僕は自分の名を叫ぶ。

——その運命に、その瞬間縛られたのだ！

つい数時間前に父親から言われたことを思い出す。運命だと？ふざけるな。僕はきつと今この瞬間、勇と戦うという運命から解放されたのだ。僕の力をもって。

いつの間にか、覚醒は消えていた。けど、確かに今、僕と勇の間に再び友情が取り戻されたことを僕は感じていた。

だが、そんな僕に不幸が起こった。

遠くからこちらに直進してくる青年がいた。おそらくはジャステイスだとは思っていた。もし僕に襲い掛かってきたなら、追い返すだけだ。現に、ヤルドラの際は一応の勝利は収めているのだ。

ジャステイスはさきほどのデカブツは背負っておらず、いつもの翼を背中に取り付けていた。

「潤……………俺は……………」

「勇……………大丈夫だから……………」

「ああ……………」

その瞬間、勇の背負っていたバズーカが動き始めた。勇自身、なぜそうなっているか分からない。おそらくは、僕が先ほどこれに攻撃したときに、故障し、暴走を始めた。勇はチャージを止めようと必

死だが、全くこちらの操作を受け付けない。そこに、ジャステイスが最高速度でこちらへと突進してきた。

「こんなことは……もうやめろおおっ！！！」

一瞬の出来事だった。ジャステイスを止めようと剣を抜いたが、遅かった。

勇の心臓に、ジャステイスの円盤パーツの刃が突き刺さる。勇は口から大量に吐血した。刺さった部分からも、血が溢れ出てきた。

「勇ううううっ！！！！！」

瞬間、頭の中が真っ白になる。目の前で、親友が殺された。

蒼い翼——ジャステイスに！！

ジャステイスは、勇から円盤を引き抜いた。

勇は、力なく地上へと落ちていく。

一瞬の悲しみは、今度は長時間の怒りへと変わっていった。

39、言葉と力、決意と迷い

僕の中にある怒りは、当たり前のようにジャステイスへと向けられている。僕は剣を抜き取り、ジャステイスへと切りかかる。ジャステイスは僕の攻撃を察知し、なんなくかわす。

「あんた、自分が何をしたのか分かってるのか！」

「……っ!？」

僕はジャステイスに向かって叫びながら接近する。ジャステイスも応戦するかのように攻撃を受け止める。

「あのままにしておけば、町の人は皆……」

「この町……いや、ここ周辺には、すでに非戦闘員はいない！」

僕は本当のことを言い放つ。エイプリルベース開始の数時間前から、この一帯全てに避難勧告が出された。さすがに、いきなりは全く信じてはいなかったが、次々とクリエーターが集結し、空で戦闘があったのを確認すると、ほぼ全ての人はこの町から姿を消したのだ。もしいるとしても、物好きなアホか命知らずなマスコミくらいだ。

「それに、あの武器は故障し、暴走していたんだ！」

「え……そんな……」

ジャステイスはその表情に戸惑いを見せる。僕はその瞬間を見逃さず、剣を横振りする。ジャステイスはどうにか円盤でそれを受け止める。

「あんた、自分で言っただろ!『どんな命も、守られる権利がある』と!」

ジャステイスが僕を振り払う。僕は攻撃の手を緩めない。

「けど! あんたはその命を奪った!」

「くっ……!」

ジャステイスは、僕の攻撃を受けるので精一杯のようだった。

あのとき、まだエイプリルベースも始まっていないころ、ジャス

ティスは川辺で言っていた。「どんな命にも、守られる権利がある。僕は、その命を守りたいだけなんだ」と。だが、結局はこうしてその命を奪っていく。自分で言っていたはずだ。どんな命にも、と。それがたとえ、味方であっても、軍隊であっても、町を焼き払おうとした少年であっても！

「僕は……ジャステイス……あなたを討つ！」

僕の中でノヴァの覚醒が起こる。僕は背中から光の翼を展開させ、さらに強い力でつばぜり合いを制していく。

「どんな命も守られるなら、善人も悪人も殺さずに生きてみてよ！」僕は力いっぱい叫びながら、さらに強く押していった。

先ほどから彼の力は格段に大きくなっていた。ヤルドラの時よりも数倍に強くなっている。体に特殊な変化を起こし、戦闘能力を向上させる究極の覚醒システム『ノヴァ』。彼にも、そして、それはジャステイスにもそれはあった。

ジャステイスの中で、ノヴァの覚醒が起こった。

「それでも、守りたい命があるんだあつ！！」

ジャステイスは潤を押し返す。ジャステイスの装着しているウィングパーツから、潤と同じ光の翼が溢れ出てきた。

「まさか……『ノヴァ』!?」

潤もそれには驚いていた。まさか、ジャステイスも覚醒システム——ノヴァ——を持っているとは思わなかったからだ。

ジャステイスの持っているウィングウエポンパーツに変化が現れる。円盤の伸びている刃がそのまま外れる。そして、それ以外の七つの刃が、円盤を滑るようにまわり始めた。

七つの円盤は目で追うことができないほどに回転し、いつしか光を帯びていた。そして、回転が止まったところで、離れていた伸びている刃もくっついた。これが、ウィングウエポンパーツの真の姿、光斧——ビームアックス。

ジャステイスの円盤が変化した。光を纏ったそれは、光の斧とでもいえるものだった。だが、僕はそれに屈することはなかった。勢いよく加速してジャステイスを斬りつけた。今までにはないほどのスピードでジャステイスはかわす。ジャステイスが胸に取り付けられたレーザーを起動させる。僕はそれを後退してかわす。ジャステイスから距離が空く。僕は伝説剣を銃型に変形させ、レーザーをジャステイスに撃ち込む。すると、ジャステイスは、光斧から刃を切り離し、刃の先から放出されたレーザーでこちらのレーザーを撃ち落とした。

ジャステイスは空高くに舞い上がり、ジャステイスが装備している武装を全て起動させる。円盤を背中に取り付ける。そこから今度は八つの刃が切り離される。胸、足、背中の刃、両手の銃がこちらに向かつて一斉に火をふいた。

「当たるかつ!!」

僕はそれを素早い身のこなしでかわす。そして、今度は僕が攻撃をしかける。銃型の伝説剣からレーザーを七、八発発射される。ジャステイスは、翼を閉じ、こちらに急速下降してきた。

再び翼を広げ、光斧を背中から抜き取る。そして、それをこちらに向かつて振り下ろす。

武器を持つと同時に攻撃を仕掛ける、抜刀術。ジャステイスはそれをなんなくこなしていた。

僕はジャステイスの攻撃を受け止める。ジャステイスは、僕に向かってさらに光斧を押しながら叫んだ。

「君も言ったはずだ! 闇雲に力を振るうことが、守る方法じゃないと!」

ジャステイスの光の翼がさらに膨張する。僕も、それに負けぬほどの光が翼から溢れていた。

「けど、君は! 今こうして、闇雲に力を振るっているんじゃないのか!!」

「今の僕は、守るために力を使っているんじゃない」

僕はジャステイスの攻撃をがっちり止める。相手が押してきた分を、今度は僕が押し返す。

「あんたを討つために使っているんだ!!」

「!!」

ジャステイスは自分の攻撃をはじき返された。体がふわりと浮いた感覚になっているのであろう。ジャステイスはすぐに体勢を立て直す。

「それに、僕はさっきも、言葉で彼を……勇を止めた。正気に戻した!」

僕はジャステイスに向かって精一杯の声で叫ぶ。僕の言葉はジャステイスへの精神的攻撃を仕掛けていた。中心部の意志は固くとも、外部が脆い。戦いの中の言葉がジャステイスに少しずつ、だが確かなダメージを与えている気がした。

「もう過去に目を向けたまま戦うんじゃない!」

ジャステイスは僕の言葉を返すように言い放った。僕は過去に捕らわれている?

幼き頃、記憶にはないが正男によって、キラーと複合された。そのことに気づかぬまま、僕は母さんと共に貧しく暮らしてきた。そのときの僕には、お金はおろか、健康な肉体も、強い意志もなかった。

そして、エイプリルベースで当の正男と再会した。そして、僕が殺した。キラーと引き換えに。そして、勇も失った。僕は、そんな過去をまだ引きずっている。少なくとも、勇のことに関しては。

「過去に目を向けたまま戦っちゃいけないのかよ!」

「駄目だ! それはいずれ君自身を殺す!」

ジャステイスの言葉に一瞬動揺する。だが、僕はすぐに反論する。

「あんたは過去に何も経験していないわけではないだろう! だって

たらあんたも、いずれは自分自身を殺す!」

「僕はそれでもいい! 僕は……」

ジャステイスに向かって僕は急迫する。ジャステイスがぎりぎり

かわし、光斧を振り下ろす。

「死を恐れてはいないっ!!」

僕は振り下ろされた光斧を剣で受け止め、押し返す。ジャステイスと僕との間に、再び間合いが広まる。

僕もジャステイスも息が切れてきていた。ずっとこの状態なのだ。体力の消耗も激しいのは当たり前のことだった。

「僕は……僕は……」

翼からさらに大量の光が溢れ出る。それは町全体を覆いつくすかのようなものだ。あたりに薄赤の空が広がる。幻想的であるその翼は、潤の力の全てともいえるものであった。

「僕は……負けない!!」

40、守る創世者、攻める破壊者

奈々達のチーム・スレイヤーは、残存敵勢力を叩いていた。上空から新手が来ている。残っているクリエイターは、決して数が多いといえるものではなかった。しかし、諦めるわけにはいかない。クリエイターとして、チーム・スレイヤーの隊長として、人間として地球の住人として！

「狙撃手は戦艦を！ 近距離部隊は降下部隊を叩く！」

奈々は残っている全ての者に命令を下した。向こうはもちろんだが、こちらだって戦力の減りは尋常ではなかった。

大気圏から降下してきた戦艦の中に、他よりも一段と大きな戦艦が目についた。奈々はそれを見上げ、啞然とする。

「何………あれ………！？」

おそらくは敵の母艦であろう。その戦艦を取り囲むように護衛している戦艦群は、ミサイルを一齐に発射した。狙撃部隊が数発のミサイルを撃ち落とすが、ほとんどはなんの被害もなくまっすぐこちらに飛んできた。

「皆伏せて！」

奈々は咄嗟に指示を出す。だが、ミサイル群は奈々たちのはるか上空で爆発する。爆発の直前、紅い風がミサイル群の中を突き抜けていった。

ミサイル群を破壊した人物を見やった。紅い物を背中に背負っている青年。ジャステイスと、装備が似ている。確かこいつは、ヤルドラの戦闘の時も、ジャステイスと共に姿を現した。

「よく聞いてください！」

青年はクリエイターに向かって話しはじめ。ほぼ全ての者が、その青年に視線を送っている。奈々は、青年の顔と、後ろの艦隊と、彼の武装をかわるがわる見ていた。

「俺が周りの戦艦を撃破します。全員で、あの巨大戦艦への攻撃を

要請します！」

「わかったわ」

奈々は青年の申し入れを受け入れた。今この瞬間、ジャステイスやこの青年と争っている場合ではない。むしろ協力しなければならぬ。彼も自分達も、同じ人間なのだ。

「隊長!？」

海は不満そうに奈々を見た。海のことだ。味方と判断できない以上協力するのは危険だと。いや、すでにジャステイスは敵と決められているから、その仲間であるこの青年も敵だと、そう判断したのだろう。

「私たちは守らなきゃいけない。そのために、手段を選んでるひまはないの！」

「ありがとうございます」

青年が謝礼の言葉を述べる。彼は、それを言い終えた後に、背中を向けて飛び去ろうとした。

「あなたの名前は？」

修二が叫ぶような声で青年に話しかける。青年はゆっくりと、だが確かに、自分の名を述べた。

「ジャスト・キライスだ」

ジャストは、クリエイターたちに自分の名を名乗ったあと、一気に戦艦群へと向かっていく。自分が突破口を開かなければ、クリエイターはブレイカーたちに太刀打ちはできない。

「はああっ！」

ジャストは両手を覆っているクロウパーツで戦艦の武装を切り裂いていく。ジャストの使うクロウパーツは、地球上でも、数少ない原石を加工して作られているパーツだ。熱は通常の鉄の数十倍の温度でなければ加工できないうえ、加工には高度な技術も必要とされている。もっとも、その原石は地球以外なら、案外とれる場所もあった。

戦艦の武装を切り裂くと、次は戦艦の背後に回りこむ。そして、エンジンに向かって、チェストレーザーを放つ。戦艦はゆっくりと下降していく。それを見届けないうち、ジャストは次の戦艦を狙う。戦艦の前を塞がれる。ブレイカーだ。彼らは、ブーストパーツのようなものを足に取り付けている。レーザーのように、こちらも手に入れたのだろう。

「お前たち……」

ジャストは目の前で詰め寄ってくるブレイカーたちに向かって叫んだ。

「そこをどけええつ！！！」

ジャストの中で、ノヴァの覚醒が起こる。

ジャストの爪の後ろの方から、まるで、髪のような、たてがみのようなものが風になびくように形成された。ジャストはダッシュパーツの出力を上げ、素早くブレイカーたちに傷を付けていく。もちろん、殺すことはない。殺しても、何も得るものなどないのだ。

一瞬のうちにジャストは次々と戦艦を落としていく。手当たり次第に、武装を切り裂き、エンジンを破壊する。長いような気もするが、今のジャストは、そんなのはたいした手間ではなかった。

そのとき、巨大戦艦に向かって鉛の弾丸が直撃する。それに続くように、攻撃が戦艦に集中していく。周りの戦艦を蹴散らしたことにより、クリエイターたちが攻撃を開始したのだ。

勝ち取るためではない。皆、守るために戦っている！

ジャストはクロウパーツをつきたて、戦艦の武装を切り裂く。その勢いは止まらなかった。戦艦のあらゆる場所に取り付けられている武装を切り裂き、エンジンを破壊する。これによって人が死ぬかもしれない。いくら守るためとはいえ、命を奪えば本当に守ったことにはならない。

「これで全部か？」

ジャストは一通り戦艦群を落としていった。残るはあの巨大戦艦だ。遠方からの新手は確認できない。

これが最後の戦艦。最後の勝負だ。

ジャストはダッシュパーツを使って戦艦へと急迫し、クリエイターたちの攻撃している側の反対側へと回りこむ。これによって、向こうの誤射や、まさかの裏切りを避けることにしたのだ。

「さあ！ ラストバトルだ！ ブレイカー！」

ジャストは、チェストレーザーを巨大戦艦に向けて発射した。

41、起こった奇跡があり得ぬ偶然か

潤とジャスティスの戦いを見ている一人の男がいた。それは、潤の思う物好きのアホでも、命知らずのマスコミでもなかった。彼も、この戦争で、戦い、ほぼ全てのものに、死人と思われているはずだ。体は血にまみれていた。あのとき、剣で刺されたとき、心臓に直撃していた気がした。確かに、心臓を突き刺したと思わせる場所だった。だが、剣は心臓をかすめるかかすめないかのところで貫かれていた。

俺はまだ死んでいない。まだ、死ぬわけにはいかないのだ。

俺にはまだ、やるべきことが残っている。

「世界崩壊を止めなければ……」

男の名は矢倉 正男。そう。潤の父だ。あのとき、潤に一撃を食らわされたときには、もう終わったのかと錯覚した。そのうえ、一度は気を失っていた。だが、神は自分を見放すことはなかった。まだ、この世界で生きる権利はある。世界崩壊が始まれば、自分達の世界は完全に迷う。

世界の人々の場所がなくなるのではない。世界そのものの居場所がなくなるのだ。

実際、その世界崩壊により、三つの世界は一つの世界にまとまったのだ。そして、その中にはその世界間を行き来できるものまで現れた。

「マサ様！ ご無事で！」

上空から聞き覚えのある声が聞こえる。紅兄弟だ。

龍は、素早く正男のところまでたどり着く。龍自身、傷を負ってはいたが、正男の方が、かなりの傷だった。

「我々の場所へ帰りましょう。世界崩壊も、まだそんな近いわけではないはずです」

竜が正男の傷を慌てた目で見ながらも話していた。

「ああ。だが、次にあいつと．．．．．潤と会ったときは．．．．．」

「はい。もちろん」

龍が、正男が全て言い終わる前に返答する。

「次こそ．．．．．必ず！」

龍は決意のこもった声で答える。正男の言いたいことは分かっているのだろう。

「抹殺します」

このとき、三人はこの戦争に自分達が負けたことを悟った。だが、これで全てが終わったわけではない。

彼らは、彼らの場所へと帰っていった。

薄赤の空を映し出した少年を、ジャスティスは驚愕した顔で見ている。ここまでの力の開放は、通常のノヴァではできない。だとしたら．．．これは。

「ハイノヴァ．．．．．？」

ジャスティスは、その言葉を口にする。ハイノヴァ。それは、ノヴァを超える覚醒。

ノヴァが究極の覚醒ならば、ハイノヴァは、真の究極覚醒だ。その力は、もはや神のようなものだった。この少年は、この戦いの中で生まれた憎しみを、悲しみを、ここまで膨張させ、強くなったのだ。

これが彼の力。究極の覚醒を越えた、その先の力を手に入れた少年。

「君が本気なら．．．．．負けないというなら．．．．．」

ジャスティスは光斧を握り締める。

「僕も、全てを懸ける！！」

ジャスティスは一気に上昇し、少年同様の光を背中の翼から大量放出した。薄赤の光を放出する蒼い翼は、少年の背中に生えている紅き翼と対になった気がした。

残った巨大戦艦を相手にすることになったジャストとクリエイター達。巨大戦艦の機関砲が自分に向けて発射される。

「遅い！」

ジャストは素早くそれをかわすと、機関砲にのり、爪を機関砲の置くまで突っ込んで破壊した。軽く電気がもれている。ジャストはすぐさま次の機関砲をクロウパーツで貫く。貫いたとき、ちょうど先ほどの機関砲が爆発する。ジャストは、さらに機関砲を破壊する。

残った一つの砲台を、巨大戦艦の進入口へと強引に傾ける。進入口の壁に無数の穴があく。ジャストは、そこでさらに傾け、ひねるように砲台を壊した。

ジャストは穴だらけの壁を両爪で切り裂く。剛鉄の壁は、ジャストの爪によって、無残にも引き裂かれる。空いた穴を広げて、進入口を開く。ジャストはその中に飛び込み、中に入っていた。

一方、巨大戦艦内で、盾となっていた戦艦群が数瞬のうちに全滅したことにグールは唖然としていた。あれらの艦は、数ある戦艦の中でも、かなりの性能の戦艦だった。それをこうまで。

「何をしている！ 一体、何が戦艦を……」

『おそらく、ルナビートの者かと！』

通信が兵士達から入ってくる。なんとか死なずに済んだ彼らは、先ほどまでのことをこと細かに説明しだした。

『最初に武装を破壊した後、動力部を狙って……』

そこで通信が途絶える。グールは怒鳴るように呼びかける。

「おい！ 何があった！ 何をしている！」

苛立ちのこもったグールに対して、レーダーの担当がこちらに緊張のこもったような声で話し始める。

「クリエイター達の攻撃です！ かなりずれた位置に当たっています。が、確実にここを狙っています！」

そこに追い討ちをかけるように戦艦内の警報が鳴り響く。

「今度は何だつていうんだ！」

『進入者をかく……うわあつ!!』

内容は分かったが、通信が途絶えたのを見て、グールは、進入者がすぐ近くにいるということを悟った。

ブレイクのあまりの劣勢ぶりに、グールは焦っていた。盾となっていた戦艦群は殲滅され、この戦艦はもはや裸の王様状態だ。そこに正面からこちらを狙って攻撃され、さらには内部からも攻撃が始まっている。このままいけば間違いなくこちらが負ける。ブレイカーはほぼ絶滅するかもしれない。だが、まだ終わってはいない。ブレイカーを、地球上の永久の種族とするために。

「ええい！ 邪魔者を全て払いのける！ B3に進入者の相手をさせろ！」

「了解！」

グールの指示で、とある三人は行動を開始した。

42、トリプルカメレオンVSジャスト

ジャストは猛ダッシュで戦艦内を走り回っていた。いくつも流れていく銅色の壁や天井に、時折目をやりながら、ジャストはブリッジへと向かっていた。おそらくはそこに、ブレイクの主要人物がいるはずだ。

そんな中、妙な部屋にたどり着いた。足を止め、その光景を見やった。

さまざまな色で作られている部屋だった。赤、黄などの明るく、派手な色もあれば、緑や灰色といった暗く、濃い色もあった。

だが、その油断が凶を生んだ。ジャストがその光景に目をやっている間に、部屋は密封されたのだ。その場を立ち去ろうとしたジャストは、すでに締め切られた通路を見て啞然とした。

「な・・・！」

ジャストは驚きの声をあげる。そのとき、後ろから何かが飛び掛ってきた。ジャストはそれに気づき、すぐさま横転してかわす。

目の前に現れたのは、黄色い体をした人だ。みるところ性別は男。どこかおぞましさを感じさせる顔をしていた。だが、この男はいつからいたのだ？まさか、先ほどの部屋で擬態していたのか？

「何だ。お前たちは」

少しばかり呆れたような口調で、その身柄を尋ねる。その男はその顔のままニンマリと笑って名乗り始めた。

「オレッチはリブル。三兄弟の一番下なんであ」

それを言い終わる前に、後ろから何かが飛び掛ってくるのを察知したジャストはすぐさま横転し、再びかわす。「さすが・・・」という呟きが、ジャストにははつきりと聞こえていた。

「ルナビートのやつらはちがうねえ」

その瞬間、足を掴まれる。目の前にいる二人ではない。ジャストはダッシュパーツを加速させて上昇する。それにぶらさがるかのように

に、一人の男の姿が見えてきた。なんと、床の緑に擬態していた。

「当たり前だろナ」

「あんたら、一体……」

「オレツチはリブ……」

「あんた以外だ」

ジャストはリブルという男の言葉をさえぎる。残り二人がそれぞれ自己紹介的なものを始める。

「オレチャマはカレッツカ。三兄弟の中間でねえ」

「俺はレオン。三兄弟の一番上となっているからナ」

なっているからナ……て、兄弟だから最初からそうに決まってるだろ。と、ジャストは心の中でツツコミを入れる。あの動きからして、たいした敵ではないと、ジャストは考えていた。

ジャストは一瞬のうちにリブルに急迫し、クロウパーツを振り下ろす。だが、確かな手ごたえが感じられない。いつのまにか、リブルはもちろん、他の二人もどこへともなく消えていた。

ジャストは振り返り、色鮮やかな部屋を見回す。さきほどもここから現れたのなら、かならずこの場所にいるはずだ。

ジャストは、レーザーガンを取り出し、黄色い部分に向かってレーザーを撃ち出す。さきほどリブルがしていた色と同じだ。おそらくは、あそこのどこかに、リブルがいる。

だが、そのジャストの予想は大きく外れる。赤い部分からリブルが飛び出してきたのだ。全く分からない。飛んできたリブルをバックステップで距離をとる。よくみると、リブルは赤い色に変化している。

「オレツチの色が黄色だけだと思ったのかあ？」

リブルがジャストの腹部に蹴りをいれ、壁に押し付ける。そして、それを土台にするように、リブルは飛び去っていく。ジャストはしばし、下を見ながら、左手で腹を押さえ、歯を喰いしばっていた。
「くっ……！」

ジャストは顔を上げる。だが、そこには、リブルの姿はない。ジャ

ストが油断しているところへ、今度は次男のカレツカが足を払う。

「ちいっ!!」

ジャストはその場に体勢を崩す。そこへ、長男レオンが腹部に飛び降り、踏み潰した。ジャストは僅かに吐血する。

「かはっ!」

「どうしたのかナ?」

「もしかして、こいつ、実は弱かったりするかもねえ」

ジャストは、目の前で踊るように動き回る三人に、完全に押されていた。ジャストはゆっくりと立ち上がり、睨むように三人を見つめた。

「俺はな・・・」

ジャストはゆっくりと、かすかに聞こえるように三人に向かって言い出した。

「確かに、親友であるやつの影に隠れて動いているようなものだ」
親友。ジャステイス。ジャストはゆっくりと深呼吸をする。ジャステイスとは、自分がつけた名だ。ジャステイスが記憶を失う前の「炎道 正義」という名から考え、つけた名前だ。

自分のときはどうだったか分からない。ただ、拾われ、ルナビー
トの中に来たときには、「君はジャスト・クライスだ」と言いつけられてきた。そのときは疑わなかった。それが自分の名前なのだと誇るべきものなのだと。だが、自分の本当の名前はなんだったのだろうか。今になって気になってきた。ジャステイスはどうなのだろうか。自分の本当の名前を知りたいのだろうか。求めたいのだろうか。

「けど!影で支えているからこそ、あいつは強くなる!そして、それを支えている俺も、共に強くなる」

ジャストはノヴァの覚醒を起こす。爪から髪のように何かが伸びてくる。覚醒を起こしたジャストの目は燃えるような赤に染まっていた。

「お前たちみたいに、全員影になってるやつのほうが・・・」

ジャストは、一瞬にしてカレッカの左腕とレオンの右腕を切断する。二人は、痛がる以前に、一瞬にして攻撃されたことに啞然としていた。

「弱いんだよ！」

だが、ジャストは思いもよらぬ光景を間のあたりにした。なんと、二人の体がゆつくりと生成されていくのだ。

「俺たちは命ある限り、体のどの部分でも自動的に再生することができるんだナ」

「オレチャマ達を殺さないで、いつまでも戦うことになるんだねえ」
「ルナビートのやつらは、殺さずに戦うのが主義だったよなあ」

レオン、カレッカ、リブルの三人は口々に、ジャストを嘲笑うように言ってきた。ジャストは、一瞬にして、今度は三人の四肢と頭を切断する。

「確かにそうだ。けどな・・・」

「な・・・ばか！よすんだナ！」

ジャストは今までの中での最高速で、三人の心臓を次々にクロウパーツで貫いた。

「今回は例外だ」

三人は、四肢と頭を切断されたまま、その後動かなくなった。

ジャストは、閉ざされた壁をクロウパーツで切り裂き、空いた穴を広げて通路を作る。そして、再び高速で走り出した。

さきほどのように一瞬にして風景が流れていく（銅色の通路が風景とはいいがたいが）。そのうち、巨大な地図が見えた。ジャストは立ち止まり、ブリッジの場所を確認する。そして、ジャストは再び、ブリッジへと向かって走り出したのであった。

43、それが運命

ジャストはブリッジとドアを蹴破った。席に座っている兵士達が一斉に銃を向ける。

「何をしに来たのかね？」

艦長席に座っていたグール・ブレイが、こちらに振り返り、問いかける。

「できることなら、こんな戦争をやめさせるためだ」

ジャストは冷徹とも言える口調でグールに返答した。今、彼はノヴァの覚醒を起こした状態にあった。

「できないなら？」

「お前を殺す」

ジャストはきつぱりと言い放つ。当然、やめるとは思えなかった。もし、「分かった。もうやめよう」などと手をついてきても、油断はできない。

「人を殺すのはルナビートの主義に反するんじゃないのか？」

「今回ばかりは、全部例外だ」

ジャストは再度、グールに向かってきつぱりと言い放つ。グールは背中に装備していた剣を抜き取ると、こちらにその刃先を向けた。

「なら、できないと君に答えを出そう」

「覚悟はできてんだな！？」

「当然だ」

その瞬間、二人はその体をぶつけ合った。グールは剣を振り回し、ジャストを狙う。ジャストは、それを素早い身のこなしでかわしていく。いくらブレイカーの頂点とはいえ、心臓を一突きすればまちがいなく死ぬ。

「なかなか！」

グールは足を払うように剣を振った。ジャストは飛び跳ねる。だが、それを狙っていたように、グールは一回転して今度はジャスト本体

を狙ってきた。

「連転斬破！！」

グールはジャストに剣を直撃させる。かるうじて、ぎりぎりのところでジャストはその剣をクロウパーツで抑えていたが、さすがに胸の前で防御するには、無理な体勢だった。

「読みが甘い！！」

グールはジャストの横っ面を右手で剣を持ったまま、左手で殴りつけた。ジャストは耐え切れず、吹っ飛ばされる。

「やれ」

グールは周辺にいる銃兵に指示を出す。壁際に寄せられているジャストの周りには、すでに銃兵がいた。

全員の銃が一齐にジャストに向かって撃ち出された。全くの揺らぎのない弾だ。頭を狙っている者もいれば、心臓を狙っている者もいた。

銃弾が全て撃ちつくされると、銃兵は一齐にリロードを開始する。

「さらばだ、青年よ」

「だれがさらばだって？」

ジャストは、一発の弾丸も食らってはいなかった。ジャストは体の前で腕を交差させている。まさか、あれで防げるはずもない。

「ええい！はやく撃て、ばか者！」

それに急かされて銃兵たちは再度、一齐に銃弾を発射した。

「クロウフィールド！」

ジャストはクロウパーツのエンジンを起動させる。それに呼応して、爪と爪の間に、膜が張られる。全ての銃弾は全てこれに防がれていた。

さらに、このクロウフィールドは、体全体を包むため、どこに撃つてきても、全てはじき返す。

ジャストは、服を滑らせ、体を半回転して向きを変える。そして、勢いよく壁を蹴って、銃兵達の弾幕を脱出した。この様子だと、ここにいる誰もがそれに気づいてはいない。

「撃てっ！ 撃ち殺せええっ！！」

グールもまたこれに気づいてはいなかった。ジャストは、グールの後ろに回りこむと、その場で大回転をし始める。グールや銃兵はもちろん、管制の者達も気づいてはいない。

「吹っ飛ばええええっ！！！！」

ジャストはクロウパーツをグールの服に引っ掛ける。そして、そのまま外へと放り投げる。グール及び、ブレイカーたちは、一瞬のうちの出来事に唖然としていた。グールは、ブリッジのガラスを突き破る。

「な………いつの間に！！」

その光景に唖然としている銃兵達を、一気に切り裂いていく。銃を全てレーザーガンで焼き払う。グールが割ったガラスに飛び込む。そして、落ちながら、管制のブレイカーをレーザーガンで撃った。

グールは、ジャステイスやあの少年のように、飛行能力はなかった。簡単に言えば、ブレイクは技術的にはロントを上回るものの、戦術的、能力的には、圧倒的にロントに負けていたのだ。やがて、クリエイター達による巨大戦艦への攻撃が、グールに直撃する。槍やら剣やらを体に刺したまま、グールは落ちていく。やがて、その攻撃はジャストにも近づいてくる。

「悪いけど、俺は当たるような奴じゃないんでね！」

ジャストは音速、いや、それ以上ともいえる速さでそこを通り抜ける。だが、安全のためにも、左手ではしっかりクロウフィールドを展開していた。

ジャストは、一気にグールとの距離を詰める。ここまで近づくと相手の声も聞こえる距離だった。

「お前はなぜ、ルナビートで戦う！ 我らの邪魔をする！」

「守るためだ。全ての命を」

ジャストは両腕を後ろに引く。そのうち、ぐんぐんとジャストのクロウパーツが巨大化していく。グールは少し焦るような顔で叫んだ。「闇雲に力を使って、全ての命が守られると思うな！！」

ジャストはゆつくりと深呼吸をしたあと、叫びながらその腕を動かした。

「ご忠告どうも!!」

落ちているグールには、その爪は避けられるはずもなかった。

なんとか最後の足掻きで動こうとしたが、たいした成果は挙げられなかった。

「死神が!!」

「わりいけど、俺は死神じゃない」

ジャストは二つの巨大な爪でグールを挟み込んだ。

キルサイズスクロウ
「殺神の鎌爪!!」

「ぐなああああつ!!!!」

グールは殺神の鎌爪に体を貫かれる。体から血という赤い液体がふきだす。グールの血は、グールよりもはるかに遅く落ちていたため、まるで上がっているように見えた。グールの血はジャストを避けるように上がっていく。

「むしろ……殺神だいふこがみな」

僅かな笑みを浮かべる。ジャストは体勢を立て直す。頭上から、先ほどのグールの血が落ちてくるのを察知したジャストはすぐにその場を離れた。

ロントとブレイクの戦いは終わった。あとは……………。

「頼むぞ。ジャステイス」

薄赤の空が広がる中、紅い翼と蒼い翼はいまだにらみ合っていた。僕は力ないように腕をたれ下げる。それを見過ごさないとでもいうように、ジャステイスは突撃してくる。もちろん、これは僕の作戦だった。

ジャステイスが光斧を振り下ろす。僕はそれをかわし、ジャステイスの左翼を斜めに切り捨てる。蒼い翼の破片が空中に飛び散り、ジャステイスのバランスが崩れる。僕はすかさず振り返り、ジャステイスに迫るが、ジャステイスのレッググレイザーがそれを阻む。ぎ

りぎりですれをかわすと、もう一度攻撃をしかける。しかし、渾身の一撃はかわされる。そして、すれ違った直後に、ジャスティスは僕の紅い翼を斬った。

「くああっ!!」

なんとか直撃は免れたが、光斧の攻撃は焼け付くような痛みを覚えた。僕も、ジャスティスと同じように体勢を崩す。それを狙って、ジャスティスはこちらにまっすぐ突っ込んできた。僕はすぐに振り返り、伝説剣でつばぜりあいを持ち込む。だが、ジャスティスはそこで僕に銃を向けた。あのレーザーの出る銃だ。

「聞かせてくれ。君の名前は？」

「潤。矢倉 潤だっ!!!」

そういうと、ジャスティスの光斧を押し返し、一気に攻め込む。銃型に変形させた伝説剣でジャスティスの銃を撃ち落とす。そして、光斧を伝説剣で押さえつける。僕は、ジャスティスの蒼い翼の右翼を蹴り飛ばす。一番下の翼が一つまるまるとれ、地上へと落下していく。やはり体勢を崩したジャスティスの光斧を、根元から斬り落とした。

「絶対に……負けるもんかああああっ!!!!!!」

僕は、力の限りに叫んだ。

44、終焉、運命と正義と

僕の中には本当にもう迷いはなかった。僕はバランスを崩し、安定して滞空もできていないジャスティスより、少し距離をとる。そして、伝説剣を胸の前で構える。そのまま、なんお躊躇いもなく突きの攻撃をジャスティスに向けた。

「うおおおおお！！！！」

この一撃で決める。この一撃で終わらせる。

そんな思いが僕の中でわきあがる。もうこれで、本当に終わらせる。僕は、不幸な人間なのかもしれない。父親を殺し、その父親によって植え付けられた意思の人間を殺され、親友まで失った。

でも、僕は絶望を、悲しみを、力へと変えた。怒りという感情に手を貸してもらい。

ジャスティスは奇妙な行動に出る。なんと、各パーツを分離し始めたのだ。そして、それをジャスティスは自分の前にまとめて放り投げる。欠けた蒼い翼もろとも。

「これでえええええつ！！！！」

僕はそのパーツの中も構わず突っ切る。思ったより重量がある。僕は痺れを感じる。各パーツ内の電気がショートし、伝説剣を伝って僕に電気を送り込んだのだ。

それによって、僕の勢いは弱まる。だが、各パーツを伝説剣は貫き、その切っ先は、ジャスティスの心臓に浅くながら突き刺さっていた。

僕はすかさず追撃を食らわす。微妙にずれた位置に、伝説剣を突き刺す。僕は、体が痺れていることなんてどうでもよかった。

もしこのまま死んでもいいと思った。仇を討てたのだから。

ジャスティスは、潤の攻撃によって意識は朦朧とし始めていた。各パーツを放り投げ、ショートした電気でそのまま止まってくれ

ばよかった。だが、彼が止まることはなかった。まっすぐに、しかし横暴に彼は僕を突き刺してきた。

「うああああああ！！！！！！」

ジャステイスは力の限りに叫んだ。負けたのだ。自分は。

パーツを全部壊してしまったことを、艦長は、ジャストは、テペーラはどう思うだろうか。もし怒っているなら、許されないなら。

僕はこの命を消すことで償おう。

もし、運良く生きていたら、戦いを止め続けることで、償おう。

ジャステイスは、死を覚悟した。だが、まだ自分にはやることがある。生き続けなければならない。自分は、いつからか記憶を失っている。ジャステイスはすでにそのことは気づいていた。おそらくこのジャステイス・ファイアという名前は本当の名前ではないのだろう。本当の名前があるはずだ。自分も、艦長も。テペーラも、他の皆も、そして、ジャストも。

「ジャアアストオオオオオオオ！！！！！！」

ジャステイスは、精一杯、親友の名を呼んだ。

共に今まで戦ってきた戦友の、ずっと一緒だった親友の声が聞こえた。その声は自分を呼んでいる。ジャストはゆつくりとジャステイス達の方を見る。一人の少年は、何かを貫き、そのうえで、もう一人を突き刺している。突き刺されているのが、誰なのかははっきりと分かった。

突き刺されているのはジャステイス。

自分の友は、今、ゆつくりと空から落ちていく。

落ちることなんてないと思っていた。

あの翼は、傷つけられないと思っていた。

ジャステイスが、負けるはずはない。

しかしジャストは、出撃前にジャステイスに言われていたことを思い出した。

「ジャスト。もし、もしもだよ」

ジャステイスは真剣な顔でジャストに問いかけた。

「僕が負けることがあったら、君の名を呼ぶ」

「負けるわけない。お前はいつだって、気を抜いたことはないだろう？」

「だから、もしも」

ジャステイスは少し微笑む。そして、ゆっくりと出撃準備を始める。

「悔しいけど、負けたらそれまでだから」

ジャステイスはコアフライヤーのハッチを開け、コアフライヤーに乗り込む。ハッチを開けたまま、ジャステイスはジャストに語りかける。

「情けないけど、そのときはもし、僕が死んでいても、助けて欲しい」

「そんな縁起でもないことをいうなよ」

ジャストはジャステイスを抑えるように口を動かす。小声ではないが、聞き取るのは難しい大きさだった。

「まあ、用は何が起きてもいいようにしろってことだ」

竜がジャストの肩を軽く叩いて、自分の乗るコアフライヤーへと向かっていく。このときのジャストには、そういうことかと理解はできたが、行動に移すことはできるのかどうかは分からなかった。

今になって、竜のあの言葉は、自分達に対する忠告だったのだろう。何が起きても……。それは、死でもあれば、裏切りでもあった。

ジャストはDパーツを最大出力で起動させる。落ちていくジャステイスをしつかりと抱きとめる。

「ジャ……ス」

「喋らなくていい。今は」

「うん……」

ジャステイスとジャストは、そのままルナビートへと向かっていっ

た。

二人は、この戦いに負けたことを、改めて悟った。

翼すら失い、力を失ったジャステイスが落ちていく。途中で誰かがジャステイスを抱える。ジャストというあの青年だ。彼はジャステイスを抱えたまま、どこかへと飛んでいってしまった。

いきなり、目の前で爆音が起こる。パーツが壊れ、爆散したのだ。
「くう……」

僕は伝説剣で身を守る体勢を作った。もう、かわす力も残っていないかった。この防御姿勢も見ただけだ。

僕は一気に吹き飛ばされる。翼はすでにない。僕にも、ジャステイス同様力は残っていなかった。僕はどうすることもできないまま、ただ静かに落下していった。周囲に奈々達の姿は見えない。見捨てたのか、あるいは追いつけなかったのか。

そのとき、誰かが僕を抱きとめる。まだ僕は空中にいた。あちこちのビルも、まだ僕より低い位置にある。僕はゆっくりと顔を上げる。そこには、蒼い翼を取り付けているジャストがいた。そう、パーツは個々のものではない。共有しているのだ。ジャストはそのまま、奈々達の所へと僕を届けた。僕は、もうほとんど意識はなかった。

強烈に、しかし微弱に。激しくもあり、優しくもあるような眠気と疲れが、僕を包み込んでいった……………。

45、終わりと始まり

僕は、あのとき死んだのではと錯覚した。体中に電気が走り、灰になりうる爆発が僕を突き出し、パーツの破片は僕を襲うように飛び散った。

しかし、僕はまだ生きていた。生きて、この世に残り続けていた。僕はゆっくりと体を起こす。誰かにそつと手で抑えられる。抑えてきたのは誰かは分からない。だが、優しい手だった。今気づいたが、目には白いガーゼで作られた眼帯が左目を覆っている。いや、左だけではない。右目も眼帯で覆われていた。僕は、それを外そうと腕を持つてこようとす。今度は痛みが僕を押さえつける。

「ここは………？」

誰かがいると思い、ゆっくりと、そして静かに、誰かに語りかけた。「リエイトよ」

女性の声が聞こえてくる。高く、透き通る声は、僕を助け続けてくれた相棒——奈々の声だった。

「僕………死んで………」

「ジャスト・キライスって人が、潤を助けてくれたの」

「ジャスト………」

その青年の名前を呟く。そうか、彼は、ジャスト・キライスという名前だったのか。今まで、予想からジャストという名前を使っていたが、これでようやく確信がついた。

「皆は………日本は………」

「皆それぞれ休んでる。日本の自衛隊も来て、復旧作業が始まっている」

あれだけの被害を、都市部が受けたのだ。一月二月で復興作業が終わると思えなかった。

「でも、今潤が心配することじゃない。だから………」

「うん………」

奈々の言いたいことは、僕には分かっていた。僕は、またいつか、自由に動き回れるときがくるだろう。

いつか、きっと。

ルナビートでは、ジャステイスの治療が行われていた。ルナビートは、本部へとその船足を速めながら向かっている。かなり速いが、宇宙空間だけに、かなり遅く感じられた。管制の情報だと、二百五十キロは出ているらしい。

「ジャステイス……」

ジャストは、あの日の言葉を思い出していた。

——悔しいけど、負けたらそれまでだから。

「負けたら……それまで……」

ジャストはジャステイスのベッドに拳を乗せ、その横で膝をついた姿勢で下を向いた。彼の口調は、涙声だった。近くにいた医師が、気を使ったのか、奥の部屋に入っていく。

「まだ……お前は死ねないだろ……」

ジャストの涙が頬を伝い、顎のところで地面に落ちる。医務室の自動送風によって、ありもしない風でジャストの髪がなびく。風は涙が伝った道筋を、冷たくした。

「やることは……まだあるだろ……」

ジャストは、泣き止むことはなかった。

北暦二〇一〇年。この年、クリエイター、ブレイカーを除く全ての人間が驚愕する出来事が起こった。

「エイプリルベース」と称された大規模地球進攻作戦。その存在を信じていなかった日本政府と自衛隊は、対応が遅れ、到着したころにはすでに戦闘は終わっていた。

人々は、クリエイターを神と称した。自らの命を懸けてでも、この地球を、日本を守ろうとした存在として。一方で、蒼い翼、ジャステイスのことも知れ渡った。

もちろん、それ以上に、クリエイターでもあり、空を自在に飛び

回ることのできる紅き翼を持った潤もまた、英雄として、もてなされることになった。

彼らは、それぞれが見守られながら、ゆっくりと治療を続けている。ぶつけ合った力は、交じり合った剣は、彼らの中で、過去のものとなっていく。

しかし、全ては始まりにすぎない。彼の、彼らの運命は、まだ途中であつた。

終わりではない。始まりなのだ。

それは、誰が予見した出来事と繋がる。潤が複合人間としての性質がなくなった今、彼らには、ある大きな異変が迫り始めているのである。

それは、まだ彼らは知らない。だが、運命から逃れることはできない。

45、終わりと始まり（後書き）

THREE WORLDはこの話で完結いたします。

打ち切りではなく、とりあえず完結させておく形であるため、次の作品をお待ちいただき、そちらにも目を通していただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2471r/>

THREE WORLD

2011年7月5日09時25分発行